Vol.74 通巻855号　平成5年6月25日発行　毎月1回25日発行　昭和24年3月19日第3種郵便物認可　ISSN 0912-8182

建築と社会

ARCHITECTURE AND SOCIETY

1993
6

特集　都市のスカイライン



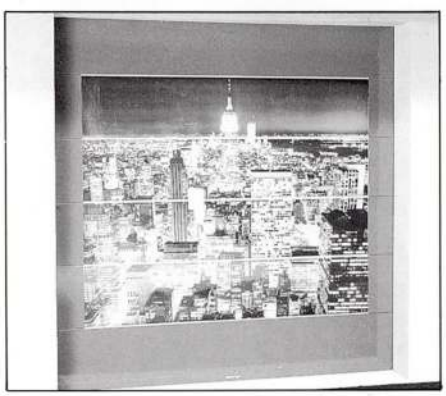
日本建築協会



シャッターに描かれたメッセージが、閉店後のお店をアピール。

絵や写真、文字、ロゴタイプなどを使って自由に描けるスクリーンと、バックライトを、シャッターに組み込んだ〈アドビジョン〉。浮かびあがる美しいメッセージが、閉店後のお店を効果的にアピールし、前を通る人に、お店を強く印象づけます。
〈アドビジョン〉は、今、新しい時代の、新しい扉を開きました。

アドビジョン



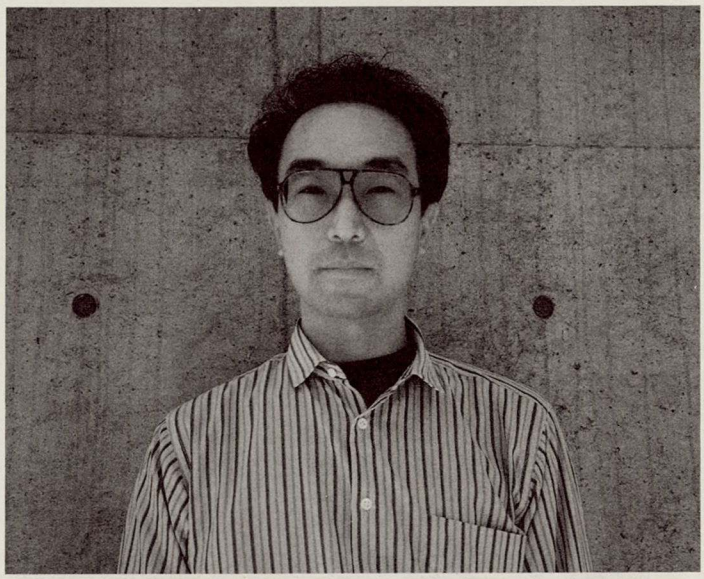
東洋シヤッター株式会社
本　社／大阪市中央区常盤町1-3-8(日本生命谷町ビル) 〒540 TEL.06 943-6571㈹　東京本社／東京都港区六本木6-3-18(第一地所麻布ビル) 〒106 TEL.03 3479-2911㈹

会告

30's EYE 21世紀へのエスキス
第1回
浜田有司
神戸市・アーキテクチュアフェア・プロデューサー
「景観行政の現状とその功罪」

21世紀を間近に控え、社会情勢は急激に変化しつつあり、また様々な情報に満ちあふれています。私たちは現在、何をなすべきでしょうか。また同世代の人たちは何を考え行動しているのでしょうか。
従来の講演会形式とは違う「語り合い、情報交換を行う場」をつくりたいと考えています。30代を中心に様々な分野でご活躍の方々をゲスト講師に迎え、「30's EYE-21世紀へのエスキス」をテーマにシリーズ化していく予定です。今回はその第1回です。気軽にご参加下さい。　(若い会員の集い小委員会)

日　時　1993年**7**月**30**日(金)
18:30～20:30
会　場　日本建築協会サロン
※大阪駅前第3ビル21階
講　師　浜田有司／神戸市
定　員　30人／申込多数の場合は抽選
参加費　会員 1,000円、一般 1,500円
※含、飲物・消費税
申　込　7月23日(金)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
1)催し名(30's EYE)、2)氏名、3)会員・一般の別、4)勤務先、5)参加証送付先、6)電話番号をお知らせ願います。
※参加証を7月26日(月)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
〒530 大阪市北区梅田1-1
大阪駅前第3ビル21階
FAX.348-0634 TEL.348-0633
主　催　㈳日本建築協会
若い会員の集い小委員会
担当　松隈　章／竹中工務店

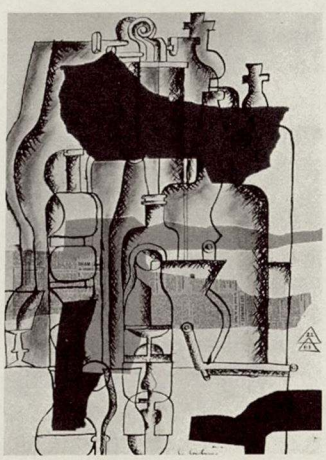


私は京都大学時代、三村浩史研究室において伊勢川崎町の保存対策調査などを行い、大阪大学では、川崎清研究室で吹田キャンパス計画、徳島県文化の森基本計画などのプロジェクトやコンピュータを利用した都市のCGモデル化作業に携わりました。
昭和58年神戸市役所入庁後、8年間にわたり教育委員会文化財課に所属し、重要文化財の保存修理や条例による文化環境の保護、さらに市内の近代建築・社寺・民家の悉皆調査などを行ってきました。なかでも異人館のある北野町では、異人館の修理をはじめ、新建築のデザイン誘導、歩道整備などのデザインコントロール、さらに地元住民活動支援など、ソフト・ハード全般にわたる町並み保存を進めてきました。一昨年は、新しく創設された都市計画局アーバンデザイン室1期生として、アーバンデザイン基本計画に着手し、神戸市全体にかかわる景観コントロールシステムの研究を行い、試験的事業をいくつか実施しました。
現在、住宅局で、アーバンリゾートフェアの中核「アーキテクチュアフェア」を担当し、まちと建築への一般の関心を高めてもらうためのソフトイベントを企画しています。
今回は、これまでの経験をもとに「景観行政の現状とその功罪」をテーマにお話したいと考えています。

(浜田有司)

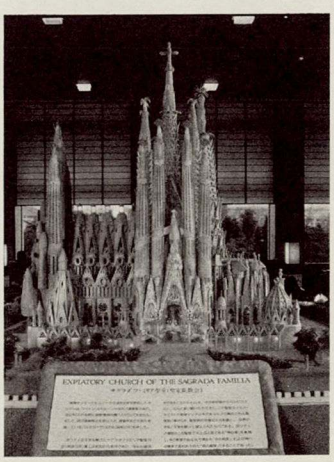
浜田有司(はまだ　ゆうじ)
1957　神戸市生まれ
80　京都大学工学部建築学科(都市計画専攻)卒業
83　大阪大学大学院工学研究科(環境工学専攻)修士課程修了
現在　神戸市住宅局営繕課　勤務
アーキテクチュアフェアKOBE事務局・プロデューサー

アーキテクチュア・フェアKOBE
「創造博物館」
―まちと建築の未来展―
コルビジェ展
建設技術展
会場は神戸郵船ビル



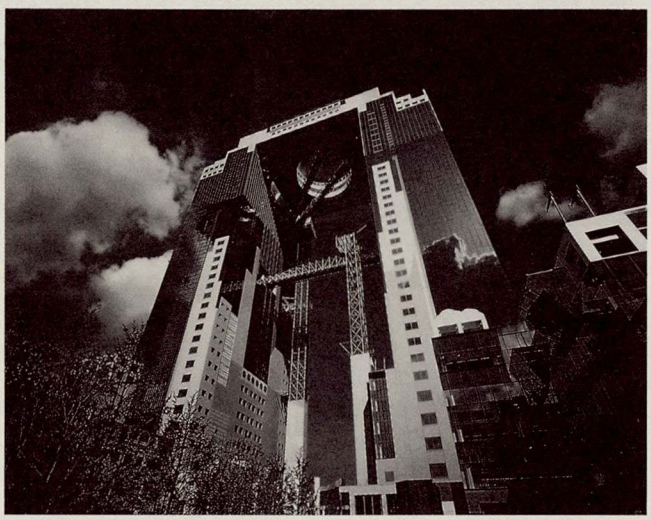
■コルビジェ展
画家としても有名だった建築家・コルビジェの絵画約100点が、大成建設から出展されます。(左は、出展作品の一つ「コンポジション」)
日時　1993年**7**月**1**日(木)～**11**日(日)

■建設技術展
超々高層ビルやジオ・フロント計画など、未来都市を模型やパネルなどで展示します。出展は建設会社や神戸市建築協力会。(右は、ガウディの聖家族教会の模型)
日時　1993年**7**月**16**日(金)～**25**日(日)
〃　**7**月**30**日(金)～**8**月**8**日(日)



新梅田シティ 梅田スカイビル 見学会

新梅田シティは、JR大阪駅北西部に位置する42,000㎡の敷地に、『人に優しい街、大阪の新名所となる、市民に開かれた賑やかで活気のある街』を目指して展開してきた、民間では最大規模の複合都市開発プロジェクトです。中でも、世界初の連結超高層『梅田スカイビル』は、快適性、安全性、経済性に優れています。また、カーテンウォールが空に溶け込み、２棟の連結部『空中庭園』が天空に浮かぶ都市をイメージさせます。用途は、オフィスを中心に、フィットネス施設、多目的ホール、貸会議室、商業施設等、空中庭園は飲食施設と展望台で構成されています。



また敷地の89％を占める外構計画では、ランドスケープが建築を規程するという考えにたち、直径70ｍの円形に本物の雑木林と渓谷を再現した『中自然』や、3,000坪の原っぱ『花野』等を創り、自然のダイナミズムを内包した新しい環境を提案しています。
今回の視察では、開発経緯と施設概要の説明後、梅田スカイビル内の一般オフィス、エグゼクティブオフィス、フィットネス施設、貸会議室、多目的ホール、機械室、商業施設、空中庭園、そして外構へご案内致します。

（積水ハウス）

●建築概要

所在地	大阪市北区大淀中1-1
事業主	積水ハウス 東芝 ダイハツディーゼル
総合企画・監理	積水ハウス
設計・監理	原広司＋アトリエファイ建築研究所 木村俊彦構造設計事務所 竹中工務店
ﾗﾝﾄﾞｽｹｰﾌﾟ	吉村元男＋環境事業計画研究所
施工	竹中工務店・大林組・鹿島建設 青木建設共同企業体
敷地面積	41,782㎡
延床面積	タワー棟 128,320㎡ ガーデン棟 8,130㎡ 地下店舗 4,570㎡
規模	タワー棟 地下2階、地上40階 ガーデン棟 地下2階、地上6階（一部５階）
構造	S、RC、SRC
最高高さ	173m
工期	1990年６月～1993年３月

日時　1993年**7**月**19**日(月)
13:30～16:30
定員　70人
＊会員限定
＊申込者多数の場合は抽選
集合　新梅田シティ・梅田スカイビル・タワーイースト（東棟）21階プレゼンルーム
大阪市北区大淀中1-1-88
＊JR「大阪駅」より徒歩約10分
内容　説明＋見学／空中庭園、オフィス、多目的ホール、商業施設、外構等
＊ホテルは除く
参加費　500円
申込　７月９日(金)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
1)催し名／梅田スカイビル見学会
2)氏名
3)勤務先
4)参加証送付先
5)電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を７月12日(月)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
〒530 大阪市北区梅田1-1
大阪駅前第3ビル21階
FAX 348-0634 TEL 348-0633

第13回大阪まちなみ賞（大阪都市景観建築賞）募集要項

個性と風格のあるまちの景観づくりをすすめていくため、周辺環境の向上に資する優れた建物やまちなみを表彰する「大阪まちなみ賞」では、本賞にふさわしい建物・まちなみの推薦を呼びかけています。

●対象
大阪府域内の建物（昭和63年８月～平成４年７月末に完成）、および建物を中心としたまちなみ（平成４年７月末までに完成）

●推薦方法
ハガキに、推薦物件の名称・所在地・完成時期・推薦理由・推薦者氏名・連絡先住所と電話番号を記入して、大阪都市景観建築賞運営委員会（〒540 大阪市中央区常盤町1-2-17 大阪府建築士会内 TEL06-947-1961）へ郵送のこと。

●受付期間
平成５年７月１日(木)～７月31日(土)

●発表
平成５年10月下旬（表彰式10月28日）

●審査委員
安部大就（造園）、今井範子（建築）、岩井珠惠（ビジュアルデザイン）、紙野桂人（都市計画）、児島修二（色彩）、清水実（建築）、高橋叡子（文化）、寺本敏則（建築）、徳田二美郎（建築）、パトリス・ボワトー（国際文化）、藤崎安弘（建築）、溝神宏至朗（建築）、宮井市太郎（報道）、柳本精三（報道）、吉川博教（デザイン）の15氏

●主催
大阪府、大阪市、㈳大阪府建築士会

●協賛
㈳日本建築協会ほか

本会・前理事中島　一氏 彦根市長に当選

去る４月25日、中島　一（はじむ）氏が現職候補に大差をつけて、居住地・彦根市の市長に当選しました。建築設計界からまた一人、市長の誕生です。
中島氏は、1947年に名古屋工業専門学校（現・名古屋工業大学）を卒業後、竹中工務店、建設省、滋賀県土木部を経て、1968年愛知工業大学教授に就任。多くの市町村で都市計画の問題にかかわり、その一方で、日本建築協会理事として、またその東海支部長として、東海地方での本会開催事業を牽引し、「建築と社会」誌の東海支部特集では、編集委員を率いて企画を進め、インタビュアに、取材に飛び回りました。市長当選に伴い、本会の要職も退き、彦根市長として分刻みのスケジュールで活動を開始されています。

平成５年度

日本建築協会役員会務分掌(敬称略)

名誉会長	東畑謙三	(東畑建築事務所)	
〃	塚本猛次	(日建設計)	
会長	佐野正一	(安井建築設計事務所)	
副会長	三品哲夫		総務・会計・事務局担当
〃	金多潔	(京都大学)	研修・編集担当
〃	薬袋公明	(日建設計)	研修・編集担当
〃	市川宏	(東畑建築事務所)	会勢・事業担当
〃	鴻池藤一	(鴻池組)	会勢・事業担当

理事(○印常任理事)

(総務) 6名
伊藤良彦(三晃空調)
大林芳郎(大林組)
栗林信英(栗林工業)
中西孝(マンテン)
松村雄吾(松村組)
○村上秀夫(村上総合事務所)

(会計) 5名
奥村俊夫(奥村組)
錢高善雄(錢高組)
菅谷節(ダイダン)
堀亀久治(三機工業)
○前野慶太郎(あめりか屋)

(編集) 10名
井上豊(大阪大学)
金井弘次(阪急電鉄)
○荒井清(東畑建築事務所)
○小島雄(鹿島建設)
○須賀好富(近畿大学)
竹中錬一(竹中工務店)
○深江実(アスワン)
○松村慶三(浦辺設計)
○溝神宏至朗(安井建築設計事務所)
若山繁(きんでん)

(会勢) 11名
淺沼禎夫(淺沼組)
○藤阪利為(大林組)
○岡本行善(昭和設計)
原田孝太郎(原田セメント化工)
○小林四郎(住友電設)
鴻池一季(鴻池組)
○城口庸平(大阪城口研究所)
○西東茂之(フジタ)
○田村真二(竹中工務店)
西川秀信(戸田建設)
森井哲也(清水建設)

(事業) 7名
板井亨介(熊谷組)
今村祐三郎(大阪建設業協会)
○多井幸男(多井建築研究所)
藤木鐵三(藤木工務店)
堀内史朗(第一工業)
岡本宏行(大阪市都市整備局)
真鍋正宏(住宅・都市整備公団)

(研修) 6名
○片倉健雄(近畿大学)
立野一郎(ユニオン)
○久徳敏治(日本建築構造技術者協会)
市川正美(大成建設)
立成良三(大阪府建築部)
○和田克朗(日本建築総合試験所)

常務理事 野上淳二

(幹事) 尾亀清四郎(三晃空調)・牧田顯治(安井建築設計事務所)

平成５年度

日本建築協会評議員(敬称略)

議長 高橋保夫(錢高組)
副議長 鶴田昭一(大林組)

本部所属評議員

(技術部門)
荒川治徳(清水建設)
片田俊彦(大阪府住宅供給公社)
下笠晃右(大阪市都市整備局)
下村健治(修成建設専門学校)
玉井龍男(近畿地建)
鶴田昭一(大林組)
名手宏彦(ミサワホーム)
山形政昭(大阪芸術大学)
山尾弘子(インタープラン)

(総合部門)
伊藤俊夫(松村組)
岩出正次(岩出建設)
内村俊一(大日本土木)
大塚日出夫(淺沼組)
上出秀雄(藤木工務店)
楠正世(戸田建設)
柴田邦彦(間組)
白石静二(鴻池組)
杉山慎一(三井建設)
高橋保夫(錢高組)
飛岡宏佳(安藤建設)
中川公善(鉄建建設)
原精一(コーナン建設)
三木敏男(奥村組)
宗澤修郎(西松建設)
森田勇(モリタ建設)
和田眞一(東和組)

(電気部門)
荒巻恭士(きんでん)
今村騰(中央電気工業)
岩橋貞雄(八千代電設工業)
高岸宗吾(近畿工業)
山本永造(ヤマト電気)

(管工部門)
臼井弘(須賀工業)
川瀬甲子雄(扶桑管工業)
清水義一郎(清水工業所)
田崎至成(日比谷総合設備)
福谷守弘(朝日工業社)

(建材部門)
江藤正昭(万年スレート)
恩庄二郎(大阪化工)
小西信一郎(コニシ)
永原義夫(王建工業)

支部所属評議員

(東海支部)
林金之(愛知工業大学)
盛田輝勇(丸善深見建装)
小宮三辰(安井建築設計事務所)
松本壮一郎(愛知工業大学)

(京都支部)
秋山明孝(清水建設)
神谷治(神治屋)
山口明(伏見工業高校)
山田昌次(花豊造園)

(和歌山支部)
井村真哉(井村建築設計事務所)
宮本一宏(栄建工業)

(中国支部)
井上弘美(アオケン)
福永敏男(福永建設)
稲葉登(大之木建設)
清田剛一(清田工務店)

日本建築協会支部長(敬称略)

東海 森口雅文(伊藤建築設計事務所)
京都 井出正己(清和建築設計事務所)
和歌山 北山俊(日新建設工業)
中国 平本俊秋(日興)

平成５年度

日本建築協会特別委員会委員(敬称略)

■企画委員会

協会の今後の運営を検討、審議する。

委員長 片倉健雄(近畿大学)
委員 小林四郎(住友電設)
松村慶三(浦辺設計)
三木敏男(奥村組)
村上秀夫(村上総合事務所)
山形政昭(大阪芸術大学)
和田克朗(日本建築総合試験所)

平成５年度

日本建築協会常設委員会委員

平成５年４月28日開催の定例理事会において、下記のとおり各常設委員会委員を委嘱いたしました。　（敬称略　◎印委員長　○印副委員長
●印副委員長代行　△印幹事　＊印顧問　職場名は略称を用いました）

■編集委員会

会誌「建築と社会」の企画・編集

＊東　　孝　光(大　阪　大　学)
◎荒　井　　清(東畑建築事務所)

■特集小委員会

計画系分科会

(計画系)

伊　縫　憲　幸(日　建　設　計)
梅　村　宏　尚(大阪市市長室)
小　浦　久　子(大　阪　大　学)
鈴　木　克　彦(京都工芸繊維大学)
田　中　直　人(神戸芸術工科大学)
林　　輝　行(三　井　不　動　産)
松　川　敏　正(竹　中　工　務　店)
山　尾　弘　子(インタープラン)
横　関　真　紀(積　水　ハ　ウ　ス)
△吉　村　英　祐(大　阪　大　学)

(建築計画系)

△石　山　道　男(安井建築設計事務所)
磯　村　千恵子(大　成　建　設)
上　杉　秀　隆(浦　辺　設　計)
江　副　敏　史(日　建　設　計)
菅　野　忠　司(鹿　島　建　設)
清　本　明　宏(清　水　建　設)
笹　村　欽　也(東畑建築事務所)
佐　藤　不二男(大　阪　大　学)
塚　本　史　郎(鴻　　池　　組)
刃　金　国　男(大　　林　　組)
山　本　　匡(竹　中　工　務　店)

(インテリア・住宅系)

石　川　佳　子(船　　場)
大　橋　眞由美(大　　林　　組)
大　森　智　子(武庫川女子大学)
加　藤　　力(京都工芸繊維大学)
角　方　利　幸(住宅・都市整備公団)
河　合　邦　子
北　浦　かほる(大阪市立大学)
小　梶　吉　隆(竹　中　工　務　店)
小　島　保　人(新保哲也アトリエ)
駒　田　哲　男(A　D　&　A)
中　村　孝　之(積　水　ハ　ウ　ス)
畑　　康　之(安井建築設計事務所)
△福　田　由　利(アトリエ・ドゥ・フクダ)

構造分科会

和　泉　一　義(東畑建築事務所)
岡　本　達　雄(竹　中　工　務　店)
亀　井　　功(大　　林　　組)
黒　木　安　男(鴻　　池　　組)
竹　野　富　夫(馬瀬構造設計事務所)
築　谷　朋　也(安井建築設計事務所)
△二　宮　利　治(日　建　設　計)
西　　邦　弘(キンキ構造設計)
西　村　泰　志(大阪工業大学)
馬　場　研　介(大　阪　大　学)
蓑　輪　幸　男(大阪府建築部)

設備分科会

石　沢　重　治(新菱冷熱工業)
遠　藤　　進(き　ん　で　ん)
大　田　克　彦(総合設備コンサルタント)
△梶　井　宏　修(近　畿　大　学)
河　津　隆　之(河津隆之事務所)
伊　達　正　雄(大阪市都市整備局)
田ノ畑　好　幸(竹　中　工　務　店)
村　上　幸三郎(東芝ライテック)

施工材料分科会

有　光　利　治(鹿　島　建　設)
植　田　　実(清　水　建　設)
小椎八重　　猛(積　水　ハ　ウ　ス)
△志　水　史　典(大　　林　　組)
野　口　和　宏(大阪府建築部)
村　上　信　直(竹　中　工　務　店)

法令分科会

△生　駒　芳　明(大阪市計画局)
乾　　康　雄(京都府土木建築部)
入江田　吉　仁(神戸市住宅局)
樫　田　　攻(京都市住宅局)
加　藤　輝　男(大阪府建築部)
廣　田　美　清(兵庫県都市住宅部)

■作品作風小委員会

遠　藤　公　介(竹　中　工　務　店)
小笠原　絵　理(間　工　作　舎)
尾　崎　久　純(東畑建築事務所)
岡　本　　隆(日　建　設　計)
川　上　比奈子(夙川学院短期大学)
倉　渕　奈千子(田中啓文総合建築研究所)
桜　井　俊　郎(清　水　建　設)
田　中　均　一(兵庫県都市住宅部)
富　田　昌　義(大　　林　　組)
藤　城　義　丈(徳岡昌克建築設計事務所)
●前　川　治　彦(前川治彦建築研究所)
前　田　幸　宏(大　建　設　計)
○松　田　善　弘(昭　和　設　計)
松　村　　衛(大阪府建築部)
水　川　尚　彦(住友信託銀行)
宮　地　雄一郎(安井建築設計事務所)

■会員企画小委員会

伊　藤　郁　郎(日　建　設　計)
●稲　木　裕　子(松野八郎総合建築設計事務所)
糟　谷　浩　史(清　水　建　設)
小板橋　鉄　雄(長谷工コーポレーション)
佐　野　　洋(日　本　設　計)
●佐　伯　由紀子(安井建築設計事務所)
坂　田　耕　一(近畿地方建設局)
髙　田　光　雄(京　都　大　学)
○高　橋　麗　子(デザインオフィス・レイ)
塚　口　明　洋(塚口明洋建築研究室)
増　渕　昌　利(神戸市交通局)
松　石　千　秋(大　建　設　計)
山　嵜　章　子(神戸市住宅局)

■広告企画小委員会

●池　渕　俊　男(タ　　ジ　　マ)
上　井　善　一(東洋シヤッター)
尾　崎　英　直(竹　中　工　務　店)
○勝　　一　弘(大　　林　　組)
衣　川　徳　好(清　水　建　設)
原　田　常　介(ク　リ　ヤ　マ)
菱　田　信八郎(松　　村　　組)
藤　田　孝　吉(鹿　島　建　設)
山　下　修　司(安井建築設計事務所)

■支部担当

森口雅文(伊藤建築設計事務所)　東海
井手正己(清和建築設計事務所)　京都
黒田征四郎(黒田一級建築設計事務所)　和歌山
平本俊秋(日　　興)　中国

■事業委員会

見学・講演・説明・展示・映画・懇親会・若い会員の集いなどの企画および実施

◎多　井　幸　男(多井建築研究所)
○三　好　　曠(竹　中　工　務　店)

■見学会小委員会

○南　　次　郎(淺　　沼　　組)
△伊　東　史　郎(大　　林　　組)
△福　島　靖　夫(鹿　島　建　設)
△福　家　　敬(大阪府建築部)
△森　田　芳　次(安井建築設計事務所)
△藪　本　文　彦(大　成　建　設)
池　澤　安　夫(鴻　　池　　組)
伊　藤　　博(松　　村　　組)
井　上　敬　一(竹　中　工　務　店)
太　田　正　三(藤　木　工　務　店)
岡　田　聿　之(東畑建築事務所)
久保田　秀　男(日　建　設　計)
田　中　進　三(大阪市都市整備局)
松　浦　剛　士(清　水　建　設)

■広報小委員会

○原　見　昌　志(安井建築設計事務所)
△奥　村　　進(東畑建築事務所)
△門　川　清　行(竹　中　工　務　店)
△川　村　眞　次(関西都市整備センター)
△酒　井　重　治(野村建設工業)
△下　村　健　治(修成建設専門学校)
△宮　内　　宏(三　五　商　事)
生　島　久　夫(フ　　ジ　　タ)
伊　藤　武　夫(大　　林　　組)
小　笹　光　彦(ランテック計画事務所)
紙　西　孝　彦(昭　和　設　計)
掃　部　　彌(大阪市建設局)
木　場　公　典(関西国際空港)
佐　藤　　稔(東畑建築事務所)
谷　本　敏　和(き　ん　で　ん)
田　村　美喜男(旭　　硝　　子)
中　西　　稔(岡山ターミナルビル)
三　上　不二夫(錢　　高　　組)
山　川　　勝(関　西　電　力)

■若い会員の集い小委員会

○杉　本　真　一(大阪芸術大学)
△内　仲　　毅(P　　P　　I)
△松　隈　　章(竹　中　工　務　店)
△横　田　隆　司(大　阪　大　学)
芦　田　智　之(日　建　設　計)
有　田　吉　弘(阪　急　電　鉄)
神　崎　健　史(井上守建築事務所)
榊　間　隆　之(清　水　建　設)
佐々木　晴　子(大阪市都市整備局)
島　　隆　男(安藤忠雄建築研究所)
瀬　藤　良　雄(ジェイアール西日本コンサルタンツ)
田　中　滋　典(大　　林　　組)
田　中　　康(ヘ　　ッ　　ズ)
田　畑　重　明(坂倉建築研究所)
竹　内　利　明(淺　　沼　　組)
龍　野　豪　利(大阪市都市整備局)
土　井　　正(大阪市立大学)
増　田　昌　彦(大阪府建築部)
宮　崎　ひろ志(兵庫県立人と自然の博物館)
村　松　一　彦(大　建　設　計)
廻　　はるよ(東畑建築事務所)
山　隈　直　人(浅井謙建築研究所)
山　田　和　弘(東建コンサルタンツ)
山　本　勝　彦(安井建築設計事務所)
米　井　　寛(東畑建築事務所)

■教育委員会

建築教育についての調査、研究、講座ならびに工高生デザインコンクールなどの企画および実施

◎片　倉　健　雄(近　畿　大　学)

■講習会小委員会

○金　田　　宏(大　　林　　組)
△佐　藤　隆　幸(竹　中　工　務　店)
△高　橋　憲　昭(松　　村　　組)
佐　貫　　久(鹿　島　建　設)
武　田　　健(奥　　村　　組)
蔦　谷　政　寛(錢　　高　　組)
中　川　　徹(清　水　建　設)
服　部　勝　興(鴻　　池　　組)
水　田　　匡(大　成　建　設)
森　　啓　亮(淺　　沼　　組)

■工高生教育小委員会

○和　田　康　由(大阪市立工芸高校)
△植　松　清　志(西野田工業高校定時制)
△三　宅　育　男(布施工業高校)
大　西　正　宜(今宮工業高校定時制)
景　山　公　三(西野田工業高校)
小久保　　到(尼崎工業高校)
小　山　将　史(堺市立工業高校)
柴　田　敬四郎(日　建　設　計)
武　田　雄　二(愛知産業大学)
辰　己　幸　司(東畑建築事務所)
出　　雄　　隆(都島工業高校)
永　島　敏　郎(安井建築設計事務所)

■建材委員会

建材コンサルタント・新建材の紹介

阿　部　　修(松　　村　　組)
井　上　　享(藤　木　工　務　店)
猪　野　達　雄(竹　中　工　務　店)
岡　山　　信(奥　　村　　組)
小　川　克　憲(ＮＴＴ関西都市)
小　幡　義　明(鹿　島　建　設)
柿　本　正　和(錢　　高　　組)
○近　藤　達　夫(大日本土木)
小　谷　陽次郎(日　建　設　計)
越　水　博　明(清　水　建　設)
阪　本　重　信(大　成　建　設)
鈴　木　　悟(住宅・都市整備公団)
田　中　　均(大阪セメント)
田　中　　宏(大阪府建築部)
竹　田　三　夫(鴻　　池　　組)
近　澤　一　弘(日本建築総合試験所)
轟　　泰　輔(熊　　谷　　組)
西　川　純　一(昭　和　設　計)
西　出　　浩(大　建　設　計)
村　田　俊　彦(大　　林　　組)
伯　耆　　紳(安井建築設計事務所)
＊堀　内　三　郎(京　都　大　学)
松　原　義　美(戸　田　建　設)
松　本　　章(東畑建築事務所)
○元　木　貞　次(東洋紡エンジニアリング)
保　田　幸　昭(近畿地方建設局)
渡　辺　　博(新日本製鐵)
◎和　田　克　朗(日本建築総合試験所)

■出版委員会

建築に関する図書の企画・編集・刊行「建築技術選書」特装版および〈プロのノウハウ〉の企画・刊行

◎須　賀　好　富(近　畿　大　学)
○山　田　　修(修建築事務所)
青　柳　英　之(青柳構造設計)
荒　川　治　徳(清　水　建　設)
上　原　正　行(竹　中　工　務　店)
川　崎　公　雄(鹿　島　建　設)
川　道　麟太郎(関　西　大　学)
北　山　　悟(松　　村　　組)
楠　本　照　男(昭　和　設　計)
志　賀　咲　穂(姫路短期大学)
下　田　英　雄(大　　林　　組)
谷　川　康　信(大阪工業技術専門学校)
西　村　操　一(大阪府建築部)
松　本　克　暉(大　成　建　設)
安　田　　孝(摂　南　大　学)

建築と社会

1993 6 1917年創刊 第74集／通巻855号

ARCHITECTURE AND SOCIETY

JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN

〈今月の表紙〉東出清彦

自然の堆積物の断面が、おもわぬ図像となって現われる。1938年、渡辺仁は応接室の壁面に砂岩を貼りつめた。大半が無地状の中で、際立って図像的に見える石が一枚だけマントルピースの上にある。この意図的とおもえる選択と構成に、建築家の直感的世界の断面をみるおもいがした。この部屋は現在も北品川にあり、原美術館のギャラリーとして使われている。

■特集予告

7月号／映画の中のインテリア

8月号／建築の再生

9月号／国際パートナーシップの可能性

会　長　佐野正一

幅会長　金子　潔・薬袋公明
市川　宏・鴻池藤一
三品哲夫

編集委員会（平成5年度）

■編集理事
◎荒井　清
井上　豊
金井　弘次
小島　雄
須賀　好富
竹中　錬一
深江　實
松村　慶三
溝神宏至朗
若山　繁

■編集顧問
東　孝光

■編集委員
★計画系分科会
☆計画系
伊鍵　惠幸
梅村　宏尚
小浦　久子
鈴木　克彦
田中　直人
林　輝行
松川　敏正
山尾　弘子
横関　真紀
※吉村　英祐
☆建築計画系
※石山　道男
磯村千恵子
上杉　秀隆
江副　敏史
菅野　忠司
清本　明宏
笹村　欽也
佐藤不二男
塚本　史朗
刃金　国男
山本　匡
☆インテリア・住宅系
石川　佳子
大橋眞由美
大森　智子
加藤　力
角方　利幸
河合　邦子
北浦かほる
小梶　吉隆
小島　保人
駒田　哲男
中村　孝之
畑　康之
※福田　由利

★構造分科会
和泉　一義
岡本　達雄
亀井　功
黒木　安男
竹野　富夫
築谷　明也
※二宮　利治
西　邦弘
西村　泰志
馬場　研介
箕輪　幸男

★設備分科会
石沢　重治
遠藤　進
大田　克彦
※梶井　宏修
河津　隆之
伊達　正雄
田ノ畑好幸
村上幸三郎

★施工材料分科会
有光　利治
植田　実
小椎八重猛
※志水　史典
野口　和宏
村上　信直

★法令分科会
※生駒　芳明
乾　康雄
入江田吉仁
樫田　攻
加藤　輝男
廣田　美清

■作品作風小委員会
遠藤　公介
小笠原絵理
尾崎　久純
岡本　隆
川上比奈子
倉渕奈千子
桜井　俊郎
田中　均一
富田　昌義
藤城　義丈
前川　治彦
前田　幸宏
◎松田　善弘
松村　衛
水川　尚彦
宮地雄一郎

■会員企画小委員会
伊藤　郁朗
稲木　裕子
槽谷　浩史
小板橋鉄雄
佐伯由紀子
佐野　洋
坂田　耕一
高田　光雄
○高橋　麗子
塚口　明洋
増渕　昌利
松石　千秋
山岸　章子

■広告企画小委員会
池渕　俊男
上井　善一
尾崎　英直
○勝　一弘
衣川　徳好
原田　常介
菱田信八郎
藤田　孝吉
山下　修司

◎委員長　○副委員長　※幹事

印　刷　平成5年6月20日
発　行　平成5年6月25日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市北区梅田1-1-3-2100
電　06－348－0635
振替口座　大阪1-39975
印刷所　青葉印刷株式会社
電　06－351－5428㈹
サン総合印刷株式会社
電　06－454－1481㈹
日本電植株式会社
電　06－352－7502
定　価　980円（本体価格951円・送料共消費税29円）

CONTENTS

●特集　都市のスカイライン

［PROLOGUE］都市文明とスカイライン●紙野桂人 …… 30

［各論1］スカイラインを意識した建築のデザイン …… 34
新神戸オリエンタルシティ・C3●鎌谷憲彦
東京都庁舎●丹下健三
毎日放送本社ビル●渡辺豪秀
千里ライフサイエンスセンタービル●近藤　睦
アプローズタワー●鎌谷憲彦
梅田スカイビル●中谷俊治
大阪ワールドトレードセンター●寺本敏則
大阪府庁舎・周辺整備計画●梅林良行
大阪ビジネスパーク●上田隆夫
桜宮リバーシティ●伊藤武夫
ORC200●北澤修一
六甲アイランドCITY●山根千鶴子

［各論2］フラクタルなスカイライン●奥　俊信 …… 46
橋と景観のシルエット●川﨑雅史 …… 51

［投稿］わがまちのスカイライン …… 57
木多道宏／増田栄一郎／三宅次郎／吉村英祐／鈴木克彦／米井　寛／中西達彦／たなかなおと

［資料篇］都市のスカイラインに関する法律●梅村宏尚 …… 60
景観規制関連略年表●作成：吉村英祐＋小浦久子 …… 64

［EPILOGUE］都市情景としてのスカイライン●田中直人 …… 66

会告　30's EYE 21世紀へのエスキス第1回浜田有司　1
アーキテクチュア・フェアKOBE「創造博物館」コルビジェ展，建設技術展
梅田シティ，梅田スカイビル見学会
第13回大阪まちなみ賞（大阪都市景観建築賞）募集要項
本会・前理事　中島一氏、彦根市長に当選
平成5年度日本建築協会役員会務分掌／日本建築協会評議員／日本建築協会支部長
日本建築協会特別委員会委員／日本建築協会常設委員会委員

作品作風　ORC200　6
ル モンド兵庫
野村證券武庫之荘明生寮

ART PROCESS　木代喜司（彫刻家）・信ヶ原良和（彫刻家）　18

書評　トム・ウルフ，背教者＝建築モダニストを語る—『FROM BAUHAUS TO OUR HOUSE』TOM・WOLFE著●安原盛彦　22

BOOK STATION　短評4冊●伊藤郁郎・稲木裕子　23

GBRCニュース　検査室　関西国際空港事務所　24

法令コーナー　建築物に付属する緑化指導方針（大阪市）●近野正男　25

新建材紹介コーナー　耐火鋼●渡辺　博　27

建築の眼　本づくり●加藤晃規　28
プロポーザルから●玉井龍男
東京と江戸●隅谷康彦
後継経営者の会●得田芳宏

構造の頁　アンボンドブレースを使用したビルの構造設計●小林直紀　71

設備の頁　高効率Hf照明システム●小平眞二　72

施工材料の頁　ハーフPC耐力壁●佐藤真一郎　73

information　「大阪市ハウジングデザイン賞」，「生きものたちも建築家展」，国際デザインコンベンション'93—7月に大阪と名古屋で開催—，第3回BUFF国際建築デザインコンペ『東京待ち会い空間』，屋久島での山行記『やくのやまんば』—竹中工務店設計部員が自費出版—，パリ国際建築材料見本市，第2回病院建築賞，第2回BELCA賞　74

月報　平成5年4月分　76



外観見上げ

作品風作

設計監理 ■
安井建築設計事務所・アール・アイ・エー・昭和設計JV

施工 ■
清水建設・長谷工コーポレーション・鴻池組JV

ORC200

弁天町駅前開発 土地信託事業

公有地土地信託の既成市街地では最大規模であり、かつ大阪市第一号として注目された本事業は、都市のリゾート化，コンプレックス化，情報化を軸とした「シティ・リゾート」を開発コンセプトとした事業コンペを経て実施された。'90年夏のⅠ期工事(パラディッソ)竣工開業を経て、コンペ実施から僅か6年でグランドオープンを迎えることができた。これは戦後復興土地区画整備で弁天町駅前の一等地に地域発展のための公共用地として3haの市有地が確保されていたこと、また懸案であった地域振興を図る副都心再開発の起爆剤として本事業が計画され、地元をはじめ市等関係者の強力な支援を得たことによるものである。

超高層のツインビルはホテルとして、また住宅として共に日本一の高さを誇り、ヘッドラインを初め特徴のあるスカイラインを形成し、副都心・弁天町のランドマークとして市内のどこからでも認識することができる。

動線計画においてはJR環状線・地下鉄の利用者を考慮し、スカイウェイを設けて直接敷地内2階デッキレベルと連絡している。施設計画ではこのレベルを歩行者のアプローチレベルとして歩車分離を実現すると共に、十分な公開空地を1，2階に確保し、緑地，モニュメント等による演出を加えて「シティ・リゾート」として余裕のある街作りを心掛けている。大規模複合施設であるが、アトリュウムを中心にホテル，オフィス，住宅，店舗，プール等を配置しかつ用途毎に専用入口を設けることにより、アメニティの確保と分かりやすい施設構成を実現している。

設備計画としては省エネルギーと環境問題に配慮し、コ・ジェネレーションシステムと地域冷暖房システムを採用している。また防災上は集中防災情報監視システムや緊急救助用ヘリスペースの自主設置、避難用バルコニー等により安全面を重視した計画を行うとともに、ホテル等が入居している一番街は風揺れに対する制振装置を設置し居住性にも十分配慮している。

(北澤修一／安井建築設計事務所)



外観東面



全景遠望(夕景)



全景鳥瞰





アトリウム



ガレリア



ホテル ロビー



ホテル 大宴会場



一番街 オフィス エレベーターホール



ホテル客室 スイートルーム



一番街 オフィス エントランスホール

プリオタワー 住宅エントランスホール



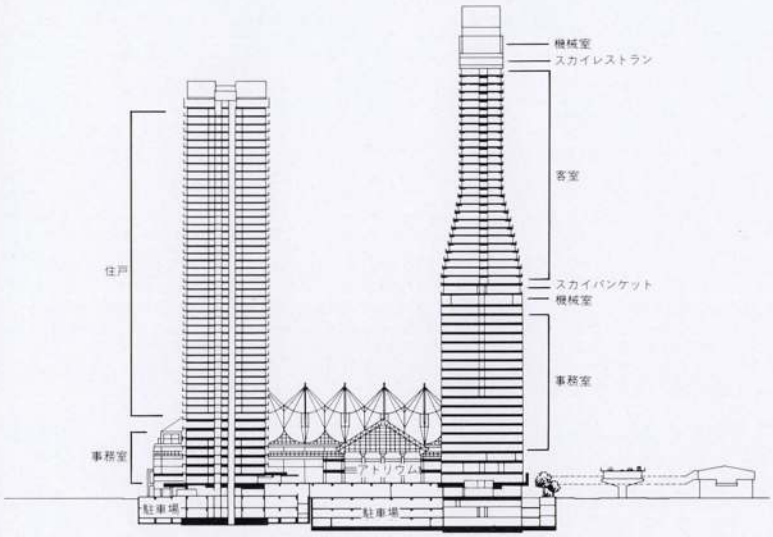
プリオタワー 住宅内部



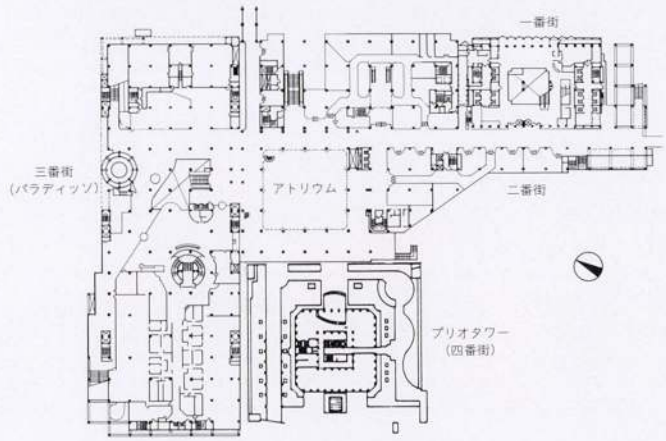
オークアベニュー



市民学習センター ロビー



断面図　1:3000



2階平面図　1:3000



YMCA



ラジオ大阪 スタジオ

所 在 地 ——— 大阪市港区弁天 1 丁目 2 番
敷地面積 ——— 30,123.00㎡
建築面積 ——— 22,687.23㎡（Ⅰ期工事分： 8,298㎡）
延床面積 ——— 252,778.29㎡（ 同 上 ：46,677㎡）
構造規模 ——— S・SRC、B3F、50F、P3
工　　期 ——— 1989年 9 月～1993年 3 月
最 寄 駅 ——— 地下鉄中央線・JR環状線弁天町駅
撮　　影 ——— 名執一雄、水野励治、相田修一、西口博英、島　修一



オークホール

アトリウム

外観



作品風

設計■
大林組本店一級建築士事務所

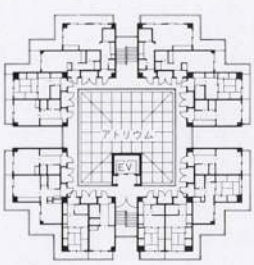
総合監理■
公共建物一級建築士事務所

施工■
大林組・野村建設工業共同企業体

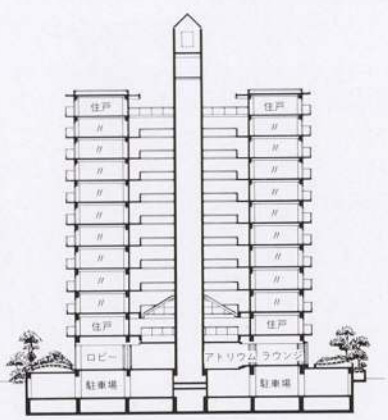
ル モンド兵庫

情報と文化が高度に集積した都市における快適な住環境は、独立性の高い居室と、ゆとりのある共用部分で構成される。
ルモンド兵庫では、階段とスリットで四分割された住棟が、二層分の高さを持つ開放的なアトリウムと、その上部の吹き抜けを取り囲むロの字型の明解なプランを採用した。
本来なら外部にさらされる廊下が、住戸に囲まれることにより、アットホームな内部空間になっている。そしてこの建物のシンボルであるアトリウムからは、ガラス張りのトップライトをとおして、雲の流れ・雨の雫・星の動きを見ることができる。アトリウムの隣には、季節の巡りを伝える花と緑に囲まれたラウンジを一段高くして設け、ゆったりと落ち着いた雰囲気を演出した。
外観は、渋茶色の二丁掛タイルに、バルコニーの白いボーダーでアクセントをつけた。コーナー部は、接空面が広くとれる様に雁行させ光と風を引き寄せて、建物に陰影をつけ、彫りの深いデザインとしている。夜になると、エンブレムとスリットがライトアップされ、建物が幻想的な光に包まれる。
8タイプある住戸は、十分な収納スペースと、セキュリティなど全ての設備を整え、体ひとつですぐにでも入居できる。フロントでのサービスやラウンジでの食事のサービスを含めて、ルモンド兵庫は、シティホテルのグレードを目指したワンルームマンションである。

(船橋昭三・広田和正／大林組)



基準階平面図 1:1000



断面図

所在地 ——— 神戸市兵庫区入江通2-2-16
敷地面積 ——— 1,976.36㎡
建築面積 ——— 1,467.98㎡
延床面積 ——— 9,857.77㎡
構造規模 ——— SRC、B1F、12F、P1
工　期 ——— 1991年1月～1993年2月
最寄駅 ——— JR山陽本線兵庫駅
撮　影 ——— 神　史


建物頂部


中廊下見下げ


ラウンジ


アトリウム



作品風

設計施工 ■
藤木工務店



北側外観

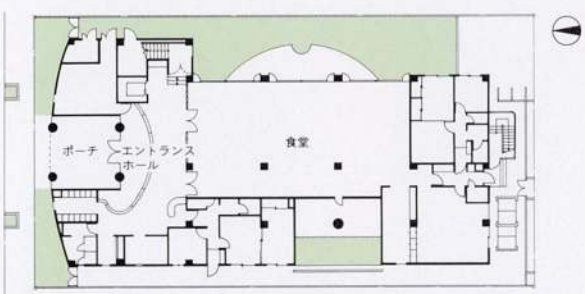
野村證券武庫之荘明生寮

尼崎市武庫之荘は大阪のベッドタウンとして近年開発が進む一方昔ながらの住宅や田畑が見られ、のどかさの残る土地である。
平面計画は1階に二世帯の管理人住戸を含む共用部を配し、2～4階は廊下に沿って南北に長い個室エリアと、全面道路に面するサニタリーエリアとに分けた。このサニタリーエリアはシンメトリーなファサードを構成し、建物の存在を周囲にアピールするとともに、個室エリアが受ける道路からの干渉を柔らげる役割をも果たしている。
外装は磁器質タイルにコンクリート小叩仕上と重くハードな材料を用いる一方、吹抜やポーチでは空間構成の中にやわらかな空気の流れを取り入れている。
これから発展していくであろう街並みで、この建物がどんな役割を担って行くのか注目したい。

（太田正三・駕田菜穂子／藤木工務店大阪本店設計部）



エントランス



1階平面図　1:600

所 在 地 ——— 兵庫県尼崎市南武庫之荘2-10-30
敷地面積 ——— 861.00㎡
建築面積 ——— 541.76㎡
延床面積 ——— 1,713.10㎡
構造規模 ——— RC、4F
工　　期 ——— 平成3年7月～平成4年4月
最 寄 駅 ——— 阪急神戸線 武庫之荘駅
撮　　影 ——— 川元　斉



食堂

木代 喜司
YOSHIJI KISHIRO

1940　京都生まれ
1962　京都学芸大学特修美術科卒
1963　日展初入選、京展市長賞受賞
1977　京展市長賞受賞
1978　京展審査員をつとめる
1981　日展特選受賞
1985　京都教育大学教官となる
1988　全国身体障害者スポーツ大会記念メダル製作
1989　日展審査員をつとめる
1990　日展会員になる
現在　京都教育大学美術科教授
　　日展会員・日本彫刻会会員



不老長寿



出を待つピエロ



少女とマリオネット

□□□楽しい空間作りを□□□

新しい建物が建って見学をさせていただく機会があるが、建築も立派で、調度品も素晴らしいが、どこかポイントが抜けたものに出会うことが多い。箱は作ってあるが、そこにその箱を作った人の主張というか文化が見られないのは淋しい限りである。昔と違って思い切った空間をとった建築も多くなってきているが、その空間をどのように引きしめるかが大切なことである。それによって、その建物は大きく個性をもつことになるのである。建築主は、勇敢に自分の個性を発揮し、素晴らしい建築、建築空間を作って欲しいものである。

私は、楽しいことが好きである。空間があれば、そこを明るく楽しく、心和やかにしてみたい。又、時には心静かに考え、祈る場にしてみたい。屋外であれば自然とともに生きる彫刻を作りたい。自然と調和し、ともに輝く空間にしたい。私は、彫刻だけが生きているのではなくて、自然と建築とともに調和し、生きている作品を作りたいと思っている。

木代喜司

信ケ原 良和
YOSHIKAZU SHIGAHARA

1957　京都に生まれる
1978　京都精華短期大学立体造形科卒業
1979　京都彫刻美術展出品('85奨励賞)
　　行動美術展出品
1981　京都野外彫刻展出品(以後毎年出品)
1985　京都美術工芸選抜展
1990　第12回神戸須磨現代彫刻展(準入選)
1992　愛知県半田市野外彫刻展(優秀賞)
1993　アートビエンナーレ京都'93(優秀賞)



「飄」鉄・ステンレス 1700H×6000L×1700W



「宙」鉄・ステンレス・フッソ樹脂塗料 1620H×3300L×1930W

鉄の板材の幾何学的構成に魅力を感じ物を作り始め、4・5年前あたりから三角形のパッチの連続による多面体を作り出す様になり、なるべく自分の意識・感情を表に出さないような漠然とした形態ばかり作る様になってきだした。自分の頭の中にある物をそのまま形にしようとするのではなく、例えば作詞家が見たり感じた風景・情景を詩に置き換える様に、私もいろいろな環境・空間から風景・情景を見いだし、その事をもっと強く感じさせるような物を提示していこうと強く思う様になった。そして造られた場・自然のままの場などいろいろな場・空間の中で、造形物と環境、環境と人間、人間と造形物の関係を、自分なりにどのように消化しどのように形にするのか？回りの風景・環境を無理にねじ伏せるのではなく、自分の考えに妥協するのでもなく、お互いを傷つけず逆にお互いが引き立て合う様な、そして情景を感じる空間を作る事を求めながら、作品を作り続けています。

信ケ原良和

彫刻プランニングオフィス〝はねうさぎ〟はモニュメントや造形作品による、芸術との共存空間をプランニングすることにより、環境と融合した美の空間、人間的な表情豊かな空間づくりが出来ればと願っております。
コーディネーター〝はねうさぎ〟代表 巽育子(お問合せ 075-761-3759)

企画協賛：TOTO・ニューウォールシステム



器具は、決まった。
タイルはどうします？



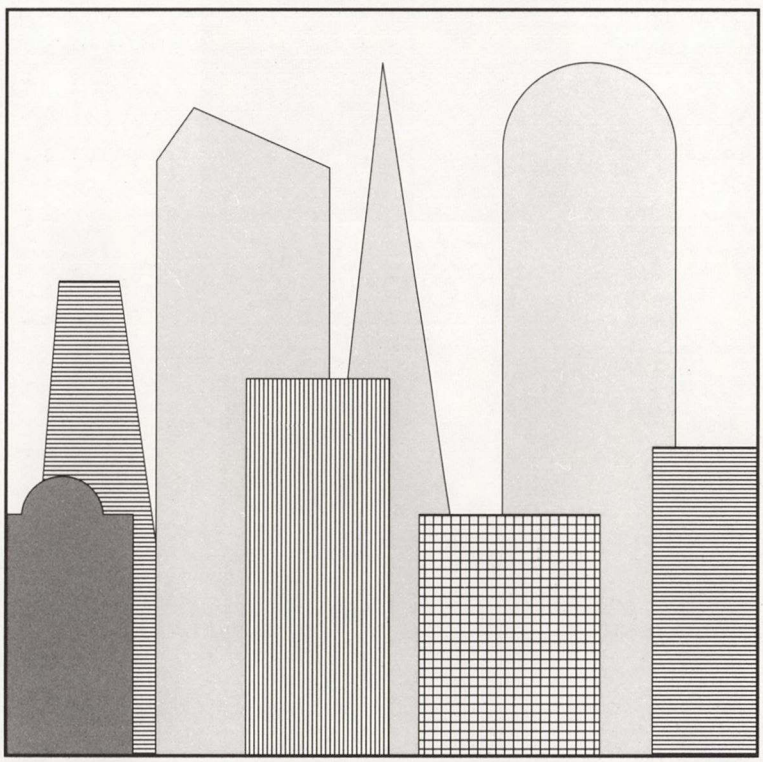
器具に合わせて選びぬいた。
TOTOデザインタイルはどうでしょう。

色・デザインが無数にあるタイルの中から、器具に合うものを選ぶ。これがなかなか難しい。その点、TOTOのデザインタイルは選びやすい。はじめから器具と同色、同系色をベースにしたデザインタイルを用意しているのです。つまり、器具さえ選べば、タイルは決まったも同然。タイル選びが、グッと楽になります。まずは、お近くのTOTOにご相談ください。

●カタログご希望の方は、〒107 東京都港区赤坂7-3-37 東陶機器株式会社 広告宣伝部「TN-2」係まで、住所・氏名・電話番号を記入の上ご請求ください。

都市とビルの

美しい調和をめざして。



ビル用サッシ・カーテンウォールメーカー

NWS ニューウォールシステム株式会社

本　　社　〒101　東京都千代田区神田美土代町1　TEL03(3294)8511

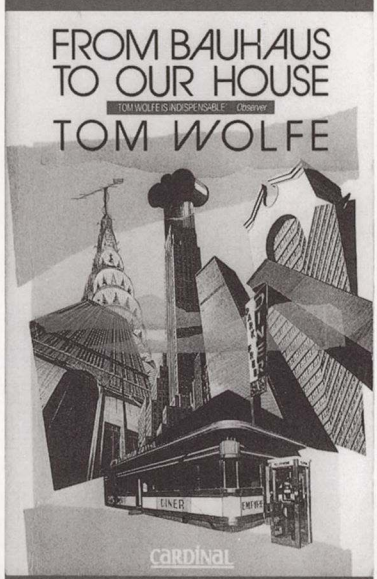
大阪支社　〒541　大阪市中央区本町2-1-6　TEL06(264)3911

支店　横浜／名古屋　　営業所　札幌／仙台／広島／福岡

書評

トム・ウルフ,背教者＝建築モダニストを語る

安原盛彦
東北大学工学部建築学科講師



FROM BAUHAUS TO OUR HOUSE
TOM WOLFE
A CARDINAL BOOK 1982

何ともむずかしい文章で、普通の言葉にどれだけ皮肉と悪意が込められているか到底解らない。タイトルからして韻を踏んでいる。「バウハウス」と「アワハウス」と。駄洒落なのだが。この本は徹底して皮肉絡みの駄洒落が文章を構成してゆく。トム・ウルフの皮肉や悪意、毒にあふれかえっている。私ならこの本の日本語の題は「バウハウス、泡(あわ)ハウス」と名付けたいと思うが。

○この駄洒落というか毒を少しばかり(拙訳)。
●「アメリカ、ニューヨークの大通り、Row after Mies van der row of glass boxes」、つまり……ニューヨークの大通りに並んでいるのはRow and row, ミース・ファン・デル・ローエのガラスの箱また箱の列、又、列。
●フィリップ・ジョンソンは無邪気に笑って応える「I have always been delighted to be called Mies van der Johnson」。……私はいつだってうれしい、ミース・ファン・デル・ジョンソンと呼ばれるとね。

建築界の仲間内の文章ばかり読んでいると（出来るだけ読まないようにしているが)、こうした悪意maliceというのも、又、地平を拡げるものだとつくづく思えてくるから不思議だ。この本でトム・ウルフは建築家compound (つまり建築家という特殊集団、特殊サークルと言ってもよい、)が、モダニズムという運動によって、人種的区別のない世界、建築家マフィアを作り上げたのだと言っているように受け取れる。after style、つまり、近代以降の建築家の言うことは、スコラ派の学者の言う言葉のように慎重である、何に対して慎重かというとその基本は、勿論、聖書ではなく「インターナショナル　スタイル」にある。言えることは、近代以降、建築家本人が何をつくっていいのか自分で解らぬように、クライアント側はなおのこと何を建築家につくらせてよいか解らない、しかし現実には何かをつくらなければならない、という状況を設定しての話なのだろう。つまり、具体的には、世界の建築家の語り方が、その内容の「インターナショナル」という基本にだけ忠実で、語り口だけが違っているだけ、これが「文学者」にはたまらない、我慢ならないということか。建築家の語り口を評してゆくと、新聞記者出の「文士」（こうした書き方にトム・ウルフは、自分がしている以上、気は悪くしても拒否はしないと思うが)には、こう見えてくるのかも知れないが、これが普通の喋り口で語るという、しかも個人的な語り口で語る「ニュージャーナリズム」の旗手トム・ウルフの方法、見方なのかも知れない。いずれにせよ彼は建築家の「インターナショナル　スタイル」という基本を崩さない、それに執着する語り口、つくり口を徹底して皮肉り、揶揄している。しかも彼は建築思想のapostate背教についても、正にこの言葉を使って書いているところがいい。日本ではこの問題が常に避けて通られてきた。つまり日本的表現で言うと建築家の「転向問題」といえるのだが、こういう話が出ることは日本の建築界では皆無（慎重に避けられた形ではあるにはあるが）と言ってもよいくらいである。しかしトム・ウルフはアメリカやヨーロッパにもこの問題があることをはっきりと、刺を込めて言っている。刺を込めてとは、つまり、トム・ウルフは建築のモダニズムをたいした思想などとは思っていないのだろうが、そうではあっても、モダニズムという思想を一度言ったからには、建築家の人達よ、それに対する責任くらいとってくださいよ、建築モダニストたちの自らの思想に対する対し方、身の変わりようはこうなんですよ、背教者とどう違うんですか、と言っているようだ。又、「インターナショナル　スタイル」というモダニズムの思想（ウルフはこれを様々な国での国際宣言のわめき合いととらえているのだが）が一種の踏絵のような役を果たしていて、建築家のすること、なすこと、喋ることがこの線からのずれ方次第で結果的に（建築インターナショナリズムを標榜する）建築マフィアが彼、建築家を処断することになるという。どこまでずれ得るか、ずれ過ぎれば、追放され、つまり主流からはずれ、その最もきわどいバランスの上にいるのが、ヴェンチューリ、そのヴェンチューリにしても、言葉ほどには実際に建てた建物はずれていない、つまり、かたちは「インターナショナル　スタイル」をしっかりまもっているとウルフは言っているのだが。

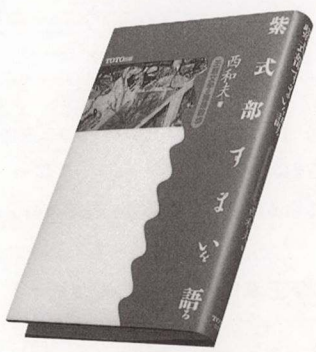
（やすはら　もりひこ／建築家）

BOOK STATION
ブック・ステーション

紫式部すまいを語る
——王朝文学の建築散歩

西和夫著

TOTO出版
1989.11.3刊
四六判　232頁　1,800円



文学の中に、建築を見ようとするのが本書の試みの面白いところで、このすまいを語るシリーズは「紫式部」(王朝文学) の他、「兼好法師」(中世文学)、「小林一茶」(近世文学) の3部作計3冊となっている。「紫式部」においては、古典の行間から、日本人の住居に対する感性を読み取ってゆくわけであるが、それらより日本人の自然観を感じ取ることも可能かと思われる。筆者の言葉を借りれば、「日本人の感性を知るうえに文学ほど好個のものは」なく、「遺産の一つである文学作品を再確認し、その中に何が見えるか、じっくり考えてみることも意義のないことでは」ない。文学を読みながら建築も学べるという、一挙両得のシリーズである。

(Y.I)

東京現代建築ガイド

松葉一清著

鹿島出版会
1992.11.25刊
四六判　266頁　2,884円



東京に行くたび、何処を歩いても目新しい建物に溢れていてワクワクする。これもあれも雑誌で見たことがあると思うのだが思い出せなかったり、渋谷と青山は地続きなのに、山手線でウロウロしてみたり誠に効率が悪い。手元にある建築ガイドブックは一昔前の建物ばかりだし、新しい建物は毎回雑誌をひっくり返さなくてはならない。それらの悩みを解決してくれるのがこのガイドブックである。古くは1959年の国立西洋美術館から、1993年の横浜ランドマークタワーまで、これはと思う建物が地図と解説とさらに、近傍の建物まで紹介されて掲載されている。本書があれば、東京散策、出張も2倍楽しめそうである。

(Y.I)

知られざるフランク・ロイド・ライト

エドガー・ターフェル著
谷川正己・睦子共訳

鹿島出版会
1992.7.25刊
B5判　240頁　5,871円



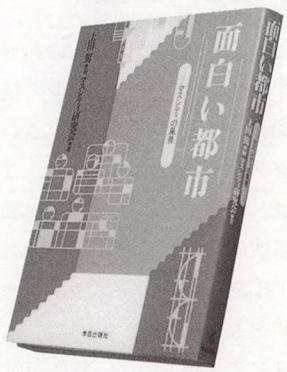
ライトについての本は色々とあるがこの本ほど彼の生き様を如実に表したものはない。読んでいて彼の姿をほうふつとさせる臨場感がある。タリアセンで、或いは建設の現場で長年ライトの弟子としてまたスタッフとして行動をともにし、彼の喜び・怒り・悲しみを目の当たりにして過ごしてきた筆者の貴重な体験で真実が隠されることなく語られているからであろう。それにしても、強烈な個性と人間的な魅力をもち、頑固でわがままで怒られ続けても、その人間的魅力故に信頼し師事出来る、そのような人と巡り会えることは無上の幸せであり自己研鑽の大切なチャンスでもあると思うのだが、人も機会も少なくなった。現代的な新しい建築家像も結構だが、建築はもっともっと人間臭いところで語られるべきものではないのだろうか。

(I.I)

面白い都市
マスシティの風景

上田　篤編
マスシティ研究会著

学芸出版社
1993.2.25刊
四六判　240頁　1,957円



本書は、1990年4月から10月まで、産経新聞紙上に連載されたエッセイ「マスシティの風景」と、新たに書き下ろされた論考で構成された日本の都市文化論である。執筆者は26名。建築・都市計画・経済・歴史・哲学・科学・民俗学等々の専門家が、「マスシティ」(大衆都市) をイメージする54のキーワードをテーマに、都市の賑わいやそのあるべき姿を展開しており、そのクロスカルチュアの多様性によってこの国の都市の独自性が照射される仕組みとなっている。編者のあとがき、「マスシティはすべからく大衆的なのである」。全編を貫く「マスシティの風景」はこの言葉にすべて要約されている。「面白い都市」論の登場である。

担当：会員企画小委員会／伊藤郁郎・稲木裕子

GBRC ニュース
GENERAL BUILDING RESEARCH CORPORATION OF JAPAN

財団法人 日本建築総合試験所
〒565 吹田市藤白台5-8-1
TEL.06-872-0391　FAX.06-872-0784
業務時間 9:00～17:15(土曜休業)

検査室　関西国際空港出張所

1．まえがき

㈶日本建築総合試験所が平成４年４月に関西国際空港出張所を開設してから１年が経過した。試験所にとって初めての現場試験であり、交通船での通勤という悪条件が加わって、現場担当者にとっては、期待より不安の方が大きい状態で業務を開始した。

本稿では、関西国際空港出張所での主な業務内容、空港島内のコンクリート事情、平成４年度中にフレッシュコンクリートの試験を実施した建築物ならびに平成４年度１年間に実施した試験件数について概略を紹介する。

2．主な業務内容

主な業務内容は、以下の通りである。

①フレッシュコンクリートの試験：大阪府の「コンクリート工法に関する指導要綱」に規定されている試験項目で、当所職員がコンクリート打設現場に赴き、各工事の仕様書に基づいて、荷卸時のコンクリートのスランプ試験、空気量試験、塩化物含有量の測定、温度の測定ならびに圧縮強度試験用供試体の作成を行う。なお、圧縮強度試験用供試体は、所定の養生を行った後、出張所内で試験を実施する。

②コンクリートの圧縮強度試験：現地のレディーミクストコンクリートプラントが製造したコンクリートならびに試し練りを行ったコンクリートの圧縮強度試験を実施する。

③骨材の品質試験：大阪府の「コンクリート工法に関する指導要綱」に基づき試料採取を実施する。なお、採取した試料は、本所検査室に搬入し、試験を実施する。

3．空港島内のコンクリート事情

空港島内には、大阪セメントと小野田セメントの２つのレディーミクストコンクリートプラントがあり、両プラントとも６m³ミキサと３m³ミキサを各１台ずつ設置している。これらのうち６m³ミキサは、本邦最大級の規模で、スランプ12cm以上の軟練りコンクリートを製造する場合には、310m³/hの能力を持っている。コンクリート出荷量は、平成３年７月のプラント開設以来100万m³を超えている。

4．検査対象建築物

フレッシュコンクリートの試験を実施している建築物の概要ならびにコンクリート予定出荷量は、以下の通りである。

①旅客ターミナルビル：北工区と南工区に分かれており、各々、本館、ウイング、航空会社棟があるほか、北工区には空港管理棟が、南工区にはCIQ棟がある。コンクリート数量は、約24万m³が予定されている。

②立体駐車場・空港駅：空港駅である中棟を挟んで南棟および北棟の立体駐車場がある。コンクリート数量は、約８万m³が予定されている。

③熱供給施設建屋：中央プラント、北プラント、南プラントの３区画に分かれている。３区画のコンクリート数量の合計は、約1.2万m³が予定されている。

5．平成４年度に実施した試験の件数

各月別のフレッシュコンクリートの試験件数ならびにコンクリートの圧縮強度試験件数を図１に示す。

6．あとがき

開港まであと１年余となり、各作業所とも順調に工事が捗っているようである。滑走路の工事も開始され、いよいよ空港らしくなってきた。この貴重な経験を生かし、これからも現場試験に積極的に取り組んでいきたいと考えている。

（関西国際空港出張所長　高橋利一）

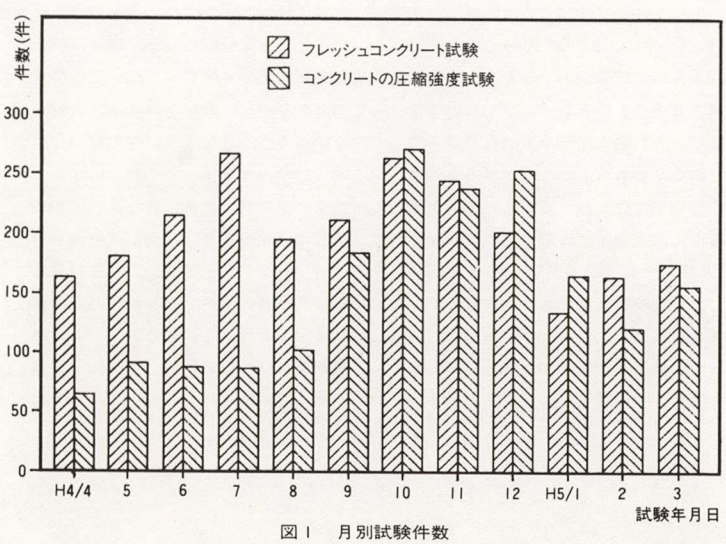


図１　月別試験件数

法令コーナー

280 建築物に付属する緑化指導指針（大阪市）

快適で潤いのある町、美しく魅力ある都市景観の創出には、緑の環境づくりが大きな役割を果たす。また、ビルの冷房や自動車の廃熱などによるヒートアイランド現象の対策としても、樹木等の緑の効用が注目されている。

都市の緑化は、これからの都市行政の大きな柱となっているが、他都市と比べても緑の少ない大阪市では、花の万博の基本理念であった「人間と自然の共生」を受け継いで、花と緑あふれる街づくりを幅広く進めつつある。

北区の扇町公園内のプールを移転し、緑濃い大阪の森をつくる計画や、「花の名所公園」づくりをはじめ、ターミナルや街路なども積極的に緑化を進めている。また、「花と緑のまちづくり推進基金」を設置し、市民と行政が一体となって緑化を推進するため、民間の住宅地や工場等で公共道路に面した敷地の緑化に対して助成する「敷地緑化への助成」や建物の壁面やテラスなどの緑化に対して助成する「建造物緑化への助成」など、民間の協力を得た緑づくりも重点的に進めている。

一方、建築指導行政でも、昭和48年からの「総合設計制度」や昭和49年からの「大規模建築物の事前協議制度」などにより、建築物の敷地内での緑化の推進に努めてきた。こうした制度により新たに生み出された敷地内緑地の実績は、すでに靱公園(9.7ha)の9倍もの面積に相当している。

しかしながら、建築行政の緑化指導は、比較的大規模な敷地に限られていたため、新たに500m²以上の中規模な敷地にも対象を広げ、昨年10月より「建築物に付属する緑化指導指針」により、建築に際し、道路沿いに敷地面積の3％以上の緑化をお願いすることにしたものである。

手続きとしては、建築確認申請に先立ち、所定の様式に基づく緑化計画書を提出し、工事完了後は緑化完了届を提出することになっている。

道を行く人々の眼を楽しませ、建物の美観と風格を高め、街にゆとりと潤いをもたらす道路沿いの緑化は、努力と工夫次第で大きな効果が上がるものである。緑豊かな美しい大阪づくりに、建築主、設計者、市民のご協力をお願いいたします。

近野正男
大阪市計画局建築指導部技術主幹

建築物に付属する緑化指導指針

目的

第1条　この指針は、建築物の緑化に関する事項を定めることにより、緑化の推進を図り、もって緑豊かな都市景観の創造と良好な都市環境を確保することを目的とする。

用語の定義

第2条　この指針における用語の意義は建築基準法及び建築基準法施行令の定めによるほか、それぞれ以下に定めるところによる。

(1)緑　化　樹木等の植栽を行うこと
(2)緑　地　樹木等の植栽を行う敷地の部分
(3)接道部　敷地のうち道路に接する部分

適用対象

第3条　この指針は、市内において建築物を建築する場合に、その敷地面積が500平方メートル以上のものについて適用する。ただし、総合設計制度等の他の制度により緑化に関する事項が定められておりその適用を受ける場合は、その規定に従うものとする。

2.　前項の規定は、市長が緑化について敷地の状況等により特にやむを得ないと認めたときは、適用しない。

緑化標準

第4条　建築主は、前条第1項の適用を受ける敷地に建築物を建築する場合は、当該敷地内に、敷地面積の3％以上に相当する緑地を確保するように努めなければならない。

2.　緑化については接道部に重点を置いて行うものとし、接道部における塀、ネットフェンス等の設置はできる限り避けるよう努めなければならない。ただし、危険防止等のためやむを得ず設ける必要がある場合は、道路境界線から1.0メートル以上後退するものとする。

3.　植栽については、日照や通風等を考慮して樹種の選定を適切に行うと共に、植栽幅および植栽方法に配慮することにより、樹木の良好な育成に努めなければならない。

緑化計画書の提出

第5条　この指針の適用を受ける場合は、建築基準法第6条第1項の規定による建築確認の申請書の提出に先立ち、緑化について事前協議を行い、緑化計画書を提出しなければならない。

緑化完了届の提出

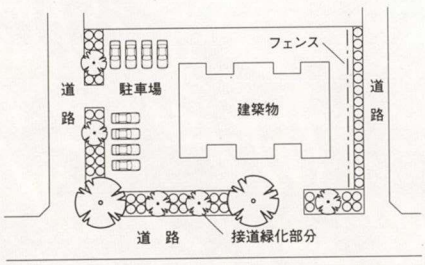
第6条　建築主は、この指針に基づく緑化が完了したときは速やかに緑化完了届を作成し写真と共に提出しなければならない。

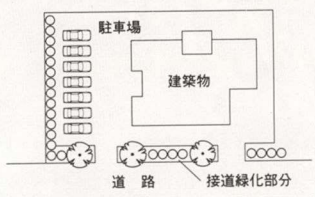
実施の細目

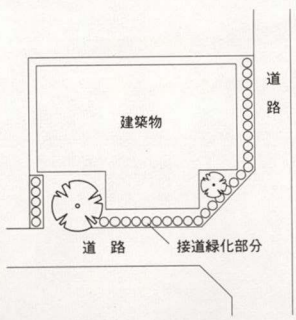
第7条　この指針の実施に関しての必要な事項は、別に定める。

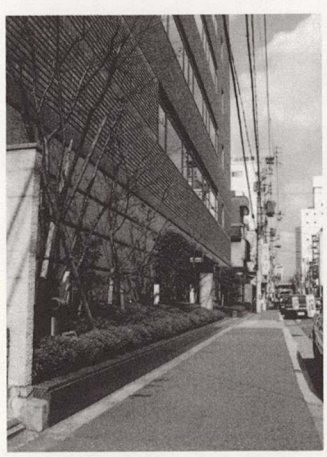
附則

この指針は、平成4年10月1日から実施する。











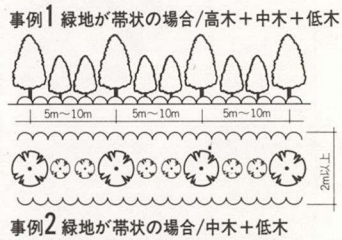
緑化標準の計画例

植栽幅	樹種	本数等	
4.0m以上	高木	10m²当たり1本以上	高木を中心に、中低木を配し、量感のある植栽とする。
	中木	1本以上	
	低木	50本以上	
2.0m以上4.0m未満	高木	1本以上	中木を中心に、高木低木を配し、開放感のある植栽とする。
	中木	1本以上	
	低木	50本以上	
1.0m以上2.0m未満	高木	―	
	中木	4本以上	
	低木	50本以上	
1.0m未満	高木	―	
	中木	―	
	低木	70本以上	
生垣	生垣は樹冠が重なるように植栽する。(中木を0.6m間隔での植栽が望ましい)		

注）高木：樹高3.5m、幹回り0.2m程度の樹木
中木：樹高1.5m、枝幅0.4m程度の樹木
低木：樹高・枝幅0.4m程度の樹木
樹冠：樹木の枝葉の広がり
植栽桝：1.0m×1.0m以上とする

緑化計画の参考事例

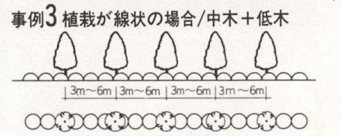
事例1 緑地が帯状の場合/高木＋中木＋低木



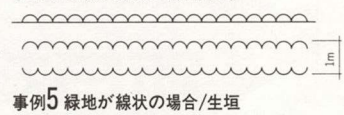
事例2 緑地が帯状の場合/中木＋低木



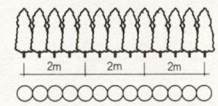
事例3 植栽が線状の場合/中木＋低木



事例4 植栽が線状の場合/低木



事例5 緑地が線状の場合/生垣



FR steel

建築構造用耐火鋼材（NSFR鋼）



耐火被覆レスの実現が
クリーンなパーキング空間を創出



自走式多層駐車場

新日本製鐵
本社：東京都千代田区大手町2-6-3 〒100-71
建材開発技術部　Tel.(03) 3275-7762

●お問い合わせ、資料請求は：建材販売部又は、各支店・営業所まで

札幌 011 (222) 8260	横浜 045 (212) 4069	岡山 0862 (31) 3171
室蘭 0143 (47) 2670	静岡 0542 (55) 2511	広島 082 (225) 5222
盛岡 0196 (23) 6341	名古屋 052(581)2131	福岡 092 (471) 2020
東北 022 (227) 2666	新潟 025 (246) 3111	長崎 0958 (22) 2281
青森 0177 (75) 3980	富山 0764 (31) 8347	大分 0975 (58) 4110
秋田 0188 (33) 2456	大阪 06 (223) 6227	鹿児島 0992(23)3011
千葉 043 (227) 2281	高松 0878 (62) 2201	沖縄 098 (867) 4145

新建材紹介コーナー 204

日本建築協会建材委員会

耐火被覆をなくす新しい建築構造用鋼材

耐火鋼

新日本製鐵株式会社
大阪 大阪市北区中之島3-2-4(朝日新聞ビル) 〒530
TEL.(06)223-6227
本社 東京都千代田区大手町2-6-3(新日鐵ビル) 〒100-71
TEL.(03)3242-4111

❶——はじめに

鉄骨造の建物は、火災による加熱で鋼材の強度が低下し倒壊の恐れがあることから、建築基準法で耐火被覆（以下、被覆）が厳しく義務付けられている。

このような被覆工事は、しかしながら、建設コスト・工期・作業環境などの点で鉄骨工事の問題点のひとつとなっていた。また、最近では、鉄骨フレームを意匠として表現する設計が多くなされ、このような観点からも、被覆の軽減、あるいは無被覆の鉄骨造建物の実現が要望されていた。

一方、建設省総合技術開発プロジェクト「建築物の総合防火設計法の開発」（1982～1987）により、従来の建築基準法に基づく一律の防火規定ではなく、建築物の火災条件・設計条件や使用材料の性能により総合的に防災安全性を評価する手法が実用化され、新しい材料の開発が促進されることとなった。

耐火鋼（Fire Resistant Steel：FR鋼）は、このような背景から1988年に当社が開発した新製品で、耐熱性を向上させる合金（クロム・モリブデンなど）を添加することで高温強度を向上させた新しい鋼材である。

❷——耐火鋼の特徴

耐火鋼の特徴を以下に示す。

(1)高温強度が通常の建築用鋼材（以下、一般鋼）と比較して著しく高い。

耐火鋼の高温強度（降伏点）をSM490鋼を例に一般鋼との比較で示す（**図1**）。一般鋼は350℃付近で常温規格値（325N/㎟）の2/3まで低下するが、耐火鋼は600℃までこの値を保証する（ミルシートに記載）。

常温規格値の2/3とは長期許容応力度に相当する。火災と地震は同時に考慮しないことから、建物の自重を支持できる強度、すなわち長期許容応力度が火災時の必要強度である。

(2)常温時の設計・施工は一般鋼と同じであり、建築用鋼材としてそのまま使用できる（常温時性能は、溶接構造用圧延鋼材の規格に合致する。また、一般鋼と同等の溶接性を有する）。

❸——耐火鋼の鋼種

耐火鋼の鋼種を**表1**に示す。厚板・H形鋼・鋼管を製造している。なお、耐候性仕様の耐火鋼は、外部鉄骨建物（柱・梁などを意匠的に建物の外部に露出する建物）など耐候性が特に要求される部材に使用する。

❹——耐火鋼の用途と実施例

耐火鋼の許容温度は600℃であることから、可燃物が多く火災時に鉄骨温度が600℃超える建物、例えば、

(1)事務所ビル　(2)倉庫
(3)物販　(4)共同住宅

などでは被覆厚を軽減することとなり、可燃物が少ない建物、例えば、

(1)駐車場　(2)駅ビル　(3)アトリウム
(4)スポーツ施設　(5)外部鉄骨建物

などでは、無被覆となる。

以下に無被覆の実施例を示す。

(1)駐車場：**（写真1）**

千葉市に建設された駐車場では、我が国で初めて無被覆の鉄骨造駐車場が実現した。このような商業施設に付随する駐車場では、被覆をなくすことで、明るく清潔なイメージを実現できるとともに、直接鉄骨に塗装することで階ごとの色分けや方向指示も容易に行えるなどメリットが大きい。

(2)外部鉄骨建物：**（写真2）**

神戸市に建設された事務所ビルでは、31階建て高層棟に6階を1ユニットとするメガストラクチャーによる吊り構造が構成され、このメガストラクチャーに耐火鋼を使用し、被覆厚を薄くする（セラタイカ2号：10㎜）ことでスレンダーなフレームが表現された。

❺——おわりに

以上、耐火鋼の特徴とその使い方を紹介した。耐火鋼は、鉄そのものの耐熱性を改善することで、被覆の軽減や無被覆を実現した新しい建築構造用鋼材である。

被覆の問題は、耐火構造が要求される建物共通の課題であることから、耐火鋼の用途は極めて広い。今後、さらに用途開発や有効な使い方（耐火塗料・鋼管コンクリートなどとの組合せなど）の研究を進めば、鉄骨造の新しいデザインや工法が生まれることが期待される。　**（作本好文）**

渡辺 博／建材委員



写真1：センシティパークプラザ
（設計：タカハ都市科学研究所、施工：大成建設他）

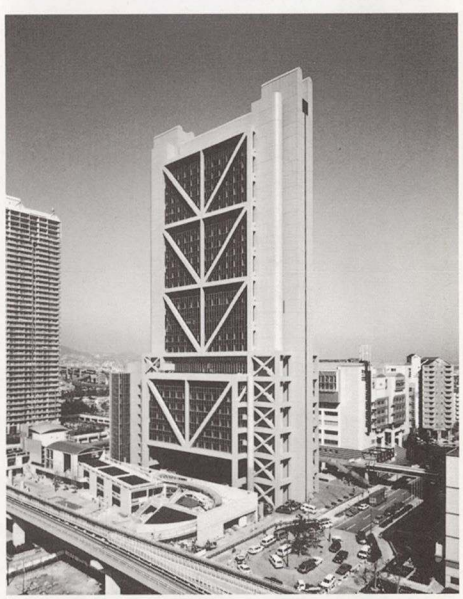


写真2：Procter & Gamble Far East, Inc.
Japan Headquarters and Technical Center
（設計・施工：竹中工務店）

図1　鋼材の高温強度

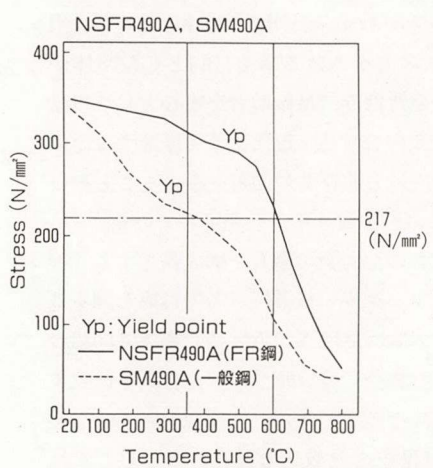


表1　耐火鋼の鋼種

鋼種	種類		規格記号	適用厚さ(㎜)（鋼管では外径）
厚板	一般		NSFR400A,B,C	6以上、100以下
			NSFR490A,B,C	6以上、100以下
			NSFR520A,B,C	6以上、100以下
	TMC仕様		NSFR490B,C-TMC	40超え、100以下
			NSFR520B,C-TMC	40超え、100以下
	耐候性仕様		NSFR400A,B,C-W	6以上、100以下
			NSFR490A,B,C-W	6以上、100以下
H形鋼	一般		NSFR400A,B,C	40以下
			NSFR490A,B,C	40以下
鋼管	シームレス鋼管		NFR400-TK	φ165.2～406.4
			NFR490-TK	φ165.2～406.4
	大径鋼管	UO鋼管	NFR400-TK	φ457.2～1422.4
			NFR490-TK	φ457.2～1422.4
		板巻き鋼管	NFR400-TK	φ400～5000
			NFR490-TK	φ400～5000
	電縫鋼管		NFR400-TK	φ42.7～406.4
			NFR490-TK	φ42.7～406.4

建築の眼

本づくり

昨年度(1992年４月から本年３月)は６冊の本の出版に参加した。最初は６月の『甦る都市ウォーターフロント』(NHK出版)、ついで、８月に『現代大都市のリストラクチュアリング』(東大出版会)、年の瀬の12月に『世界都市・関西の構図』(白地社)と続いた。これらの本は監修者や編集者が他にいる分担執筆だったから出版の苦労をほとんど知らない。ある日突然、本が完成し、手許に届けられて感激した。年が改まって１月に『日本的広場のある街』(プロセスアーキテクチュア社)を刊行し、２月に『面白い都市』(学芸出版社)が出た。そして年度末の３月に『De大阪』(KBI出版)を刊行して打ち止めとなった。

いま振り返れば、本づくりの苦労を味わったのは『日本的広場のある街』と『De大阪』だけといってよい。この２冊では、建築におけるスタイルにあたるものをきっちりとデザインしてイメージとして送り得ているか、その強迫観念がつきまとっていたからである。

しかし、今ではそれも疑わしくなってきた。書棚に並列する６冊の本と、加えて献本先からの返礼として送られてきた新刊書を眺めてみると、自分のアイデンティが疑わしくなってきているからである。

加藤晃規　大阪大学工学部環境工学科助教授

プロポーザルから

建築審議会答申を受け、建築省が基本設計から発注する業務は少数のコンペを除いて原則としてプロポーザル方式を採用することになり、具体的に何件かが実施されている。地方自治体を中心に公共建築の発注機関も設計者選定には関心をもっている。

そうした中、ある市の美術館の設計者選定をプロポーザル方式で実施するということで協力をする機会があった。そこで一番大切なことだと感じたのは、候補者の絞りこみである。あまたいる設計者の中から、何を根拠に、どういう基準で抽出するか。建築情報誌等から作品性を判断し、相応しい能力を持つ人をリストアップしたつもりでも主観が入りがちである。また過去に何度かお付き合いいただいている設計者は結果が想定できるという意味で無難であるが、公共建築の実績が無い若い設計者には、たとえ能力があっても可能性を信じて仕事を依頼するのは怖い。ベテランと新人を同じ俎上では評価できない。等々である。入札によらず、簡明かつ負担の少ないこの方式が今後普及していくためにも、予定されている設計者情報の一元整備が一日も早く実施されることを期待したい。

玉井龍男　建設省近畿地方建設局営繕部建築課長

東京と江戸

いつ東京に行っても人の多さに息苦しさを覚える。それにしても、東京は、なにもかも大きくすべてに超がつく。地下鉄は、迷路のように走り、電車という電車は何輌編成か、やたら長く何時も大勢の乗客である。新しいビルは、いずれも規模が大きく大阪のビルに比べて数倍もある。

最近東京に出張した時、時間に少し余裕ができ、たまたま近くにいたこともあって、江戸東京博物館を駆け足で見た。

なにかの雑誌で、恐竜やマンモスの体重を支える足を構造解析すると、これでは歩くことができないのではないかと思うほど、ばかでかい足になるという絵を見た記憶がある。博物館を見た時、このマンモスの絵を思い出し、まさしくマンモス東京に相応しいものだと思った。

館内の展示は、江戸から東京へと、生活や文化の移り変わりが、よくわかるもので、長いエスカレーターのアプローチも忘れて、江戸の町割や、盛り場など興味深く見たが、大名屋敷の立派なのには想像以上で驚いた。東京の展示エリアよりも江戸の展示エリアの方が人気を集めていたが、東京エリアの戦前住宅の所でのスケールにホッとするものを感じ、マンモス東京を離れた。

福岡と博多で始まり、東京と江戸で終ります。

隅谷康彦　大建設計取締役大阪事務所長

後継経営者の会

建築業界は建設省の指導のもと構造改善の推進を行っているところであり、ゼネコンとサブコンが互いに力を合わせ、新しい時代を見越して人を育て磨き、夢のある建設業にすべく努力中である。

各ゼネコンにおいては、ゼネコン毎に傘下の協力会や親睦会があるが、この会員の二世や三世で次の時代を担う若手後継者達で構成する会の発足が近年目立った動きとなっている。当社に於いても“緑会”と称する協力会社の会があり、会員間の親睦をはかり、当社の業務に協力して共存共栄の実をあげる事を目的とした団体があるが、この会員中より次代を背負う二世後継者を中心として組織され、会員の健全な発展と企業の合理化・近代化等を推進するための研修と、相互の連携を強め当社と共存共栄の実を挙げることを目的とした“松青会”というものが平成２年より発足している。

これとは別に各ゼネコンごとの協力会の会長を構成員とする「近畿建設工事業会長会」がサブコン業界の後継経営者の育成を図ることをめざした〝21世紀の会〟や大阪府建団連の近畿建設躯体共同組合の大工部会の二世でつくる〝型青会〟等冒頭で述べた目的を達成するための若手の会の活動の盛んな此頃である。これらの若手の会が今迄の建設業から脱皮して21世紀の建設業の発展に寄与してくれる事を大いに期待し、その活動に援助したいと思っている。ゼネコンはサブコンなしにその発展はあり得ないから。

得田芳宏　松村組取締役大阪本店建築部長

特集

都市のスカイライン



比較的平坦な表情であった都市のスカイラインを大きく変えたのは、超高層ビルの出現であった。最初はただ高いというだけで注目を集め、目立っていた超高層ビルも、その希少性を失うにつれて従来の単純な箱型から脱却したデザインが主流になりつつある。また橋や高架といった土木構築物も、機能性・合理性一辺倒から街の重要な景観要素として扱われるようになってきており、都市のスカイラインも質が問われる時代を迎えたといえよう。

そこで、本特集では「都市のスカイライン」と題して、都市におけるスカイラインの意味や重要性についてあらためて考え直すとともに、スカイラインに特徴のある建築のデザイン意図を設計者自身に語っていただくこと、「わがまちのスカイライン」の投稿記事の掲載などを企画した。ただ「都市のスカイライン」は、いわゆる景観問題と切り離して考えられないのであるが、今回は「景観問題関連年表」を作成するにとどまっており、この点については御叱責を甘受しなければならない。

本特集が、都市景観に一層関心を持つ契機となることを願っている。

計画系分科会委員●吉村英祐

本特集編集幹事
河端秀直/梅村宏尚/小浦久子/鈴木克彦/田中直人/林輝行/松川敏正/山尾弘子/横関真紀/吉村英祐

PROLOGUE

都市文明とスカイライン

紙野桂人

スカイラインの発生

人類が意識をもって生活領域を行動し始めたとき、川や湖水や海洋の沿岸域が行動のシステムに枠組みを与える役割を果たしたことは、ほぼ間違いのない事実であろう。なぜなら人間の生存にとって水は不可欠であるし、母なる川や海がもたらしてくれる豊かな食は、森の樹や草や獣などの諸々の生物が与えてくれる食よりも四季安定した恵みに違いないからであった。これに加えて、深い森の世界で人間が視界の見通しを得ることは、必ずしも期待し難いことであったが、人が水面に出合えば、それが川であろうと海であろうと帯状にあるいは盆状に視界が開けて、自分たちの生活領域の図式を眼で意識する必然性が与えられた。

この可能性は人間の生活行動を安定させ、その領域を広げ、行動の成果を豊かにしたに違いない。

そしてそこから、自分たちの生活領域を出て別の地平への進出すなわち旅が、始まったとも想像される。

世界の姿を視野に入れて意識し、行動の図式を感性の世界から理性の世界につなぐことが、人類の文明のひとつの道をつくったと言えるように思う。それを可能にしてくれた条件が、水面の空間性であり、その視界を形成する自然界の図像であり、さらに付け加えれば、領域の何らかの高所が与えてくれた「高見」の展望であったと言えよう。

この開かれた空間と視野の図像的世界がもたらす情報効果は、それ以来人間の本性が求めるものに組み入れられ、それによって改めてひとつの感性に結びつけられる結果となっている。つまりわれわれは、心のどこかで開かれた展望、自分のいる世界を見渡せる機会を求めており、その場に臨んで空と万物の区切りを認識した瞬間、深い感動に襲われるべく仕組まれているのである。そして、帯状や盆状の視野の世界にあって、空との境界を形づくる図像がもたらす情報効果に対して、われわれの感性がまず反応することも事実なのである。

この空と万物との視覚的境界像に対して、SKYLINE（スカイライン）なる名称が与えられている。

ナポリ



都市のスカイライン

さて、人類はその文明の所産として都市なる世界を構築した。この人間の最も人間的な世界としての都市において、その視覚的世界の形を定めること、森に入って森を見ざる世界から都市と自我との意識的関係の世界を形づくることが求められてきたのは、先に述べてきたように文明自体の帰趨であると言ってよいと思う。

都市は、文明の意志においてその形を、空と都市的構築物とを区切る図像世界、すなわちスカイラインにおいて与えられたと言えよう。

古代メソポタミアのジグラット、古代ギリシアのアクロポリスは都市を象徴する建築を高く掲げることによって支配的な形をつくり出した。キリスト教文明、イスラム教文明、ヒンドゥー・仏教文明はそれぞれに塔を持つ都市像をもって独自の世界を形成した。市壁・高楼・城廓の都市像もまた、そのスカイラインの表現に意識を集中した。

近世都市文明は都市空間の中に、象徴的な大通りや広場をつくり出し、その視覚像を街壁あるいは主要な建築物のスカイラインによってデザインしようと意図し、それを実現した。その一方で巷の自然発生的な街空間は、その都市の経済的・社会的・人間的な仕組みの結果として、それぞれに独自の街の表情を生み出したが、その自発的なスカイラインはさながら自然が産出した風土の造形のように、人の心をひきつける力を持つに至った。それは洋の東西・南北を問わず人々に愛されてきた。

近代都市が生み出したもの

都市には計画的・意図的につくり出された顔と、おのずから発生した身体とでもいうべき姿とがあって、近世都市においては、この両者は相互に一定のバランスを保ってきたように見える。例えば、パリがモンパルナスの丘に立つサクレクール寺院に向けて、見事なスカイラインの高まりを見せるのがそうであるし、エトワール広場からコンコルド広場へのブールバールのスカイラインもまた、計画されたものとされざるものの近世的複合体であると言えるであろう。



サンジミニアーノ

今、旅行者たちがウィーンにおいて、ロンドンにおいて、あるいはミュンヘンにおいて（第二次世界大戦の破壊を経て再建されたものではあるが）眼にする都市のスカイラインは、中世都市の遺産になる部分もあるにはあるが、その大勢はこの近世的都市の帰結によっているのではある。そしてその延長はアメリカ合衆国あるいは植民都市の歴史を持つ世界の諸都市に及んでいる。

都市の近代化はその初期においては、それぞれの近世的都市空間とのコンテキストを保ちつつ進行した。それは、脈絡のプロトタイプが根本的に異なるとはいえ、わが国においても同様であった。京都において大阪において、そして東京においてもそのスカイラインは、京・大坂・江戸それぞれの近世的空間のコンテキストの上に一定の欧化（欧米の近世的脈絡）を受け入れたと言える。

これに対して、第二次世界大戦後の都市は、近代技術社会がその力量をフルに発揮する過程で、大戦前に保った近世的伝統の脈絡を完全に崩壊させる方向に動いた。そのなかでは本来生み出されるべき新たな力あるスカイラインへの意識はまだ姿を現しておらず、言わばその萌芽を見出すことすら困難な状況となるに至っている。

近代建築においては、都市のスカイラインを紬ぎ出す要素となる屋根が失われた。そして、建築物の高低の微妙なバランスを生み出す高さの感性と、それを調整する理性を、土地利用の経済的価値判断に売り渡してしまった。さらに困ったことに、失われた建築の屋根に代わって、内部機能を調整する機械装置や、広告物など雑多な代物を外に持ち出したが、その結果はもはや都市のスカイラインと呼べるものではなく、都市の屋上を雑物が占拠している風景となっている。もっともこのような状況は、世界的に見ると日本的事情と言えるものかも知れない。なぜなら、すでに近代化された世界のどの都市においても、わが国の場合ほど激しくスカイラインを見失った風景を見ることは希だからである。したがって、わが国の都市においてその姿を問題にすることは、世界の諸都市の場合とは少々違った次元で議論を起こすことになるというところを、理解しておく必要があろう。

近代都市のスカイラインは、理論的にはル・コルビュジエが創出した「輝ける都市」の図式、すなわち緑豊かな地表を「地」に、高層建築の幾何学的形態と、ハイウェイの構造ラインを「図」として描き出す構図をプロトタイプとしている。しかしそれは、人類の都市文明の彼岸にある理想像に過ぎなかったと言えるであろう。それはコルビュジエ自身がマルセイユやパリで設計した建築の現状を見ればよく解る。彼の作品は昔からの南フランスの赤い瓦屋根やパリの灰色のスカイラインの中のひとつの異風景に過ぎないのである。それは彼本来のイメージとは程遠い。

他方、都市の郊外においてつくり出された住宅都市のスカイラインは、高層住棟と中層または低層の住棟、その背景となる丘陵や森や水面の織りなす一体の風景として一定の成功をおさめた。しかしこの風景に対して、人類の都市文明のスカイラインに一頁を付け加えたものとしての評価を与えうるかどうかは、疑問が残るように思う。なぜならそれは、一定の快適性を持ってはいるが、都市の姿として人に感動を与え、都市独自の趣を見る者に伝える力を持たないように見えるからである。ベネチアのスカイラインに感動する旅行

ベネチア



者が、果たしてロンドン郊外のニュータウンのスカイラインを見て感動するかどうか。答えは否定的にならざるを得ないであろう。

近代都市文明がつくり出した感動的な形は、ニューヨークのマンハッタンに代表される超高層建築物群がもたらす高度な都市像にあると言えよう。それは確かに人をして現代の都市に面している興奮に巻き込む力を持っている。そしてその対極に、例えばリオデジャネイロやインドのカルカッタに見られる、無数の低層家屋がまるでカビのように起伏する地表を埋め尽くして広がる茫々たるスカイラインの広がりがある。前者は近代都市現象の合理的部面を反映し、後者はその非合理的部面を象徴している。人はまた、この都市膨張の生物的実態に触れて、ひとつの感動を覚えるのである。

都市文明の意志

人類の都市文明は、いずれの時期、いずれの文化的伝統においても、その時代その都市を表象する一定の意識において、都市のスカイラインを創出し、都市の心を表現してきたと言えるように思う。ただ私の知る限りにおいては、古代ローマ世界の都市のスカイラインなるものについて、ひとつの矛盾した実感を持っている。例えばナポリにおいて、あるいは他の地方小都市の街景において一定のスカイライン像が眼に浮かぶが、首都ローマについては確かなイメージが浮かんでこないのである。七つの丘をめぐって100万人の人口を抱え、1,790戸のドムスと46,000戸のインスラ、凱旋門、大劇場、公衆浴場、神殿、政庁など数々の大公共建築を建設した古代ローマ市そのもののスカイラインにいかなる表出意図があったのかは極めて不分明である。そもそもローマ市の構成軸なるものも時代に応じて錯綜し、建築物・構築物はすでに高層化し巨大化していたにもかかわらず、都市の冠となる中心的建造物に向けて都市を形づくるデザイン意志が働いたとは思えない。つまりスカイラインが見えてこないのである。

この状況は先にも触れた現代の都市文明のあり方と似ているように私は思う。都市全体が巨大化し高度化したにもかかわらず、その全体像は、個々の技術的意志、表現的意図の総和の中に埋没して、多様で時には魅力的ですらあるが、その正体を容易には現さない群生状況があると言えばよいのであろうか。

日本の大都市、特に東京や大阪はその最右翼にあるように思う。実際そこには合理的なもの、非合理的なもの、意志のあるもの無いものが蝟集し、日々変貌を繰り返している。またその巨大なスケールは、もはや単一の冠に集約する次元をすでに超越している。古代ローマが七つの丘の都市と呼ばれたそのイメージは、いみじくも現代の大都市の状況を言い表しているように思われる。

現代の都市文明の意志を、ひとつの脈絡の中で見出すことは難しいと思う。ただし、都市としての意志を持たない顔のない文明と、群生する意志の力学を表す多面的な顔を持つ文明には違いがある。

現代の都市はいまや後者の方向を探るべきであろうと私は思う。

都市空間のスカイライン

都市のスカイラインは、まず外からの展望において、見る人に強い印象を与える。それはすでに述べたように、都市のアイデンティティを大きく支配する可能性を持っている。風土と建築、文化の連続性と時代の文明の意志、そして都市の規模と構造がそのあり方を

パリ、リヴォリ通り



ディンケンスビュール



規定する。それが人の眼に見えるか否かは、その都市の意志の強弱によって定まってくると私は思う。現代日本の都市文明はその意志の如何を問われているのではないか。

これに対して都市の内における視覚がある。それはサブシステムとして存在する個々の都市空間の場に応じて人に話しかけてくる。スカイラインはその眼に見える形を規定する大きな要因となる。

これまでの都市文明がつくり出してきた、スカイラインを持つ都市空間は、大きく分けて街路・運河などの交通路に沿って生じる空間回廊と、広場・緑地・水面を囲み、あるいはそれに面して形成される空間場のいずれかになる。都市空間としてはもうひとつ、古代ローマやイスラム文明に代表される覆われた大空間の系譜がある。それは近代に至ってガラス屋根のガレリア、そして現代のアトリウムに連担するが、仮にそれにスカイラインを当てはめたとしても、結局は回廊空間または空間場のいずれかに統合されるものである。

西欧の古典的都市文明は、都市空間を意図的に形成しようとしたとき、直線的に水平に伸びるスカイラインを強く意識した傾向がある。これに対して西欧中世の都市は、キリスト会堂を中心とする都市全体のスカイラインの求心性は強く意識したが、都市空間のいずれの場面においても、個別の建築的スカイラインの複合体をもって結果を出そうとしたように見える。これに対して近世のルネサンス文明は、古典的意図を復活させることによって、中世的空間を改めて脱却しようとした。

中国を中心とするアジアの都市文明は、都市空間のシステムとして直角方格の概念に固執しながらも、スカイラインの形成についてはむしろ、千変万化する線の重なりや動きをもって意図すべき境地とした。

ニューヨーク、バッテリパーク



都市空間のスカイラインに明晰で幾何学的な帰結を求める精神と、理性の予測に応じない絵画的な帰結に向かおうとする精神が、それぞれ時代の文明、東西の文明の意志となってきた歴史があったのである。そのいずれを指向するかは、その都市の意識、その空間を形づくろうとする人間の意志で定められてきた。後世に至ってその帰結を見る者は、その如何を都市のスカイラインから読み取り、構想の大きさや鋭利さ、強さや優雅さについて感動することになる。

都市の意志への問いかけ

今、関西の都市空間のスカイラインについて、いくつかの議論が起こっている。たとえば大阪の御堂筋について、その秩序立ったスカイラインの評価に甲論乙駁がある。

御堂筋なる空間の形成については、過去において明確な都市の意志が働いている。この意味でそれは文化財としての資格を持っていることは銘記されなければならない。それに対して、この空間を囲む街壁とスカイラインは、この空間の「格」に対する社会の反応が、時代の建築行政の枠組みを通して形となったものである。したがってそれは都市の意志というよりも、都市社会の動きの帰結である。社会の反応が同じであっても、もしも行政の枠組みが違っていたとすれば、その帰結は異なり、御堂筋の表情は今とは違ったものとなっていたであろう。そこにこのスカイラインが、時代の文化財として自己を主張しきれない弱さが漂っている。それを専門家たちの議論としてではなく、改めて都市の意志として定立しうるのかどうかが問われていると思う。

御堂筋なる近代都市の文化財を、われわれの都市文明の意志として今どうしようとしているのか。

これまでに保たれてきた空間の質を一段と高める意図をもって、地域の空間環境にメスを入れる事業を起こし、それによって先人の意志に現代としての対応を図り、われわれの都市としての答えを出すのはひとつの道である。世界の優れた文化財は大部分がそのような過程をたどって現代に伝えられてきている。しかしその場合、失敗は許されないであろう。いかにすれば時代の意志を働かせつつ成功に導きうるか、それが問われることになろう。それは単なる利便性や快適性の議論を越えた次元の問題として理解すべきであろう。

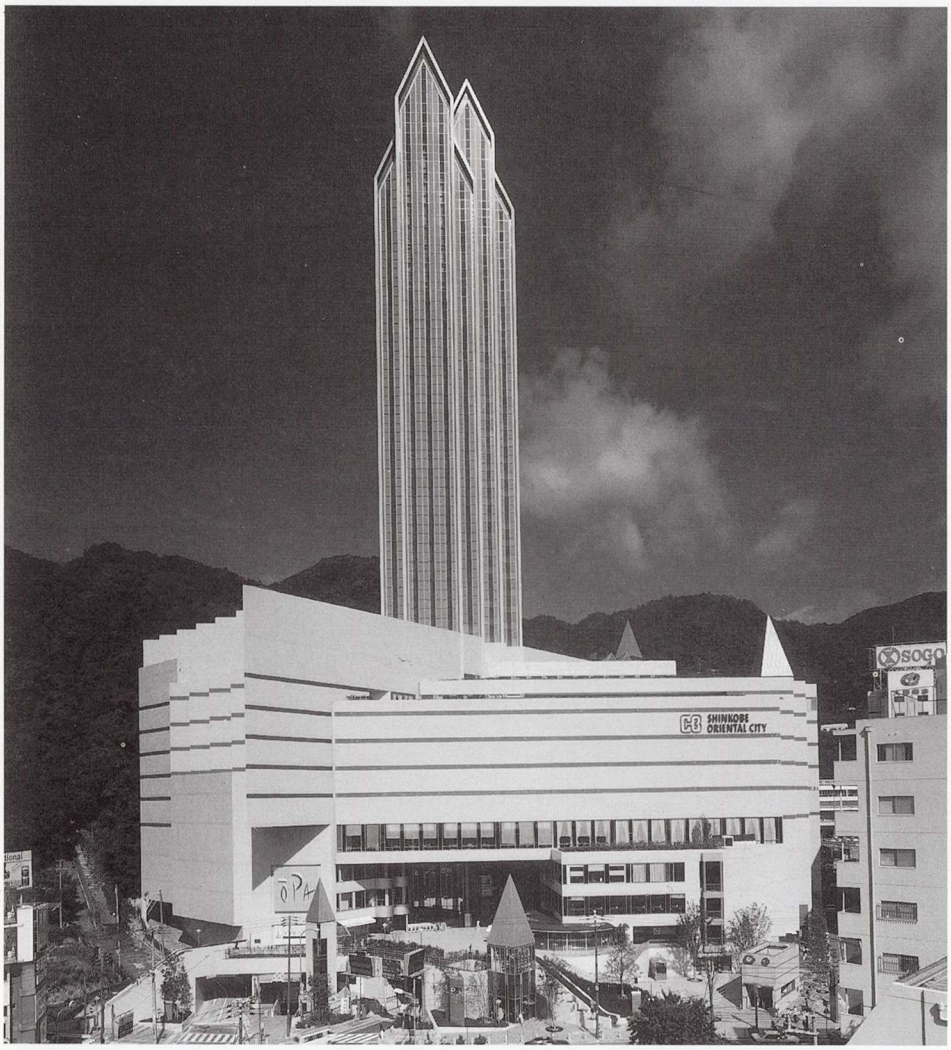
都市を開発整備し、都市の中に姿を現す建築を設計するものには、その都市のスカイラインについて、都市の意志を読み取る努力が求められる時代に入ろうとしていると私は思う。

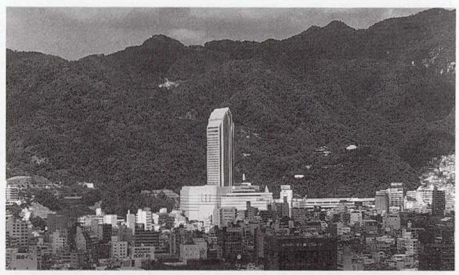
（かみの　けいじん　大阪大学教授）

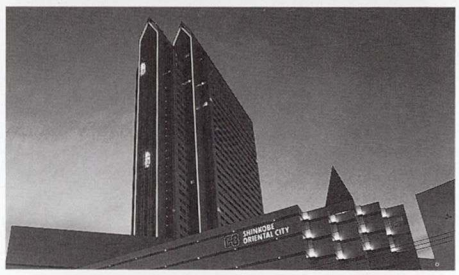
新神戸オリエンタルシティ・C3

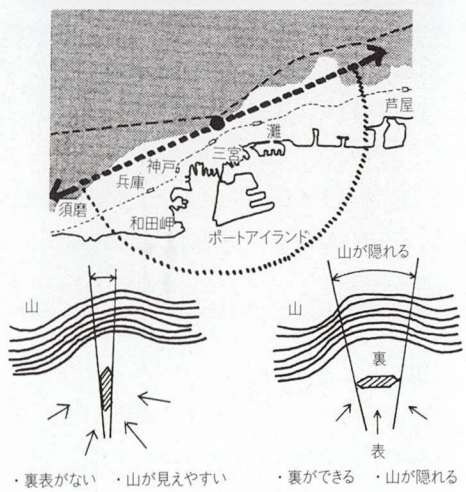
六甲の山並みを背景にした超高層ホテル

鎌谷憲彦









新幹線新神戸駅周辺は、神戸の陸の玄関として都市機能を整備する街づくりが進められてきている。新神戸オリエンタルシティ・C3はこの街づくりの施策に沿い、神戸の新しいシンボルとして都市景観の形成に寄与することが求められた。建物はショッピング街、ホテルパブリック部分、劇場、駐車場などの施設を組み合わせた低層部と37階建のホテル客室タワー部とからなる。

神戸の市街地部分は海と山とに挟まれ東西に細長く引き伸ばされた典型的な帯状都市である。立地条件としては市街地中央部の山麓にあって、ここに超高層ビルを建てると六甲山を背景に市街地のあらゆる地点から見えることになる。山並みを背景にした超高層ビルというのは特異な立地条件である。この条件を最大限に活かし、かつ神戸という街に相応しい進取の気風に富んだイメージの形成をはかりたいと考えた。

客室タワー部を板状にし、その軸線を東西の市街地の流れに対し直交させる。こうすることによって、市街地からは建物の妻面が見え、背後の山並みをさえぎらないスレンダーな超高層ビルのシルエットとすることができる。客室のレイアウトとしては東面と西面に分かれることになるが、それぞれの部屋からは海と山とその間に挟まれた市街地という神戸の特徴を見ることができる。客室からの眺望も帯状都市の流れに直交した軸線配置は有効であった。

低層部は建物の軸線に対し、45度方向に延びてくる神戸のシンボル道路の軸線をとらえる必要がある。この道路の下には地下鉄があり、敷地の地下中央には地下鉄の駅舎が着工前に完成している。駅舎上部の荷重制限から、駅舎に載る部分は建物の軽量化をはかるとともに、駅舎に沿って低層部中央で端から端まで建物を45度方向に切断し、駅舎への影響を極力なくした。このダイアゴナルに建物を二分するエキスパンションに沿って3層吹き抜けのモールと10層吹き抜けのアトリウムが配置されている。都市軸とそれと45度ふれた低層部の軸線を組み合わせて、ここに都市の中の都市ともいえる錯綜した半屋外空間の景観をつくり出した。

新幹線新神戸駅からはモールを抜けて、風見鶏で有名な異人館街の北野町界隈に通じており、観光ルートとなっている。

敷地は新幹線駅前ではあるが、すぐ後ろが山ということもあり、都心的なターミナルのダイナミックな表情と山麓に拡がる住宅地のこまやかなスケールが至近距離でぶつかりあっている。この敷地の特性に合わせ建物の外周は4mグリッドで雁行させスケール調整をし、またタワー頂部の尖形の屋根も細かく分割して六甲の山並みに映えるデザインを求めた。

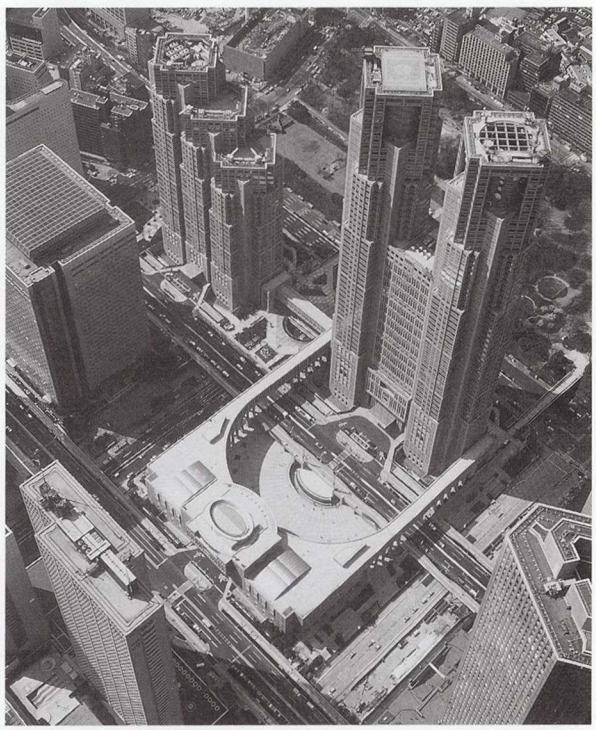
（かまたに　のりひこ　株式会社竹中工務店設計部）

東京都庁舎

二つの庁舎の一体感、周囲の建築群との調和

丹下健三







都庁舎の設計は21世紀に向けて発展する東京の自治と文化のシンボル、ふるさと東京のシンボル、また国際都市東京のシンボルとしてふさわしいものと言われ、象徴性が求められた。この象徴性と同時に防災拠点としての安全性と堅牢性が、また行政機能の近代化に向かうOA化のためにフレキシブルな無柱空間が、一方その機械化を補完する人間的空間がそれぞれ求められた。さらに周辺との調和を確保しながらもその中での独自性を持つことなど、多くの課題が与えられた。

敷地は新宿新都心の3つの区画からなり、西側は新宿中央公園の緑地に面し、他の三方は既存の超高層ビル群に囲まれた非常にアーバニティの高い都市的な環境に位置している。

新都心地区の中央にあたる区画には都議会議事堂により半楕円形に囲まれた広場空間を設け、地区の過密化を防ぐ都市性の高い都民広場とした。知事部局を中心とした第一本庁舎は3棟の「要」の位置に広場と中央公園の間に配置した。敷地の形状が幅広い見付けに対し比較的浅い奥行きのため、単純な直方体のビルにしてしまうと巨大な壁となり、広場に対しても周辺の街並みに対しても圧迫感を与えてしまうので、中間部は隣接する150mクラスのビルの高さに合わせ周囲の建築群と馴染ませ、それより上を高さ243mの双塔とし、シンボル性を高めた。また現業部門を入れた第二本庁舎は中央公園に面する第一本庁舎横に設置し、高さは163mに抑え、頂部を3段の階段状とし第一本庁舎と都民広場に向けて順次低くなるよう指向性を持たせた。

こうすることにより二つの庁舎棟の一体感を強め、都民広場へ向かう動きをも感じさせるとともに、周囲の建築群とも調和した特色あるスカイラインがつくり出された。

スーパーストラクチャーのコア、オフィス空間のコーナーウィンドー、双塔の第一本庁舎、階段状頂部を持つ第二本庁舎など、特徴づけられた建築の形状には国際都市シティ・ホールにふさわしい外装が求められた。無柱空間を得るため採り入れられたスーパーストラクチャーを表現するためにメジャーストラクチャーとマイナーストラクチャーを分離し、超高層建築にありがちな単調さを破り、威圧感を和らげ、かつ東京の文化性を江戸以来の伝統的な形から想起させると同時に、最先端の情報化都市東京の先進性をも表現するものとした。材料は耐久性に富み、メンテナンスの容易な濃淡2種の御影石が選ばれた。またこの周辺は風環境としてもかなり厳しい状況であるが、風向頻度の高い北寄りと南寄りの風に対して建物幅を狭くし、南北両端の出隅を削った平面形にすることにより風の影響範囲を小さくし、壁面に凹凸をつけることにより風速の増加する領域を多少とも少なくするのにも役立てている。

（たんげ　けんぞう　丹下健三・都市・建築設計研究所代表）

毎日放送本社ビル

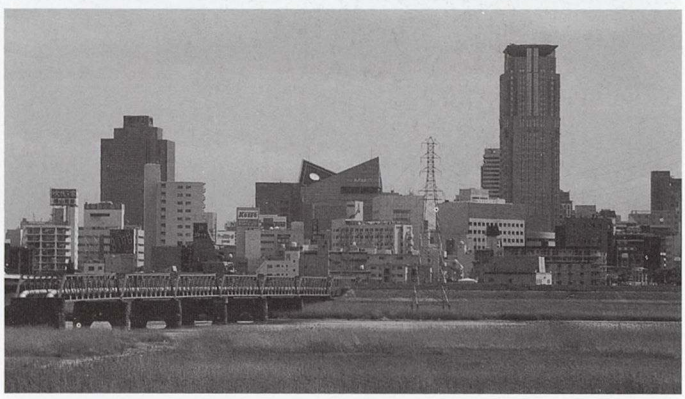
ＣＩ表現としての「M」型シルエット

渡辺豪秀



撮影　加藤嘉六





撮影　筆者

放送局は常に時代の流れとともに歩み、次の時代を予感させる先進性が必要である。これまで毎日放送は「千里丘放送センター」が放送の拠点、堂島の毎日会館が本社機能であったが、一歩先取りするジャーナリストとしての感性を磨くために、市内の中心部に本社機能と制作機能を統合した新しい時代にふさわしい拠点が必要であった。このような企業思想のもとに、現在の北区茶屋町の敷地が選定された。新社屋建設にあたって、クライアントから「ユニークで特徴のあるビルとしたい」という要望が出された。

都市型放送局の計画にあたっては敷地の有効利用を図り、市民に開かれた放送局とすること、北梅田地区再開発の先駆的な施設として良好な都市環境の創出と都市景観の形成を図ることを設計コンセプトにした。敷地の高度利用、周辺環境整備の点から、従来の放送局に見られるスタジオ棟とオフィス棟を別棟とする構成ではなく、MBSではそれらを一体的に複合化する構成とした。

新時代にふさわしいアイデンティティとMBSのイメージの表現をテーマに、フォルム検討を進めた。敷地南東部を斜めに90.6mの高さでNTTのマイクロ回線が通過していることが建物の高さを制限する大きな要因であった。この制約条件とクライアントから要望されたイメージから「M型ビル」の発想が喚起された。「M」は可能な限り高さを高くしながら、その谷間にNTTマイクロ回線をうまくクリアし、都市型放送局としてのMBSのＣＩ表現として、付加価値の高い形である。

超高層ビルは遠くから望むときのシルエットが重要である。特に頂部のスカイラインの形状はランドマークとして都市の風景を創る役割を担う。頂部の「M」は点対称の平面形と斜めに谷を構成することでＪＲ・阪急線、新御堂筋などから視点の移動により独特のスカイラインの変化が体験できる。隣接のアプローズタワーや梅田センタービルの中にあって、高さ90mではかなりの差があるにもかかわらず、「M」のスカイラインとバックマリオンで支持されたブルーグリーンの反射ガラス、見おろしの視点に配慮したガラス屋根の外観とそれに埋め込まれたパラボラアンテナはきわめて特徴的な都市景観を形成し、大阪のまちなみに一石を投じたといえるであろう。

バブル崩壊後一息ついたとはいえ、都心はさらに高密度化するであろう。地上の開放性と同時に集積化により都市のスカイラインは変化していくであろうし、時代性を反映した形態のビルが生まれるであろうが、建築単体のデザインを規定するものとして都市のスカイラインは、ある規範に基づいた形成方法が必要となってくると思われる。現在進められている御堂筋の高さ制限見直しの是非についての議論は、今後の大阪の都市景観形成を大きく左右するエポックメーキングになるだろう。

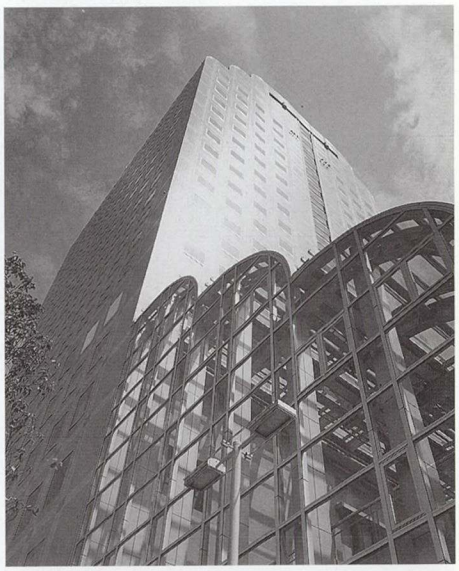
（わたなべ　たけひで　日建設計大阪第一事務所設計主管）

千里ライフサイエンスセンタービル

記憶する都市風景

近藤　睦







時代ごとの潮流の先端を競い合うようにして様々なビルが創られたニューヨークの摩天楼。歴史の深さを感じるヨーロッパの統一性ある街並みの連なる屋根。地中海やマグレブ地方の一見不揃いな屋根の重なり。それぞれに趣のある風景を感覚する。都市は、さながら建築にとっての博物館。時代の流れ・社会の変遷を複雑に刻み込み、取り壊されることでもない限り、いつの時代においても都市の風景となり続ける。

風景はもっとも自然に人の目、知覚感覚に訴えるものであり、とりわけ高層建造物におけるスカイラインは印象に残る風景、記憶の断片・残像として大きな役割を持つ。教会堂の鐘楼・モスクのミナレットなどのシンボル性、ランドマークとしての役割に等しいものも持ち合わせているのではないであろうか。スカイラインの持つフォルムは単に造形的なだけではなく、その建物の持つ性格や機能・与えられた使命のメタモルフォーゼであり、都市の風景を形づくる重要なオブジェである。

近年めざましい発展をとげている［生命（いのち）の未来を考える総合科学：ライフサイエンス］の研究者のための交流・育成を核とした複合施設、千里の新しい時代を象徴する建物が千里ライフサイエンスセンタービルである。

ニュータウンという生活の舞台を身近に感じつつ、北摂の山々を望み、今なお多く残る竹林・豊かな緑と「自然の様相があふれる風景：千里」。

この生命（いのち）（ライフ）のORIGINでもある自然の姿をキャンバスにどう描き込むか、ビル自身がいかにライフサイエンスのイメージを広く知らしめることができるかということで、「自然との対話」というテーマで建物をデザインすることにした。自然の形・流れ・やさしさを意識し、建物に与えられた役割から特徴あるシルエットとして、時・風とともに形を変化させながら大空に浮かぶ雲の姿、女性らしい（母なる）やさしさ・柔らかさを帯びたフォルムを抱かせている。豊かな緑を背景に、陽を受けては生命の息吹く大樹のように白く輝き、陽を背にしてはやさしさのフォルムを浮かびあがらせ青空の雲となる。時の流れ・自然の移ろいに呼応するかのように様々な様相を映し込み、風景のモデルとなっている。夜にはスカイラインのライトアップによりシンボリックなシルエットを浮かびあがらせ、千里のランドマークとなっている。また、曲面の連なるフォルムは、ビルの足元に位置するガラス張りのアトリウムにもつながり、ランドマークとは少し違った「街なかの風景・アートワーク」としてのスカイラインをつくり出している。夜は昼間の姿とは逆転して、「光のボリューム」としてのオブジェを街に投げかけている。

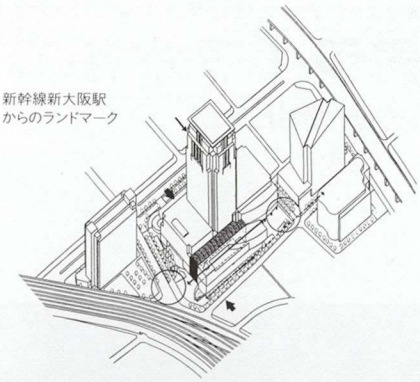
いつの日か、日曜画家であろう初老の紳士のキャンバスにこの風景が描かれていることを心待ちにしている。

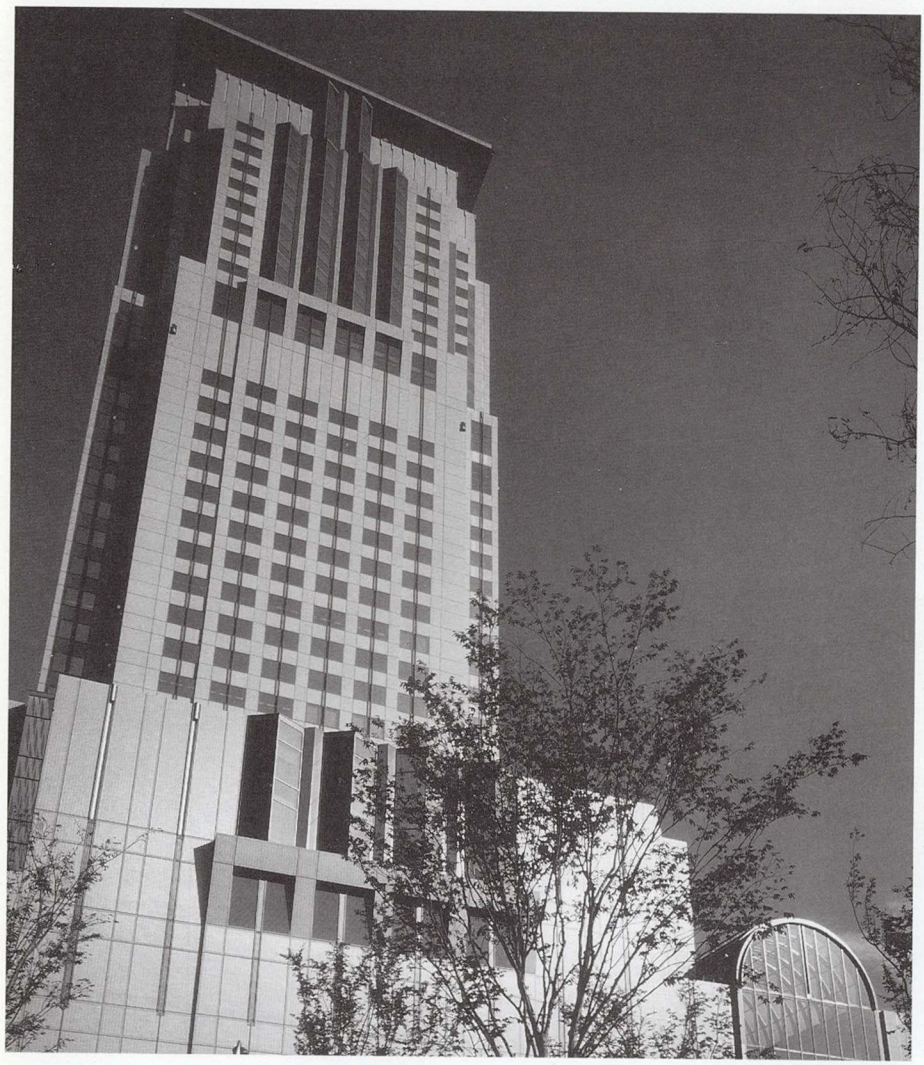
（こんどう　むつむ　株式会社東畑建築事務所）

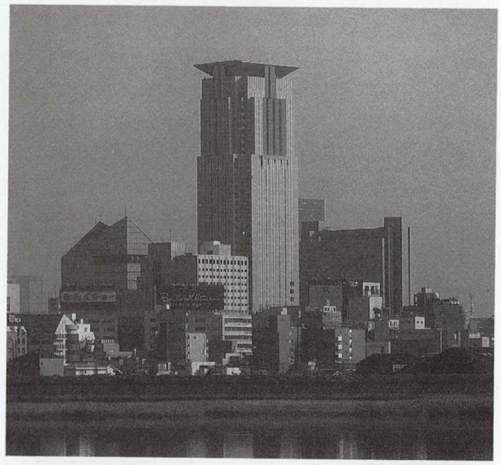
アプローズタワー（阪急茶屋町ビルディング）

街並みの形成をめざして

鎌谷憲彦


新幹線新大阪駅からのランドマーク







撮影　喜多　章

阪急梅田駅の東、茶屋町は古くは料亭などが立ち並ぶ風流な街であった。戦後は梅田界隈の繁栄から取り残され、老朽化した町屋や倉庫が立ち並ぶばかりであったが、近年新御堂筋沿いにホテルやオフィスが立ち並び、毎日放送ビルや梅田ロフトなども完成するに及んでにわかに活気を帯びるようになってきた。アプローズタワーはこうした機運をとらえ、阪急東宝グループがこの地域での街づくりの経験をもとに総力をあげて取り組んだプロジェクトである。

街並みを形成していくにはまず周辺街区と整合することが必要である。今回、東側の毎日放送ビル、西側の阪急電鉄本社ビルとそれぞれ企画段階で調整作業を行い、街区をまたがって広場を配置することができた。この街角の二つの広場をガレリアとけやきの並木道で結びつけるという構成を実現させている。

タワーは敷地中央に配置し、いきなり歩行者空間に超高層ビルが立ちはだからないように低層部を設け、周辺街区のスケールに合わせるよう配慮した。

超高層ビルの見えがかりとしては、阪急梅田駅に入ってくる各沿線の様々な方向からのランドマークとなるだけでなく、千里や新大阪駅に通じる新御堂筋からは正面に位置し、大阪のダウンタウンへのゲイトタワーの役割を果たす。こうした立地特性から、建物の軸性を大阪市街地のグリッドに合わせ、4面対称形のタワーデザインとした。

用途的にはタワー部はホテル客室とオフィスであり、低層部にはホテル宴会場やレストラン、劇場、フィットネスクラブなど様々な空間が配置されている。このような多種多様なコンプレックスをそれぞれの用途を損なわず、なおかつ全体として統一感のあるものにするため、ルイス・サリバンによる都市建築の規範にならい、3層構成で把握されるデザイン操作を行った。

低層部は街路を利用する人々のためのヒューマンスケールのあるベース、タワー頂部はクラウンということで都市のスカイラインを飾る。中間のシャフトはほぼ均質なデザインでベースとクラウンをつなぐ。こうした古典的な手法はミースのシーグラムビルなどにもひかえめに継承されていたものであるが、近年はポストモダンで過剰装飾をめざすか、技術至上のミニマリズムで押し切るかという状況が蔓延し、都市の中で建築相互がどう向かい合うかの視点が定まらない。街並みとしての都市デザインを形成していくにはまだまだ時間がかかるということであろうか。

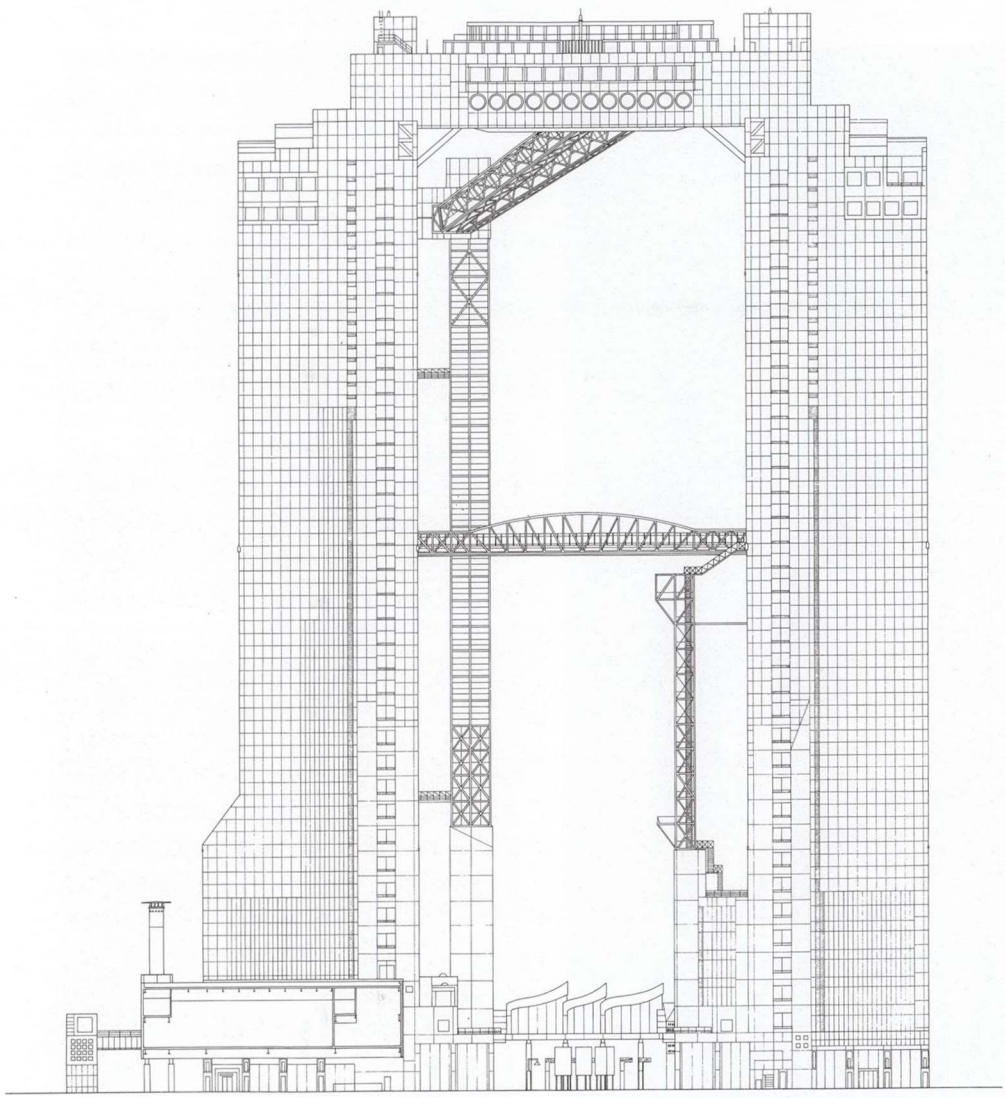
ホテルや劇場といった都心の華を演出する必要もあり、夜間はタワー頂部のヘリポートと低層部全周をライトアップし、夜のスカイラインに彩りを与えた。

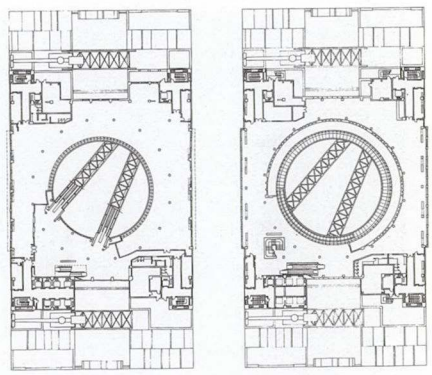
（かまたに　のりひこ　株式会社竹中工務店設計部）

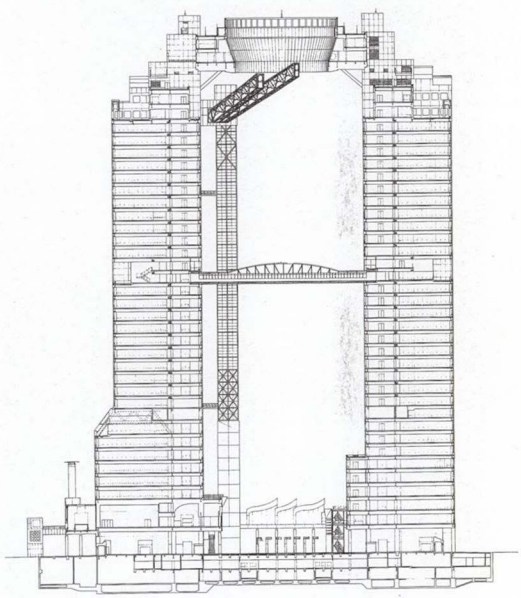
梅田スカイビル

空との対話

中谷俊治







クライスラー・ビルディングの尖塔は25年様式、アールデコの特徴を示すとともに、均質空間で構成されるスカイスクレーパーのデザインに新たな方向性を提示することになった。そのデザインは半世紀たった今も、いまだに色あせることなく、マンハッタンのシルエットを特徴づけている。

尖塔、トップのデザインは単なる建築の一エレメントにとどまらず、建築全体を特徴づける固有の意味を持つものである。さらに空を切り取る都市シルエットにどのように語りかけるか、そう考えるとまさに建築の単体のデザインから都市のデザインにも影響を与える力を持っているといえよう。

梅田スカイビルは空中庭園を抱いた連結超高層という図式で示され、ファサードとしては頂部、中間部、基壇部という三層構成をなしている。基壇部は地表面つまり土、樹木、水あるいは人とのかかわりを考えなければならない。なおかつ全体を流れる力学を表現する素材として石とコンクリート打ち放しが選ばれた。反対に、頂部は空とのかかわりといえる。この頂部をなす空中庭園はアルミパネルによって重層的に構成されている。そのエレメントは雲型屋根であったり、空中テラス、あるいはエレベーター機械室や高架水槽といった設備関連諸室、クレーンゴンドラなどである。これら異種要素の同時存在が複雑な光の反射を引き起こし、中間部の均質空間との対比の中で、空に浮かんだように見えることを狙っている。

また屋上部の一般開放された空中回廊からは、空中庭園の抜けた穴まわりのすり鉢型のクレーターカーテンウォールが覗き込め、その際ちょうど自分自身と空が映るよう角度が調整されている。空中庭園では都会の中の173mの風に吹かれながら、景色を楽しむと同時に『空』を眺めてもらおう、という狙いである。それは空に向いて開いた構造であり、空を意識して設計されたものである。

スカイラインのデザインとはまさに空とどのような会話を交わすか、と言い換えることができよう。その言語が何語であろうと、あるいは会話に加わる人数がどうであろうと、その会話が明確で声が大きいほど、都市のデザインとして意味を持ってくる。

世界の美しい集落もあるいはニューヨークのマンハッタンも、この会話がすぐれて得手な街であるといえる。

「空中庭園にどうして穴があいているのか」そんな素朴な質問に対して、原広司は次のように物語る。「あの空いた穴は実は宇宙船が飛び立った抜け跡なんだ。その宇宙船こそまさに空中庭園であり、いつの日か舞い戻ってくるよ。」

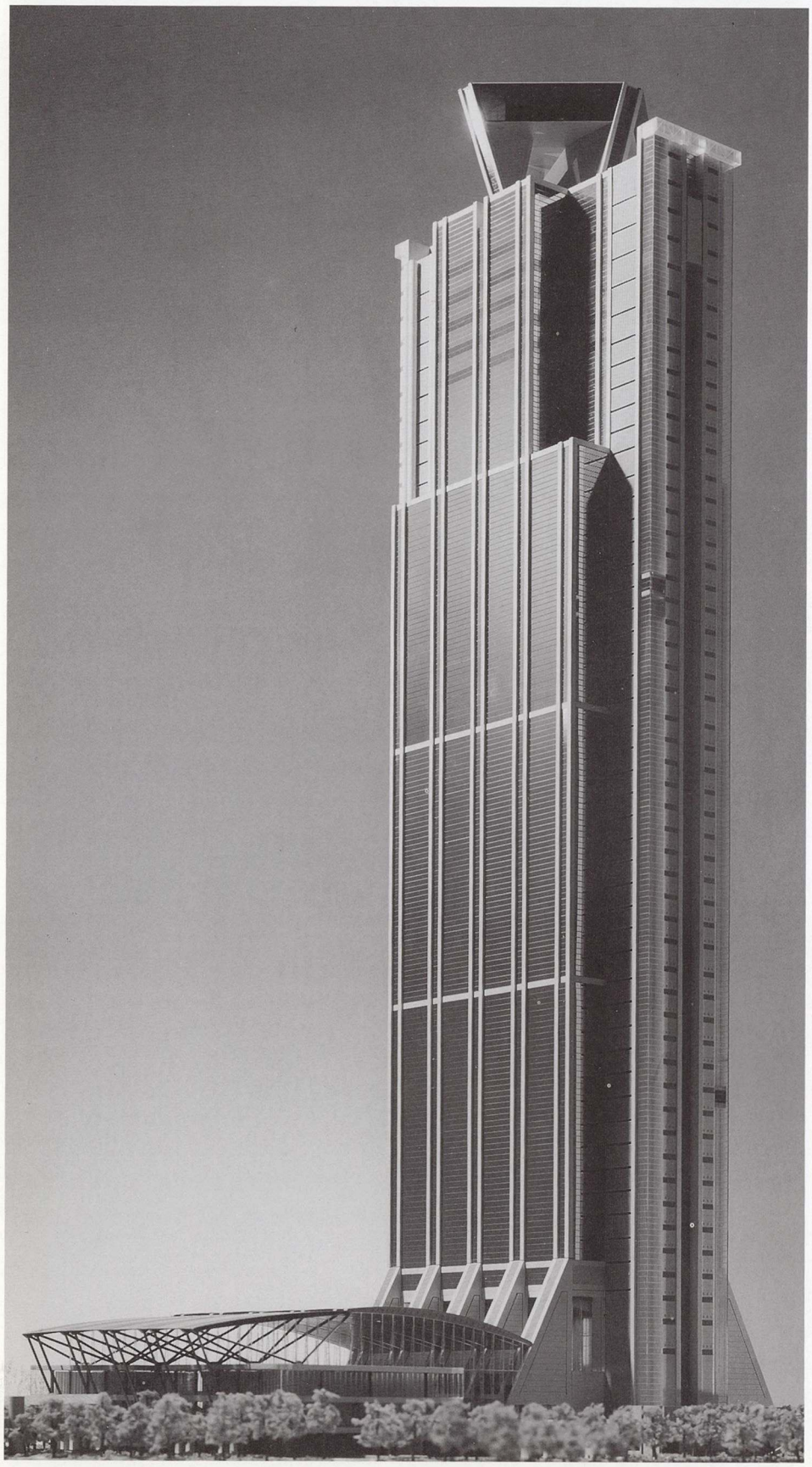
空中庭園が大阪の空とどのような会話を交わしているか、そっと耳を傾けて欲しい。抜けるような青空、黄金色に染まる夕焼け空、それぞれでその話は異なっているに違いないであろう。

（なかたに　しゅんじ　アトリエ・ファイ建築研究所）

大阪ワールドトレードセンター

逆四角錐のシルエットで機能を視覚化

寺本敏則



大阪ベイエリア開発の中心、先導的役割を担うのが、大阪南港160haのエリアを持つコスモスクエアである。ここには、すでにインテックス大阪、ミズノ本社ビル、ライカ本社ビルなどが完成しており、今後、アジア太平洋トレードセンター（ATC）、ホテルハイアットリージェンシーが94年中にもオープンすることになる。その新都心コスモスクエアの中核となるのが、西日本一の高さ約252mの大阪ワールドトレードセンタービルディング（愛称コスモタワー）である。

コスモタワーは、世界の200都市とWTCネットワーク（本部ニューヨーク）で結ばれる、法人世界貿易センターの拠点として、国際化を目指す大阪の新しい象徴となる。

外観は、空と、その空を青く映し出した反射ガラスのカーテンウォールの中で、構造柱が白く強調され、垂直性を力強く表現している。スカイラインを特徴づけるのは、頂部に逆四角錐にオーバーハングされている展望フロアのシルエットである。この形状は、隣接するミズノ本社ビルの頂部の三角形状に対比して、独特なスカイラインを形成し、この地域にアイデンティティーをもたらすことになる。このシルエットは、見る人に遠方からも展望台であること、ヘリパットを備えた防災上安全なビルであることをサインとして、建築の機能を視覚化している。

外装のカーテンウォールは、梁部を除いて床から天井までを透過性のあるガラスによって構成されている。昼はオフィスゾーンに明るく自然光を取り込むのに対して、夜は光のタワーとして表現される。

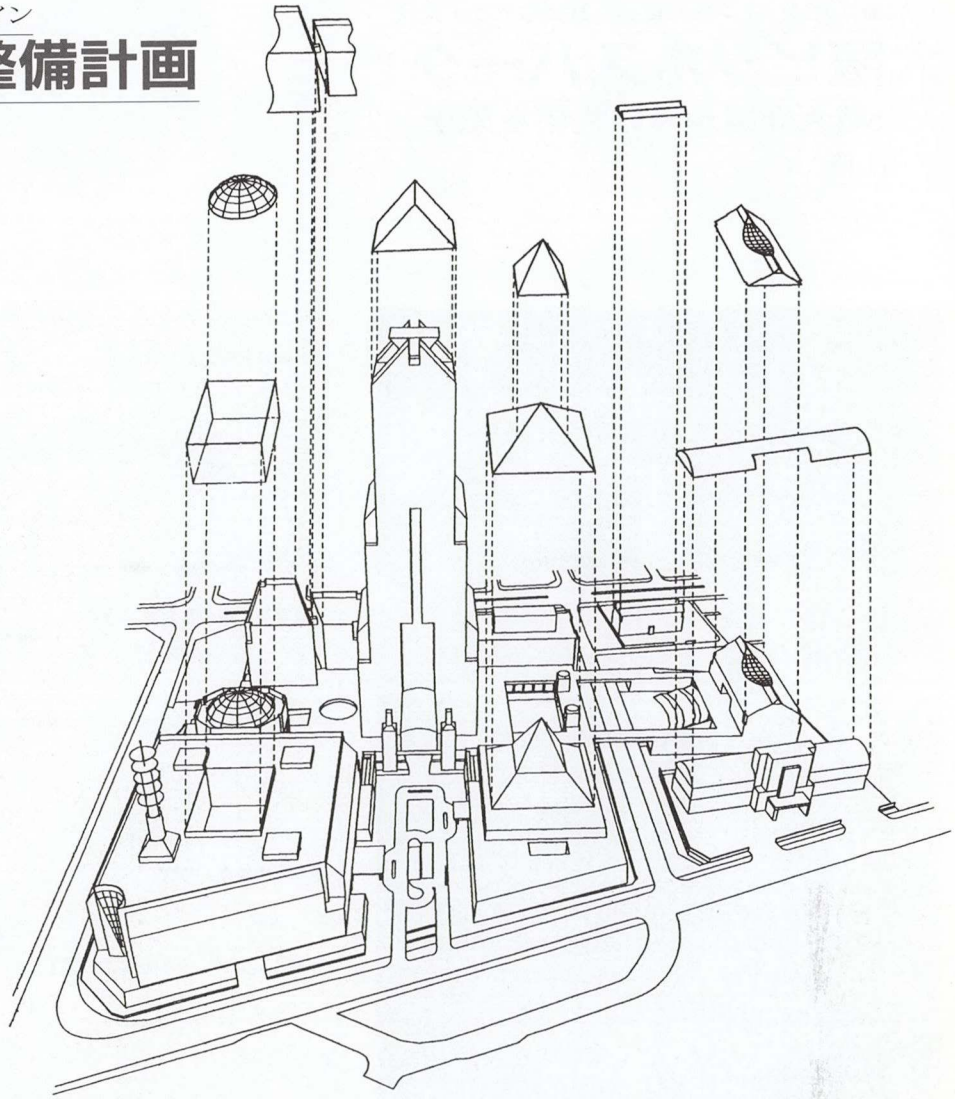
コスモタワーが昼は青く輝き、夜は光溢れる、大阪ベイエリアの新たな燈台として、そのスカイラインが人々に親しまれることを願っている。

（てらもと　としのり　日建設計大阪スタジオ所長）

所在地　大阪市住之江区南港北1—11—1
敷地面積　20,000m²
建築面積　11,000m²
延床面積　150,000m²
構造規模　S. SRC
　　地上55階　地下3階
工　　期　1991年2月～1994年12月（予定）

大阪府庁舎・周辺整備計画

梅林良行



このプロジェクトは、大阪城の西側に隣接する約10haの敷地に、大阪府の行政、議会、警察の施設をはじめ、文化施設、福利厚生施設などを一体的に整備する計画である。

21世紀に向けて、府民サービスの向上と新しい街づくりの観点から、高度な庁舎機能や府民交流、文化創造の場として府民に親しまれる新府庁舎の整備が求められている。

さらに、世界都市として発展する大阪の自治と文化のシンボルとしての建築群を表現し、新しいランドマークを創出するとともに、大阪城およびその周辺地域と調和し、豊かな文化性や創造性あふれる空間構成、建築デザインによる魅力的な都市環境の形成が求められている。

設計にあたっては、歴史と現代の共生、自然と建築の共生、部分と全体の共生などをテーマとする共生の思想に基づいたデザインが行われている。

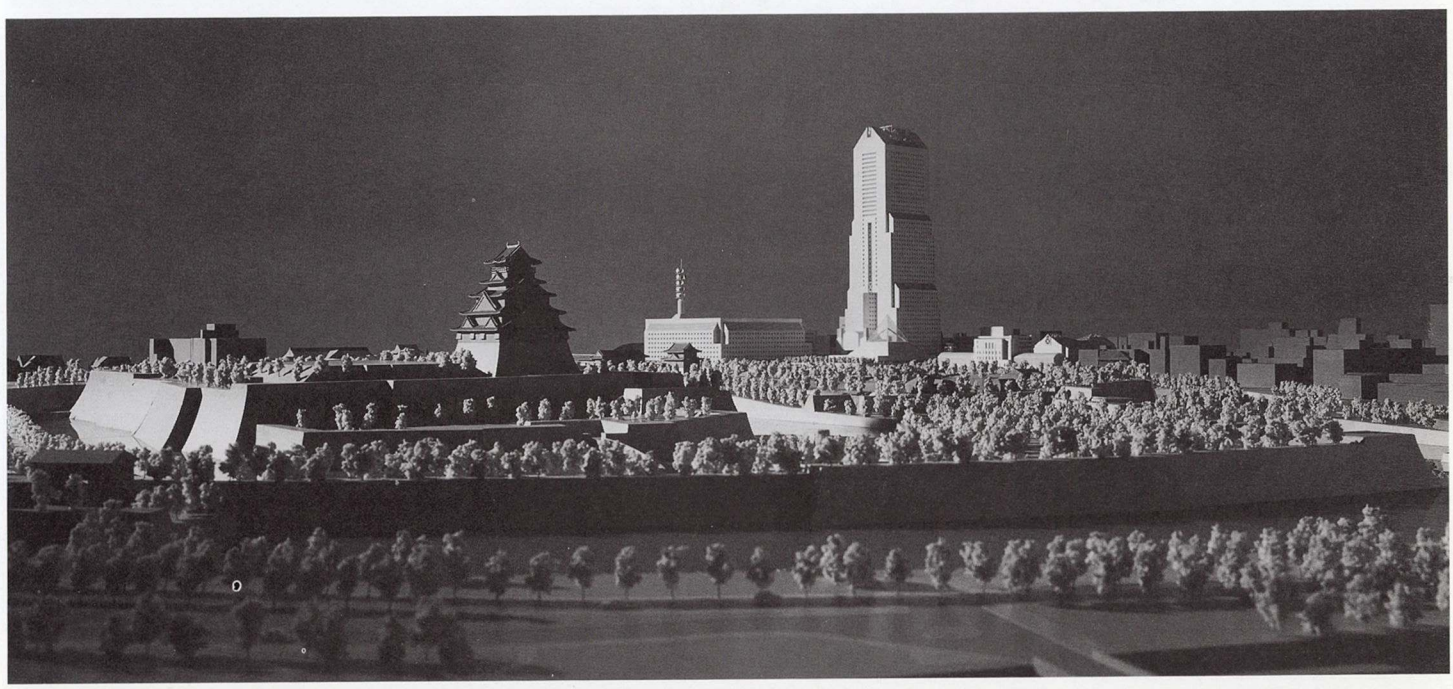
敷地を東西に貫く歴史的都市軸である大手通を全体の建物配置計画の基軸とし、敷地の中央に大阪城天守閣のメタファーとしての三層構成の形をした象徴性の高い超高層建物（行政棟）が配置されている。その他の建物は高さをできるだけ抑え、周辺の街並みのスカイラインとの調和が図られている。

さまざまに異なる機能を持つ建物の屋根は、それぞれ切妻、二重ピラミッド、ドーム、ボールトなど、歴史的伝統の断片的な記号とも言えるおのおの異なった形とし、各建物のアイデンティティーを高めると同時に、スカイラインに快い変化を与える計画としている。

また、大阪城のコンテクストを意識して、敷地全体に広がる緑の人工地盤を設け、その周囲には石垣と堀を巡らせることにより、全体としての一体感と連続性を確保するとともに、水と緑の豊かな環境づくりを図っている。

このプロジェクトが大阪城周辺の官庁街区において、ダイナミックで物語性のある都市環境の形成に寄与することを期待している。

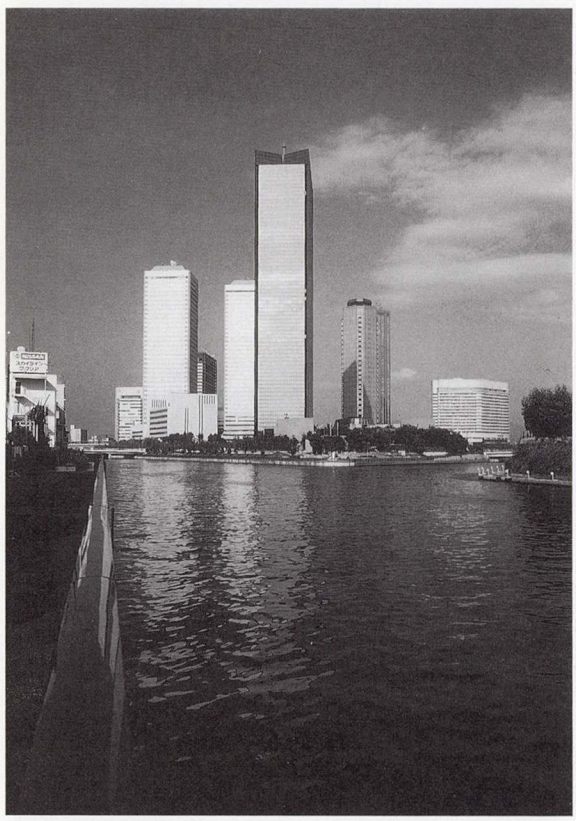
（うめばやし　よしゆき
黒川紀章建築都市設計事務所設計3部部長）



大阪ビジネスパーク

大阪城天守閣からの眺望を配慮

上田隆夫

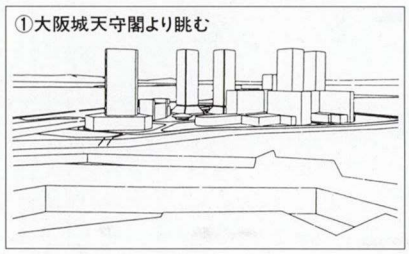


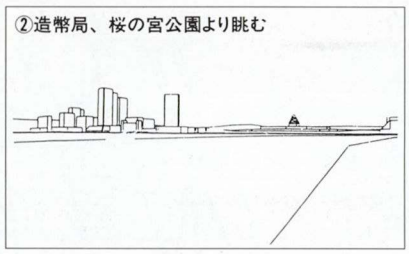
西部よりOBPを望む

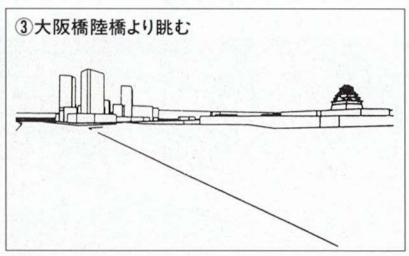


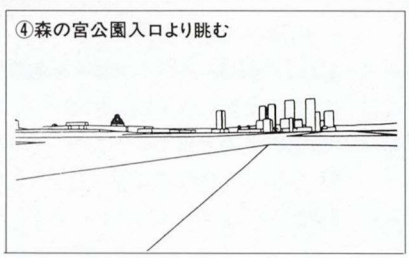
ヴィスタポイント

コンピュータシミュレーションパース

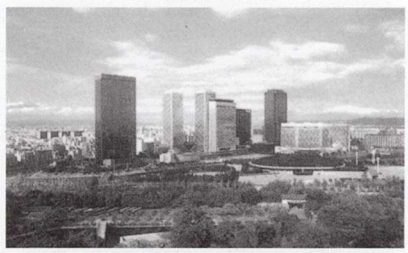




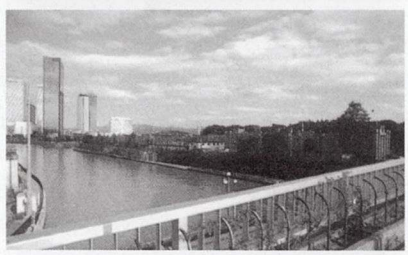


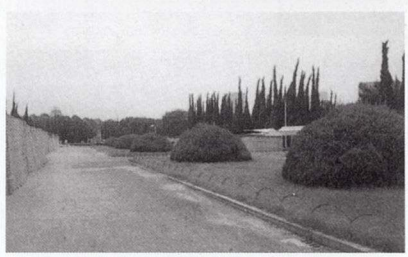


現況写真









1969年「大阪城公園と一体となった公園の中のビジネス街づくり」を開発の理念としたパイロットプラン「OBP計画1969」を発表し、以来20数年間、大阪ビジネスパーク（OBP）の建設を進めてきた。現在では計画の80%にあたる総延床面積76万m²、2万7千人の人々が働く大阪市東部の都市核として、また休日には10万人を超える日もある大阪の新しいアーバンリゾート、あるいはコンベンション・シティとして多くの人々に親しまれる街となっている。さらに、このOBPの開発は、各行政機関のご協力、指導のもとに民間が主体となった開発のモデルとして、多くの人々に認知されている。

このOBPの開発にあたって、OBPの南約500m（最短直線距離）に大阪の歴史的シンボルともなっている大阪城天守閣があり、この天守閣とOBPがおりなす都市景観をどのようにするかは計画当初からの課題であった。このため、当開発協議会は、大阪市と連絡、調整を図りつつ、大阪城天守閣、森之宮、桜之宮公園など、周辺各所からOBPを見たコンピューター・シミュレーションパースや模型等によって慎重にビル計画のあり方を検討した。

その結果、天守閣（OP87.2m）からOBP地区を通して見る眺望がOBPのビル群によって壁とならないこと、また天守閣からの眺望は、地平線（天守閣と生駒山系の屋根を結ぶ地平）以下にビルの高さをおさめると市街地に自然にとけ込むことから、このビルの高さを地平線以下となる低層棟と地平線を超え空間に伸びる高層棟にわけ、これを各ブロックに適宜配置することによって天守閣からの眺望を確保することを基本原則とした。

①大阪城に近接するビルの高さは、おおむね70mラインにする。(ホテルニューオータニ大阪は最高高さ74.5m)

②超高層ビルについては、OBPの地盤高(OP約6m）からみて、天守閣の高さの2倍以下とする軒高150mとし、可能な限り棟間隔をとり、生駒山系の山裾を見せるようにすることとした。(現在のツイン21ほか2棟は、最高高さ157m)

また、大阪城を見る歩行者レベルからの対応として、3ヵ所の視点を選び、大阪城公園、天守閣とOBPの高層ビル群がつくり出すスカイラインが大阪東部の新しい都心をイメージできるデザインとなるよう配慮することとした。各視点からのコンピュータ・シミュレーションパースと現況との比較は、図（㈱日建設計作成）のとおりであるが、おおむね当初計画のねらいに近いものとなっているのではないかと考えている。

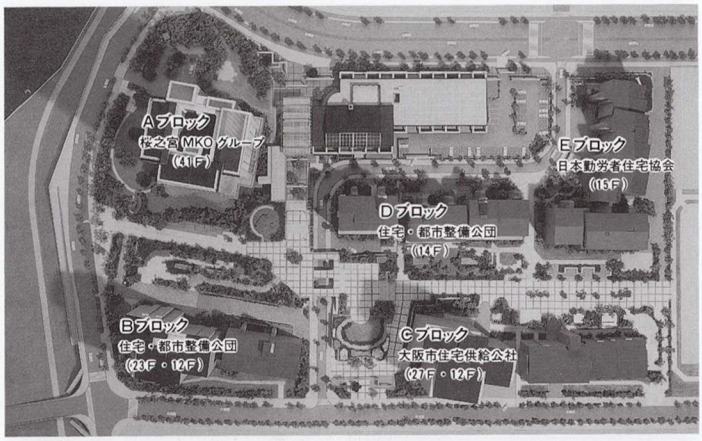
OBPでは、スカイラインの形成にあたって、このような検討と建築協定による若干の調整は行ってきたが、今後、建築群に対しどのように対応するかは都市計画上の課題ではないかと考えている。

（うえだ　たかお　大阪ビジネスパーク開発協議会事務局総局長）

桜宮リバーシティ

個の主張と全体の統一

伊藤武夫



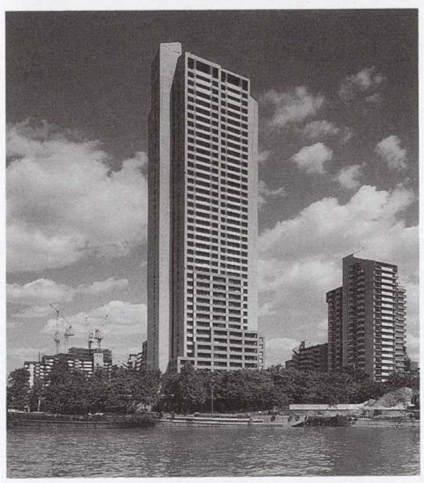
△配置図

施設棟をとりまく群造形（コンペ模型写真）▽





桜宮リバーシティー全景



西側全景

桜宮リバーシティは、大阪の都心を流れる大川のウォーターフロント約4.6haの敷地に、1113戸の都市型住宅と、文化・スポーツ・商業施設を実現する公民共同の街づくりで、1992年に完成した。住宅の建設にあたり、「21世紀に向けて都市居住の魅力を創出する高水準住宅の供給」を図るため、この地区を対象に大阪市HOPE計画の一環として「都市型集合住宅プロジェクト開発設計競技」が、1986年に実施された。最優秀案に選ばれた桜之宮MKOグループ（松下興産・近鉄不動産・大林組）の提案に基づいて、大阪市住宅供給公社、住宅・都市整備公団、日本勤労者住宅協会および民間事業者（桜之宮MKOグループ）が、それぞれの社会的役割に沿って各ブロックの事業化を担当した。

景観構成

このプロジェクトは複数の事業主が参加し、街づくりとしての多様性を内包しながら全体の統一感をつくり出すことが重要なテーマであった。

景観構成については、41階建ウォータータワープラザを核とした3棟の超高層と、高層の住棟の組み合わせによる群造形としての表情の豊かさを表現した。屋根は空と調和する勾配屋根とし、住棟ごとに頂部形状やセットバックにより高さを変え、遠景から近景を意識しつつ街のどの角度から見てもバランスのとれた配置として、変化あるスカイラインを構成した。色彩も関西固有の落ち着いた「じゅらく色」の濃淡で各住棟ごとに変化を持たせるなど、個々の住棟のアイデンティティを強調しつつ街全体のハーモニーを形成した。

隣接する大川・毛馬桜之宮公園との一体化を図り、歴史性・場所性といった都市のコンテクストを重視しつつ、都市のスカイラインの形成に積極的に貢献した。

デザインコントロール

このプロジェクトの特色は、コンペで決定した計画案に基づいて、各事業主が主体的に多様な住宅事業行うことにある。全体の規制が強まると画一的で単調な街づくりとなり、独自性を主張しすぎると雑多でまとまりのない街となる。まさにコンペ時にわれわれのコンセプトとしていた合衆国（個々の主張と全体の統一）の実現に向けて、全体枠組みのルールづくりに関して事業者間で議論が重ねられた。

建物の配置・ヴォリューム・色彩などについては、個性を生かしながら全体の調和するルールが採用され、スカイラインを決定づける屋根は、形状・素材・色彩が統一された。合意されたルールはコンペ主催者である大阪市の関係各局の指導のもとに着実に実現され、ひと・建築・自然が調和し、融合する大阪の新しい街「桜宮リバーシティ」が誕生した。

（いとう　たけお　株式会社大林組建築設計第3部課長）

ORC200
その遠景、中景、近景

北澤修一

建物は遠景、中景、近景と、見る位置で主張するものが異なり、それなりの表現が必要である。ORC200では、副都心開発の起爆剤としてそのランドマーク性が求められ、かつ開発コンセプトの「リゾート・シティ」を構成する施設内容が外観にも現れ、常にアピールするように配慮された。超高層のツインビルと低層建築群、これが開発コンセプトに対する建物構成であった。

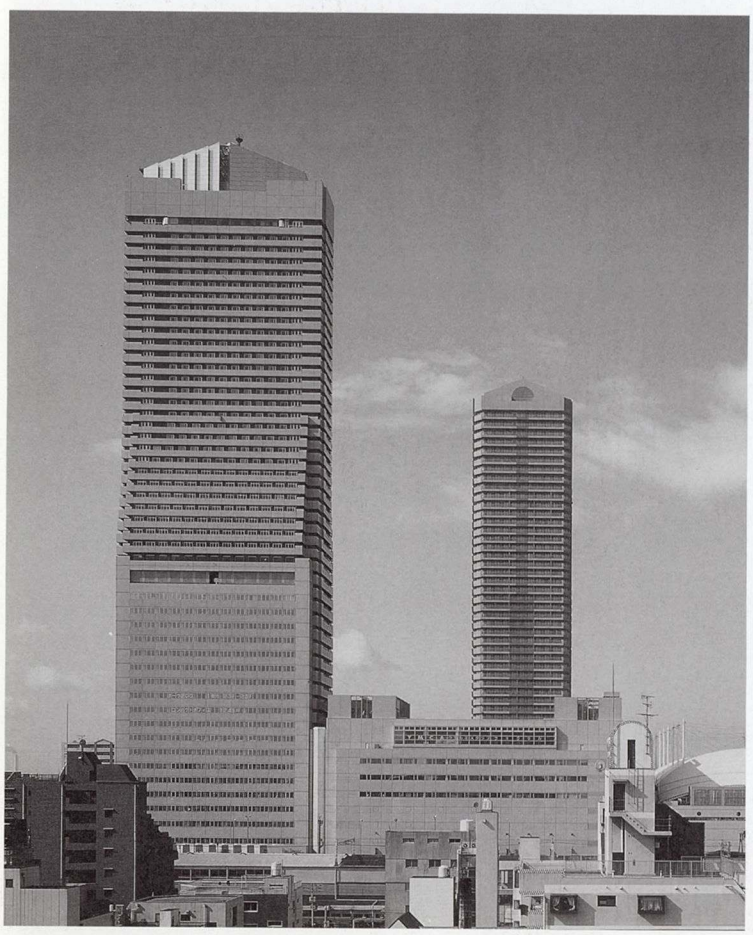
超高層建築はシルエット建築と言われるように、遠景に対してはシルエットで表現される。これを踏まえて、高さの異なる超高層棟を2棟、つまりツインビルとしてアピールした。そしてシルエットラインに斜めの要素を入れることにより、より強い個性を持たせた。屋上は切妻として斜めのヘッドラインを設け、妻側にも中間部で上層部を薄く絞り込むことでウエスト部に斜めのラインを発生させた。一方テクスチュアーの違いにも配慮し、ホテル棟上部切妻にメタルパネルを採用した。これは太陽光の反射により30km程度離れたところからでもORC200を認識することができている。

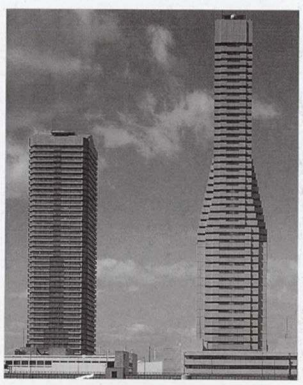
次に中景は既成市街地の建築群の中での位置づけとなり、ツインタワーだけでなく低層棟を含め計画全体が認識される。しかしそこでは、高速道路や他の建物により見え隠れし、その位置により表情が変わる。このような市街地の複雑で雑多なスカイラインの中では特徴のある主張が求められる。低層棟の一つであるパラディッソで試みられた、この帆船をイメージしたテント屋根がつくるスカイラインは、非日常的で、建物がアミューズメント施設であることを十分に主張している。このラインは横に長く続き、ボリューム的にも背景のツインビルに匹敵する効果を担っている。一方、建物の表情が重視されるのも中景である。超高層建築は360度すべてから認識されるものである。住宅棟は四辺ともほぼ同じ条件で同じ見え方であるが、ホテル棟は東西面に窓を設け、南北面は開口の少ない壁で構成されている。用途による階高の違いで高さが異なる、この2棟をツインタワーらしく表現するため、同じモチーフをできるだけ採り入れた。例えば頭部の勾配屋根のほかに四辺にバルコニーを設け、外装タイルの基本色も同じとした。このバルコニーは単調になりがちな広い外壁面に横ラインの深い陰影をつけ、柔らかな表情を出している。またバルコニーの出入りは素直にスカイキャンバスに描かれ、変化があり、かつ連続の軽快さを持つスカイラインを構成している。

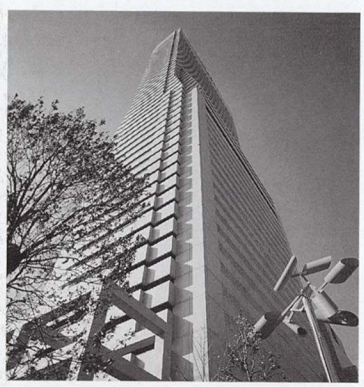
近景において建物はそのボリュームをヒューマンスケールで意識される。超高層のボリュームをいかに処理するかが課題であるが、今回は上層部外壁面をセットバックさせたことが圧迫感を少なくさせている。建物ボリュームはセットバックが始まっている23、24階建のように意識されるが、単に箱状の建物ではなく、なめらかに連続してセットバックしながら空に伸びていく壁面が意識され、上部のドーム等の付属物も視界から消え、中景とはまた別な表情でスカイラインが認識される。

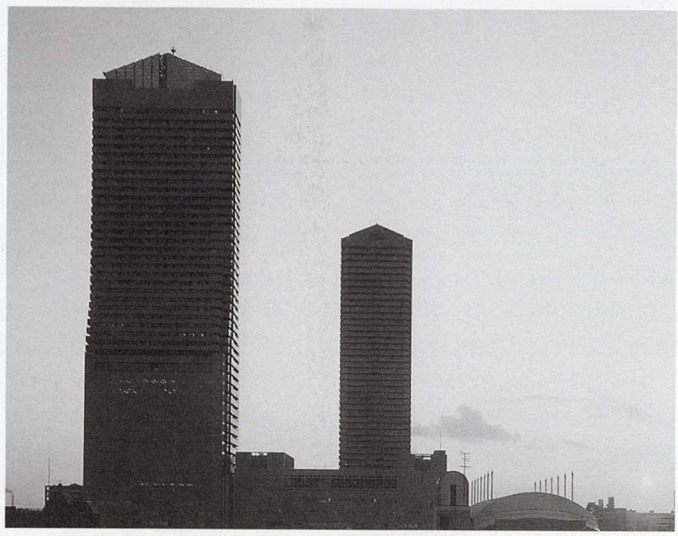
着工後発生した緊急救助用ヘリスペース、下水道局の雨量観測レーダードーム等の設置は、当初のスカイライン計画に大きな影響を与えずに処理できたが、よほどの特殊な仕掛けを施さないと一般に建物のトップデザインはヘリポート（20m×20m）を意識したものとなる。今回は自主設置の施行でもあり、10m角の緊急用ヘリスペース（ホバリング用）の設置となったため勾配屋根を維持することができた。

（きたざわ　しゅういち　株式会社安井建築設計事務所）









六甲アイランドCITY

スカイラインは六甲山脈

山根千鶴子

南側からRICと六甲山を眺める





山の手からRICの向こうに金剛山を見る



住棟のスリットから六甲山を垣間見る

神戸市の民活事業による街づくりとして知られる六甲アイランドは、その位置するところは神戸市全域から見れば東の端の海上になる。これは六甲アイランドの開発にとても大きな意味を持つ。

神戸市は早くから港を開き外国人を受け入れ、その居留地となった海岸通りのオフィス街や山の手の住宅地は魅力ある神戸の代表的な街の一つとして今も健在である。さらに近年は神戸の特徴とする山や海岸の多彩な地形を生かし、近代的でユニークな街づくりを積極的に行ってきた。新旧のみならず神戸市は様々な個性を持つ街の集まりであり、新たに加わる六甲アイランドはそのどこに同化するかが街づくりの最初の課題であった。

六甲アイランドはそのロケーションから見れば明らかに“阪神間”となる。阪神間は外部からは単に大阪と神戸の間の地域に過ぎないが、住環境のイメージで話題に上るときは（その方が多いが）もっと範囲が限定される。すなわち、北は六甲山を背に感じ、南は瀬戸内海を視界に収め得る領域である。

この阪神間は六甲山から南に向かってなだらかに傾斜した申し分のない地形で、この山の手の住環境は複数の都市（神戸、芦屋、西宮）に跨がりながら共通のイメージを持った一つの地域として表現されることが多い。

六甲アイランドはこの阪神間のほぼ中央の神戸市東灘区の海上を埋め立てて造られた全く平な土地で、後背地の山の手に比べて斜面地などは望むべくもないが、ここから眺める六甲山の全景は、ほどよい距離で素晴らしい。

阪神間の“山の手”の想いを込めて、六甲アイランドの街づくりの基本テーマ『海の手・六甲』＝六甲アイランドCITY（以降RIC）が誕生した。そのシンボルは六甲山であり、RICのスカイラインの原点は六甲山脈である。

遠景としては、街のシルエットとしてのスカイライン。山の手から眼下に広がるRICを眺めると、晴れた日は海を越えてその向こうにはるか金剛山や和歌山の山並みも映し出される。海側から北を仰げばRICのスカイラインの背景に六甲山脈が横たう。

近景としては、各住棟のスカイライン。地上の通りから、街角広場から、公園から、または2階レベルのシティモールから仰ぎ見る空のボトムラインは大きなギザギザとなる。

街を歩くと住棟間のスリットからも六甲山が見え隠れする。六甲山を毎日身近に感じること、これが阪神間の住まいである。

阪神間の山の手に自然にできる建物や屋根の起伏をRICでは意識的につくってきたが、阪神間の“海の手”の新たな住民たちにどこまで感じ取っていただけるであろうか。

（やまね　ちづこ
積水ハウス株式会社取締役技術副本部長）

フラクタルなスカイライン

奥　俊信

はじめに　ある先端技術が開発され、それが最新技術として話題になっている間は、その技術の社会への影響度はまだ浅いと言える。その技術が本当に私たちの生活に浸透したと言えるのは、技術の存在に気を留めなくなったときである。かつて、モーターがそうであった。扇風機、冷蔵庫からヒゲそり機にいたるまで、私たちの生活必需品のあらゆる器機にモーターは使われている。そうでありながら、わざわざモーター付きなどと宣伝されるわけではないし、私たちも気に留めない。それほどモーターはありふれた物になっているし、同時になくてはならない部品でもあるわけだ。

今日の先端技術の中で、将来のモーターになるのはコンピュータと言える。もうすでに私たちの生活のかなりの分野に人知れず入り込んでいる。ニューロ、ファジィといった最新のシステムはまだ商品の宣伝項目になっているが、普通のマイクロ・コンピュータ内蔵の器機は、ことさらコンピュータ付きであるなどと言わなくなった。コンピュータの進歩と普及により、これまで不可能であった大量のデータ処理や何万回という演算が瞬時に計算できるようになった。

前置きが長くなったが、コンピュータを利用することによって、建築や都市計画の分野においても、これまでデータが大量すぎたり、演算回数が多すぎたりするため、あきらめられていた様々な処理が出来るようになった。CADやCGは随分普及してきている。本文は、コンピュータの出現によって可能となったフラクタル理論を用いて、スカイラインの複雑さについて考えてみることにする。

あいまいな境界

コンピュータの出現によって、都市景観を構成している複雑な形態や多種類の色彩が扱えるようになった。特に、コンピュータは単純な操作を素早く何回も繰り返すのが得意である。**図1**は「シェルピンスキーのやじり」と呼ばれる図形で、全体の形は三角形のようであるが、各辺の線は随分入り組んでいる。また**図2**は「メンガーのスポンジ」と呼ばれる立体図形であるが、大小の穴がいたる所にあいている。この二つの図形はとても複雑で、手で画くのは困難である。しかし規則正しい繰り返しの法則で作図されているので、コンピュータには得意である。

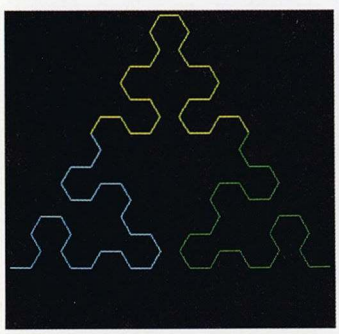


図1　シェルピンスキーのやじり

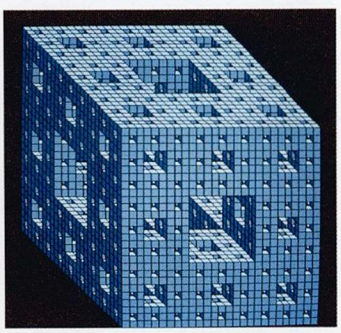


図2　メンガーのスポンジ

これらの図形に共通した特徴として、先ほどの規則性のほかに表面の複雑さがある。全体は三角形と立方体の形で単純な図形に見えるが、その輪郭をたどると非常に入り組んでいる。ここに示した図形は、まだ作図の途中で止めた形である。同じ操作を無限に続けると、図1の輪郭線の長さは無限大になり、図2の表面積は無限大になる。そして、図形の内部と外部の境が非常に複雑になって、内部か外部かわからなくなる。図形の境界があいまいになるわけである。境界があいまいになると言っても、境界面が複雑になるだけで、境の線や面ははっきりしている。実は、境界のあいまいさには2種類ある。一つは、先ほどの例のように、境界線自体ははっきり明確であるが、表面が複雑に入り組むため、あいまいになる場合である。もう一つは、雲の輪郭や霧がかかった風景のように、物の輪郭自体がぼやける場合である。都市のスカイラインで言えば、空気の澄んだ晴れた日のスカイラインと霞がかかった日のスカイラインの違いである。ここでは、輪郭が明確な場合のスカイラインについて述べることにする。

スカイラインのフラクタル

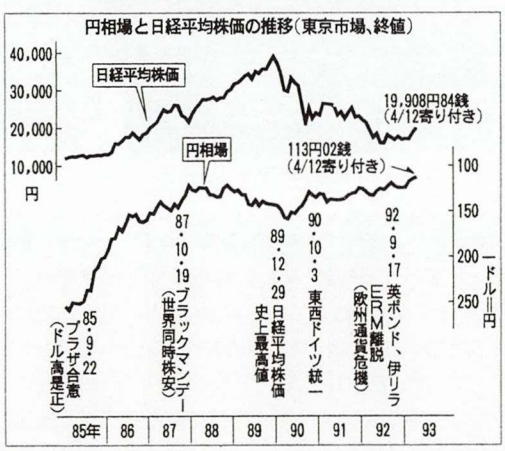
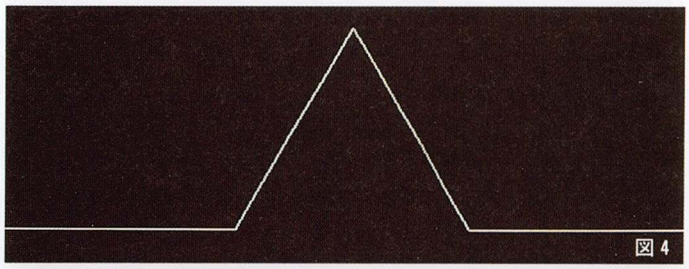
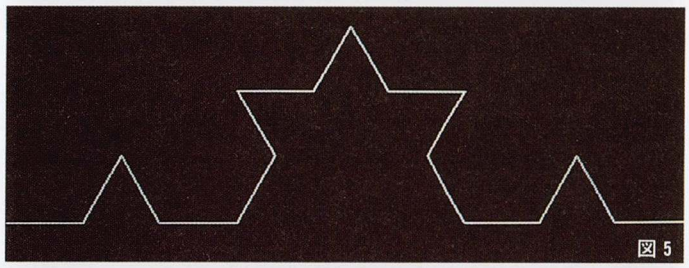


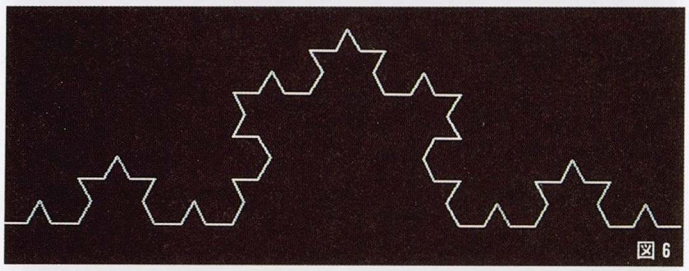
図3　株のスカイライン（日本経済新聞　1993年4月12日より転載）

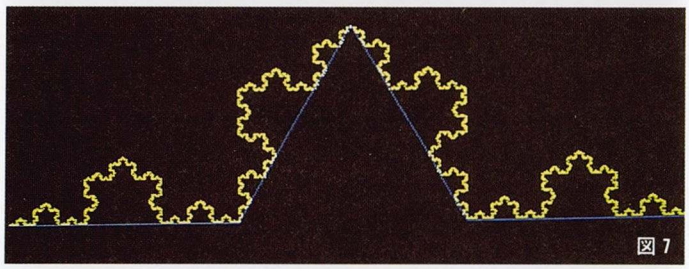
スカイラインというのは、山や建物など地表の事物と空との境界線のことであるが、その形態の類似性から、株価の変動グラフもスカイラインと呼ばれる（**図3**）。変動の傾向に一定の法則がないので、将来の株価を当てることは出来ない。つまり、ランダムなブラウン運動をしているわけである。自然地形の山脈なども同様で、ランダムな形態をしている。

では都市を遠望したときのスカイラインはどうであろうか。東京や大阪など大都市のスカイラインは雑然としてランダムに見える。しかし、よく眺めると、そこには超高層が集まっている部分や、お


図 4


図 5


図 6


図 7

コッホ曲線

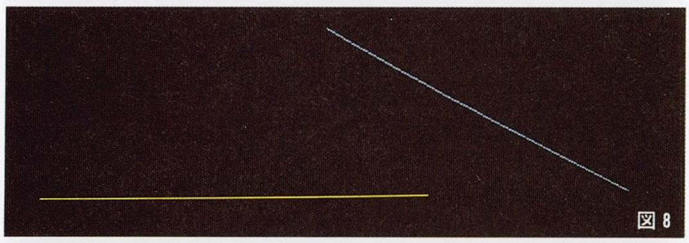

図 8


図 9

樹枝形のフラクタル図形

城やテレビ塔など特異な形態をした部分などがあり、全くランダムというわけではなさそうである。都市はランダムに形成されているわけではないからである。しかし、ここではスカイラインを構成している意味性は考えず、幾何学的な複雑さについてのみ考えることにする。

株価や地形の変化も、将来その形成のメカニズムが明らかになれば、ランダムに見えていた中にも必然性が見いだされるかも知れない。

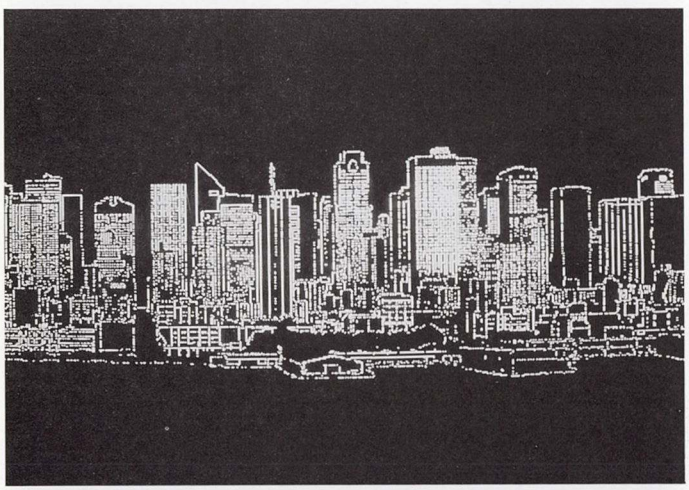
一言で、複雑さと言っても、複雑さにも程度がある。ではどのようにして複雑度を求めればよいのであろうか。それには、いろいろな測り方が考えられる。例えば、スカイラインの頂点の数や線分の数を数えていく方法がある。それらの数が多いほど複雑というわけである。また、スカイラインの凹凸の大きさを測っていくという方法もある。凹凸の程度が大きいほど複雑と言える。しかしここでは、フラクタル次元という測り方でスカイラインの複雑度を測ることにする。

フラクタルという言葉を耳にされた方も多いと思う。コンピュータ・グラフィックなどでよく紹介されているからである。図4～7は、コッホ曲線と呼ばれる典型的なフラクタル図形について、作図の順を示したものである。**図4**は山形図形が一つである。**図5**では、縮小された山形図形4個で一つの大きな山形を構成している。**図6**では、さらに縮小された山形図形16個で一つの大きな山形を構成している。**図7**は、この手続きをさらに繰り返した図形である。このように、フラクタル図形というのは同じ形が縮尺を変えて、入れ子になっている形のことである。この性質を自己相似性という。図9もフラクタル図形である。**図8**の形態が、順次縮小されて**図9**が出来ている。この図形は木の枝にそっくりである。

このように、自己相似性という性質は自然現象によく見られる。例えば、川の本流と支流の形態や海岸線などにも自己相似性がある。都市形態関係にも自己相似性の見られるものがある。道路パターンがそうである。国土レベルで見れば高速道路や国道が国中を網の目のように覆っている。次にスケールを一段下げて、地域レベルで見ると地方道が地域を網の目のように覆っている。そして、さらにスケールを下げて、市レベルで見ても一般道路が網の目のように覆っている。このように、国土レベル、地方レベル、地区レベルとスケールが小さくなっても、常に網の目状の道路パターンが現れる。また、土地利用にも自己相似性が見られる。まず地域レベルで見ると住居地域、商業業務地域、工業地域、自然緑地などに大きく分かれる。次にこの住居地域の部分だけを取り出して、スケールを少し下げて見ると、そこには住居利用だけでなく、商業業務利用、工業的

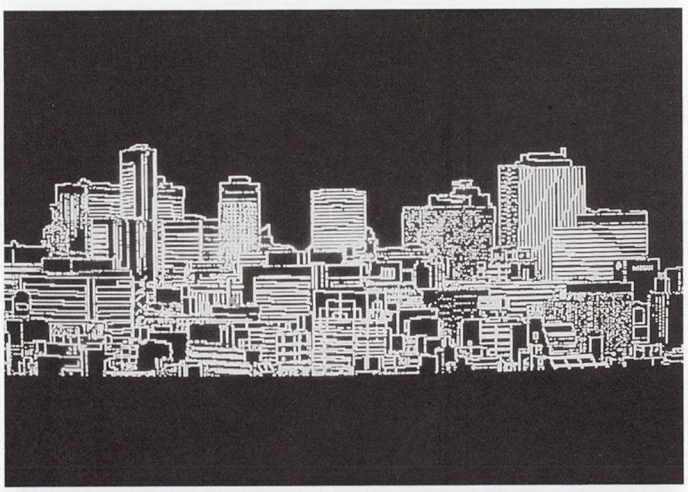
ニューヨーク
図10

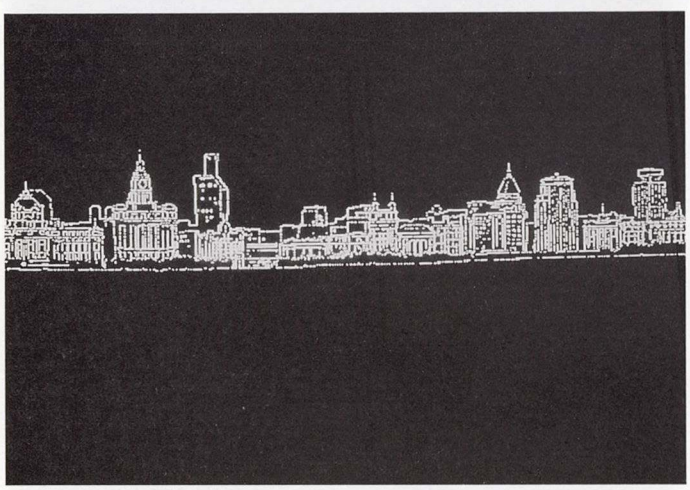
20世紀を代表する都市と言えばニューヨークであろう。これはイーストリバーから眺めたマンハッタンの姿である。写真をスキャナーで取り込み、画像処理によって輪郭線を抽出している。シティコープの傾斜屋根とクライスラービルの頂部が見えている。ニューヨークの遠景と言えば、かつてこのアングルと自由の女神の方から見たマンハッタンの先端を望むものが主であったが、最近ではバッテリーパークを見るハドソン川からのものも多くなった。フラクタル次元は1.29であり、ここで取り上げた都市の中で最も複雑なスカイラインである。



大阪
図12

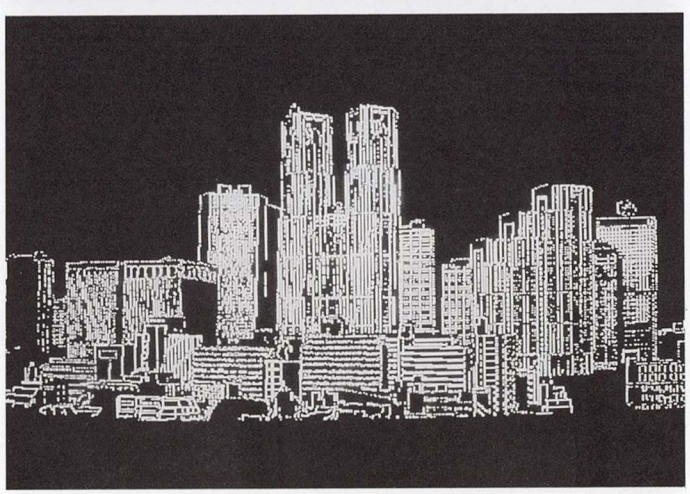
梅田地区を南の方から眺めた景観である。中心より少し左寄りにあるのがマルビルであるが、立面図的に画かれているので円筒形に見えない。梅田スカイシティが画面に入っていないので、いま一つ特徴性に欠けている。高層以下の建物で建て込んでいるが、超高層は多くないため、フラクタル次元は1.13にとどまり、ニューヨークほども複雑でない。





上海
図11

上海の中心部である外灘（かつての上海租界）の遠景である。この地区には1920年代から1930年代にかけて建てられたアールデコの建築が多く残っており、セットバックしていく頂部が都市の景観を特徴づけている。フラクタル次元は1.29で、ニューヨークの次元と同じである。スカイラインの複雑度ではニューヨークと上海は同じということである。この二つの都市は摩天楼都市への同じ根を持っていることを示している。



東京
図13

新宿副都心を西側から見た景観である。中央にそびえているのが都庁舎である。都庁が目立ち、他の超高層ビルが退いて写っているためか、フラクタル次元は1.12であり、高くない。スカイラインは複雑ではないが、建物のファサードのデザインはきめが細かくて複雑である。ファサードの窓割なども含めた建物全体のフラクタル次元を測ると、1.76であった。かなり複雑であると言える。

利用、そして緑地などに利用されている所がある。このように土地利用も入れ子になっている部分がある。

それでは自己相似性であればフラクタルかと言えば、そうではない。例えば、一本の直線や正方形に区切られたグリッドなども自己相似性だからである。フラクタルであるには自己相似性のほかにフラクタル次元という特徴が必要である。フラクタル次元というのは1.2次元とか1.4次元とかいった非整数の次元のことである。普通一般に言われる次元の種類は、点の0次元、線の1次元、面の2次元、そして立体の3次元である。つまり、空間を構成するのはこの4種類の次元である。建築の場合、さらに時間軸を加えて、4次元的存在であるなどと言われる。つまり次元は整数であって、1次元と2次元の間の1.3次元などというのは普通使わない。

では、1次元と2次元の間の次元というのはどういうものなのだろうか、想像してみよう。1次元は線であり、2次元は面であるのだから、線と面の中間の形態と言える。線に近い形ほど1次元に近く、面に近い形ほど2次元に近いのである。つまり、1本のまっすぐな線を1次元の状態として、それを左右に波のようにくねらせていくとする。最初はうねりの小さいゆったりした波であるが、段々とうねりを大きくし、波長も細かくしていくと、やがて最後に平面全部を波で覆い尽くしてしまい2次元になる。このように1次元から2次元にいたるまでが1次元と2次元の間の次元を持つ形態である。次元が2に近づくほど複雑な波と言える。

スカイラインを波形と見なせば、このようにして、形態の複雑度をフラクタル次元で示すことができる。例えば、先ほど挙げた図7のコッホ曲線のフラクタル次元は1.26であり、図9の樹枝は1.46である。コッホ曲線よりも樹枝図形の方が平面をより埋めていくということであり、2次元に近い形態なのである。

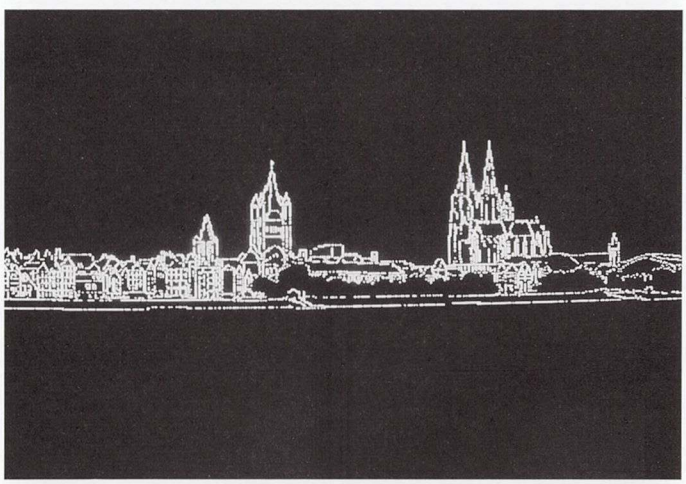
次にいくつかの特徴的な都市を取り上げ、そのスカイラインのフラクタル次元を測ってみよう。

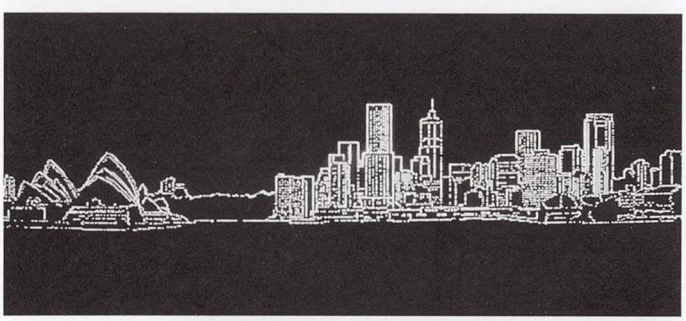
図10～16に、スカイラインの複雑度をフラクタル次元という物差しで測ってみた。複雑度の高い順に都市を並べると、①ニューヨーク、上海、②シドニー、③ケルン、④大阪、⑤東京の順である。見た目の複雑度に一致しているであろうか、一致していると思われた方もおられるだろうし、そう感じられなかった方もいるはずである。フラクタル次元は幾何学的な複雑度を測る一つの物差しであるが、複雑さという感覚は単に幾何学的なことだけに関係したことではないからだ。

それでは次に、景観の美しさや心地よさと複雑度とにどういう関係があるのだろうか。美しく見えるスカイラインの複雑度はどれぐらいか、心地よく感じるフラクタル次元の数値はどれぐらいなのだ

ケルン
図14

ゴシック様式の大聖堂が周囲の建物群を制してそびえ建ち、都市の強いアイデンティティを形成している。何がその都市にとって重要な建物であるのか、誰の眼にも明らかである。フラクタル次元は1.16であり、複雑度は中位であるが、個性のあるスカイラインである。





シドニー
図15

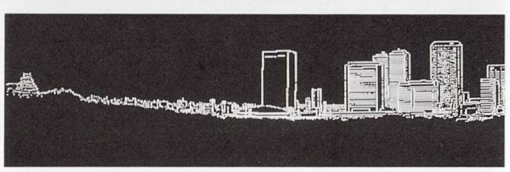


図16
大阪城とOBP地区

シンボリックな現代建築によって、都市の特徴を形成している例である。図の左に見えるオペラハウスがそれである。フラクタル次元は1.17であり、先ほどのケルンとほぼ同じで、中位の複雑度である。右側に見える超高層建物群は、今では大都市のどこにでも見られる景観で、特別に特徴があるわけではない。しかし、オペラハウスの三角屋根と向かい合うことで対比的な構成となっている。この構図は大阪の、大阪城とOBP地区の超高層群との対比的な関係と似ている（**図16**）。

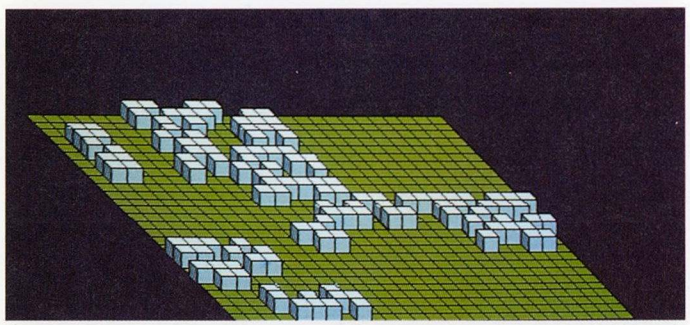


図17　フラクタル次元1.46

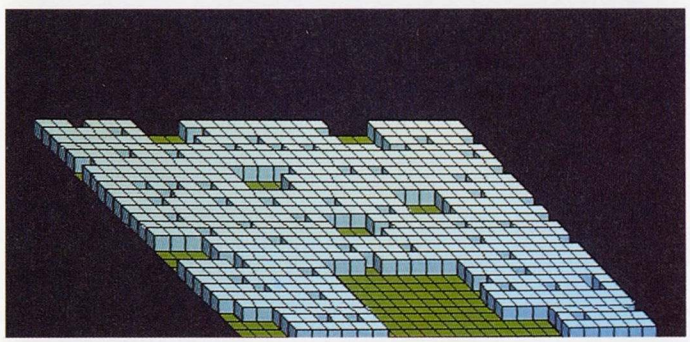


図18　フラクタル次元1.89

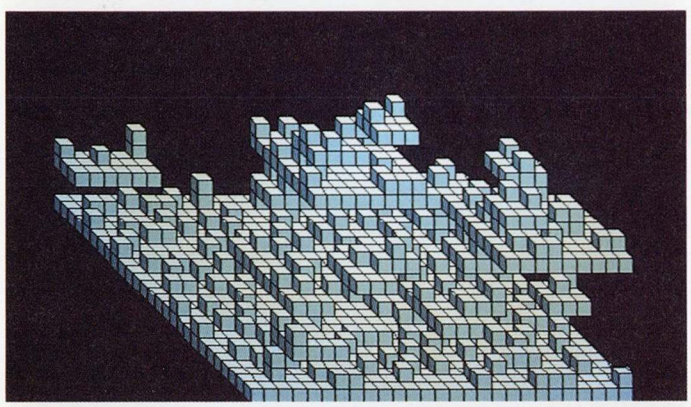


図19　フラクタル次元2.18

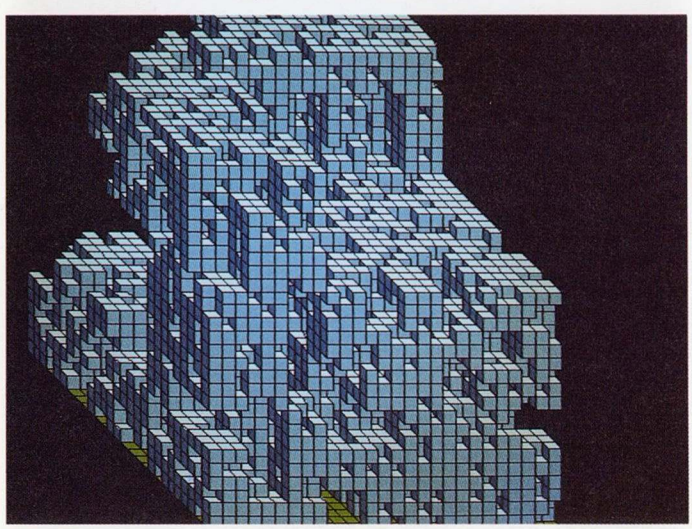


図20　フラクタル次元2.73

ろうか。それがわかれば、美しく心地よいスカイラインが形成できる。直感的には、単純すぎても複雑すぎても悪く、その中間位のどこかに適切な複雑度がありそうである。スカイラインのパワースペクトルが1/fの分布をするとき最も快適であるという報告がある。この1/fのゆらぎというのは、人間の脈拍や自然の心地よい風などに見られる変動パターンでもある。1/fをフラクタル次元に直すと2.0であるが、2.0次元というのは平面を線で埋め尽くすということだから、複雑すぎるように思える。別の報告であるが、1/fのゆらぎの音を聞くとランダム・ノイズよりも不快であったという結果もある。美しさとか心地よさとかは、単に複雑度だけに関係することではないから、単純な相関関係はないものと考えた方がよさそうだ。

フラクタルの都市

スカイラインは線であるが、都市は立体である。立体的なフラクタル図形によって、都市形態のモデルが作れないだろうか。

そこで図2をもう一度見て欲しい。これは立体のフラクタル図形になっている。また、フラクタル図形というのは、自己相似の形が入れ子になっている形態のことであった。このフラクタルの原理を基本にしながら、ランダムな変動要因を入れてシミュレーションしたのが、図17から図20の都市形態のモデルである。

図17はフラクタル次元が1.46の場合の都市パターンである。建物ユニットが隣との適当な間隔をとりながら連続していく様は、伝統的集落のパターンに類似している。**図18**は、1.89次元のパターンである。2次元に近いので、地表面のかなりの部分を建物が覆っている。中庭を効果的にとることによって、少ないオープンスペースを有効に使っていると言える。中近東地方の集落パターンである。**図19**は2.18次元である。2次元を超えると平屋ではおさまらない。積層化していくことになる。しかし、外気との接触面はまだ多くあり、建物ユニットが空中に浮遊しているような感じである。そして**図20**は2.73次元の場合である。ユニットが立体的に建てづまってきている。空洞があるが、全体として一つの建物のようになってきている。

おわりに　以上の例のように、フラクタル理論によって、1次元から3次元までの連続する次元を用いて、スカイラインの複雑度を測ったり、様々な都市集合パターンを作ることができる。しかし、それはまだ形態上のことだけであって、形態を成り立たせているメカニズムの特徴については何もわかっていない。コンピュータはプログラム通りの計算はしてくれるが、それ以上のことは何も教えてくれないからだ。

（おく　としのぶ　大阪大学工学部建築工学科助教授）

橋と景観のシルエット

川崎雅史

シルエットを考える

これまで、橋梁やダムなどに代表される土木構造物は、その卓越したスケールと飽くなきまでに追求した機能が形となって、都市景観の中でその独自性を保ってきたと思われる。それは、数多くの厳しい批判の中にも立たされる対象でもある。しかし、一方、ヒューマンスケールを越えた存在であるがゆえに、自然環境との対峙や、非日常的な場所をダイナミックに演出することの可能性を持った存在であることは、マイヤールや近年のカラトラバの作品等によって、顕著に証明されているように思われる。

このような土木構造物をデザインするためには、合理的な機能に裏打ちされた構造美を洗練することも重要であるが、一方でその設置場所の景観的な特性に応じた構造物の形式を選定配置することも一層重要な課題である。これは、周囲景観と構造物の積極的な関係をデザインで演出し、橋や景観の美しさをより効果的に引き立たせることを意味しており、土木構造物の景観設計の基本的な理念であると考えられる。

そこで、本稿は橋と架橋景観のシルエットを手掛かりにして、橋と景観との積極的な演出関係を構図的な側面から把握し、形に根ざしたデザインテーマを作成するための考察として位置づけたい。

シルエットは、細かな部材と部材との境界線がほとんど見えなくなり、構造体の骨格のフレームを示す基本的な外形輪郭が明瞭に映し出された姿である。それは、質感や色彩を消失させるが、街や構造物の大きなまとまりを視覚的にわかりやすく表現するモデルである。このようなシルエットを観察することで、マクロな視点からの景観の形を検討することが可能であると思われる。そして、構造物と周囲景観の実際の位置関係としてのつながりを持つことが困難な場合であっても、借景のような構造表現としての新たな演出の関係性を考えることもできよう。

これは、橋梁形式の選定やデザインテーマを誘導し、プロムナードや公園などの美しいシルエットを見るための新しい視点場の発見や配置計画の一つの指針になれば幸いである。

山並みと橋のシルエットの演出

はじめに、自然景観の中にあって、山並みや丘陵地などの起伏のある地形を背景とした場合の橋のシルエットのデザインについて、その演出のあり方を考察したい。一般に、山並みのシルエットが連続して描く基本的な外形の輪郭線は、不規則で有機的な形をした線であり、なだらかや急峻といった違いはあっても、空の上方に凸の形のスカイラインをつくる。そして、この輪郭は、われわれの視線



図1　ステージ〈Stage〉（奈良県川上村）



図2
つなぎ〈Joint〉
（オーストリア）



図3　対比〈Contrast〉（オーストリア）

を自然に上方に誘導する。さらに、山肌には、肌理細かな陰影のグラデュエーションができ、質感にも変化や動きを感じさせる。このようなシルエットは、人工構造物とは比較にならないほどの強い視線の誘導や視覚的なゲシュタルトを感じさせる。そして、これを背景にした場合の橋のシルエットを演出する際には、自然地形のシルエットを阻害せず、できるだけ生かすこと、また、山並みが視線の誘導をする上方とは、逆の下方への視線の誘導を起こすようなシルエットを持つ橋梁形式を選定して、構図のバランスを図ることが、基本的な要件として考えられよう。

次に、橋と架橋景観とのシルエットを演出する具体的なテーマを考えてみたい。

①「山並みのステージをつくる（Stage)」

まず、橋のシルエットが山並みのシルエットをのせるステージをつくることを考えてみたい。このステージ（舞台）という意味は、**図1**のように、橋桁で描かれるシンプルな平行線がシルエットとして明瞭に現れ、構図的に山と橋の二つのシルエットが重なって、山並みのシルエットがあたかもステージの上にのせられているかのようなシルエットが形成されることを想定している。時折、絵はがきなどに紹介されている橋の美しい構図の一つである。この場合、山並みの全景が映されるように、橋桁の位置が構図上比較的低い所に現れることが望ましい。

さらに、橋の形式として斜張橋や吊橋など上部構造の立ち上がりの高い橋は、山並みと重なってけんかしやすくなり、また、山並みのスケールや質感に比べて、橋のケーブル線が描くシルエットは線の力が弱く、面としてのまとまりが弱いものとして映りやすい。この場合、一般に部材の輪郭が骨太で密な上路アーチ橋やキャンバー（反り）を持った桁橋（図1）は、上部桁の水平線が自然の有機的な線とは対照的に明瞭なステージラインを描き、下部の曲線があたかも地形を押さえつけたような力を表現する。これは山並みの誘導とは逆方向に視線を誘導して、バランスした安定感を感じさせる。

②「山並みのつなぎをつくる（Joint)」

次に、橋のシルエットが、山と山の谷間につなぎをつくることを考える。これは、鉄道橋に代表されるような典型的な自然景観の中の橋のイメージを率直にシルエットの演出のテーマとして表現したものである。

山と山の谷間のシルエットは、スケールの大きな斜線で描かれたV字型となり、このように架かる橋は橋本来の機能である「渡す」ことを率直に表現するものであろう。そして地形と地形のすきまを輪郭線がつなぎ、景観に新たなまとまりをつくり出すきっかけを与えるものと思われる。このような場合、これらの地形をしっかりと



図4　写し〈Copy〉（奈良県大滝村）



図5　斜張橋のスカイライン（大阪港・かもめ大橋）



図6　吊橋のスカイライン（ロンドン・タワーブリッジ）



図7　アーチ橋のスカイライン（大阪市・飛翔橋）

押さえ込むような構造形式を持つアーチ橋やラーメン橋の選定が考えられる。上路アーチ橋は、下方への力を視覚的に予測させ、地形を押さえ込むのを表現するのにシンプルな形式である（**図2**）

③「山並みとの対比をつくる（Contrast)」

山並みと対比的な橋のシルエットをつくることは、従来から対比調和と指摘されているような基本的な演出の考え方である。しかし、スケールの大きな山並みに圧倒されないようなシルエットを演出するために、十分なデザイン上の工夫を要すると思われる。

a．連続性の表現

例えば多径間の桁橋やアーチ橋の、連続的な橋脚や桁が描くシルエットが全体として、輪郭線の密なまとまりのあるシルエットを描くことがある。下部工の連続した模様から、構図の下方にリズムを感じさせ、上部の山並みとの対比が感じられる例がある（**図3**）。

b．造形の洗練

また、これまで橋梁美学で基本とされてきた応力や力の流れに即した構造表現が洗練化された場合、造形的に優れたものとなり、自然との対比を生む可能性がある。マイヤールやメンの作品は、スイスの山岳の中にあって独特なシルエットをつくり、自然景観との対比を生んでいる。

④「山並みの写しをつくる（Copy)」

次に、橋のシルエットが、山のシルエットラインを模倣する演出も可能であると思われる。これは、周辺景観のシルエットを意識的に真似ることによって、周辺景観と橋との関係を意識させ、より強く橋のシルエットを強調する演出である。しかし、現実的にこのテーマを成立させるためには、物徴のある山並みを有する場所に限られよう。**図4**の白屋橋（奈良県大滝村）は、2径間連続ＰＣ斜張橋で、橋脚高74m、主塔を含め全高124mの高橋脚であることから、背景の山並みと橋梁のシルエットが重なって、景観のランドマーク的な演出を感じさせる構図をつくる。

オープンスペースと橋のシルエットの演出

ここでは、架橋景観が比較的平坦で、橋以外に垂直的な立ち上がりの高い要素が少ない、広大なオープンスペースを持つ港や農村部の景観を想定して、前章と同様にシルエットの演出を考えたい。

（1）平坦なオープンスペースと橋のシルエットの演出

①「スカイラインをつくる（Skyline)」

港を跨ぐような長大橋のシルエットを港から海へ向かって眺める際には、鋼材の骨大な輪郭からケーブルの細線の輪郭まですべての輪郭線が空に投影された、ダイナミックなスカイラインを観察することができる。長大橋は、上部構造のスカイラインだけでなく、下

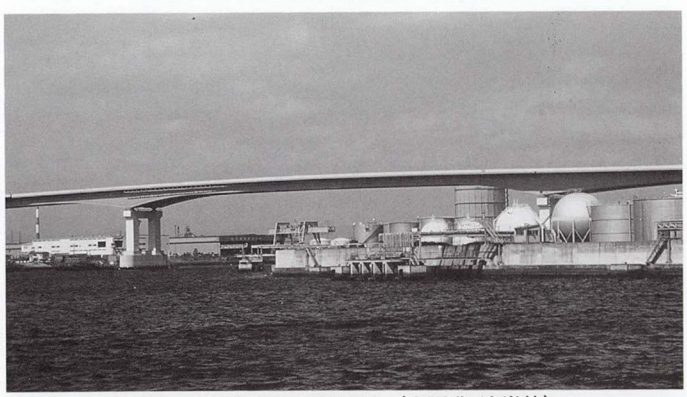


図8　水平線のスカイライン（大阪港・湾岸線）

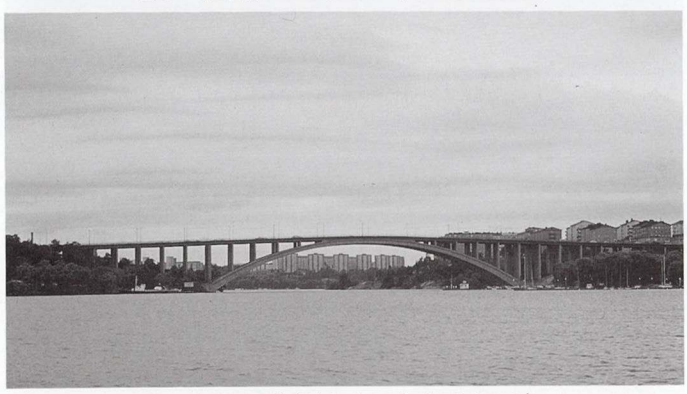


図9　地形の輪郭をむすぶ（ストックホルム）

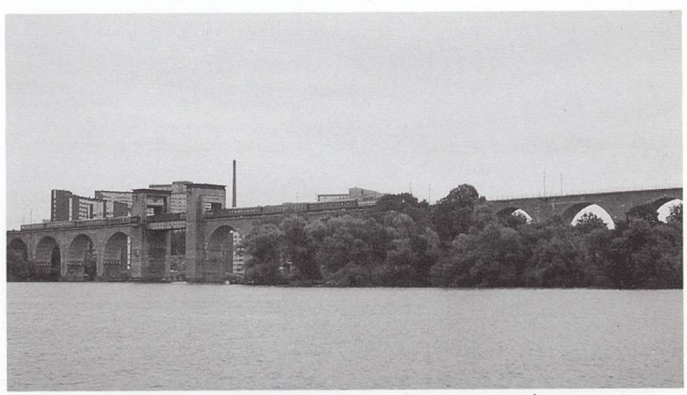


図10　地形の輪郭をむすぶ（ストックホルム）



図11　建築と橋のシルエット（シドニーハーバー）

部構造においても大きなクリアランスが取られることから、明瞭なスカイラインが描かれる。このような場所では、橋が主景となって、構造美が明瞭に表現されやすい。基本的には、次のような形式の特徴を持ちながら、主塔と桁のプロポーションや上部工と下部工のバランスの洗練された橋梁が期待される。

a．立ち上がりに幾何学的な特徴を持つ橋の形式

斜張橋や吊橋など、主塔と桁の二つの厚い線に、多数のケーブルの細線を組み合わせた幾何学的な形態は、繊細で女性的なスカイラインを描く（**図5，6，7**）。

b．シンプルな水平線を描く橋の形式

桁橋の場合、桁に水平なシルエットやキャンバーの入った微かな曲線のシルエットラインが海の水平線と平行に走り、柔らかい印象を生むことがある（**図8**）。

（2）起伏のあるオープンスペースと橋のシルエットの演出

①「地形の輪郭をむすぶ（Line）」

また、周辺環境が平坦ではあるが多少の起伏や微地形がある場合には、橋は先述のスカイラインのシルエットを演出する以外に、このような地形の持つシルエットを壊さずこれに沿って、その輪郭をよりスムーズに描くことを演出することが考えられよう。例えば、平坦な地形を流れる河川は、地平線よりやや低いレベルとなって河岸に微妙なレベル差を生じる。このような河川に架ける橋として桁橋や上路アーチ橋等の水平線の際立った橋梁を用いることによって、そのレベル差を埋め込み、周辺景観とのレベルを揃えることが可能となる（**図9，10**）。したがって地形の輪郭の視覚的な流れに対して、橋台や橋脚をできるだけスムーズにすりつけることが必要である。

（3）建造物と橋のシルエットの演出

①「ダブルシルエットをつくる（Silhouette）」

a．建築物・船との組み合わせ

橋のシルエットと、建築物、コンテナ、船など比較的大きな建造物とのシルエットが組み合わされることによって、美しいスカイラインを形成することがある。シドニーのオペラハウス（**図11**）や、ヨットハーバーに架かる橋（**図12**）にその典型を見ることができる。

b．ダブルシルエット

また都市河川に架かる橋が数多くある場合、橋の上部工のシルエットが重なって一つのまとまった形を演出することがある（**図13**）。

街並みと橋のシルエットの演出

街のシルエットは、場所の土地利用の特性によって、大きく変化する。高層ビルの並ぶオフィス街やビスタを形成する目抜き通りでは、比較的整然とした建物のシルエットが建ち並ぶ一方、密集市街



図12　船と橋のシルエット（大阪北港）

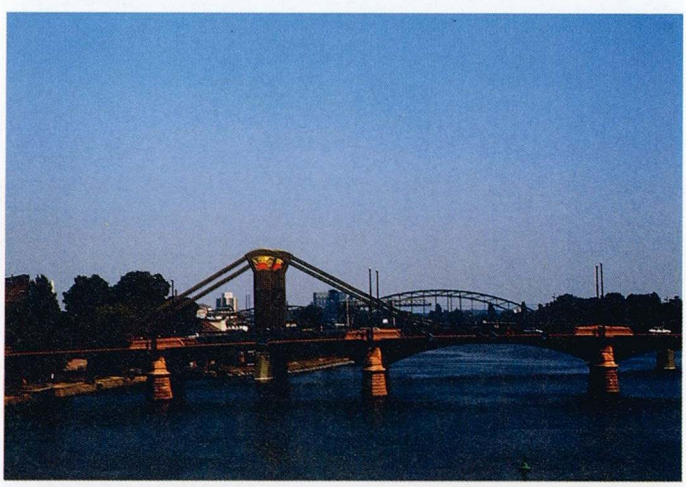


図13　ダブルシルエット（フランクフルト）

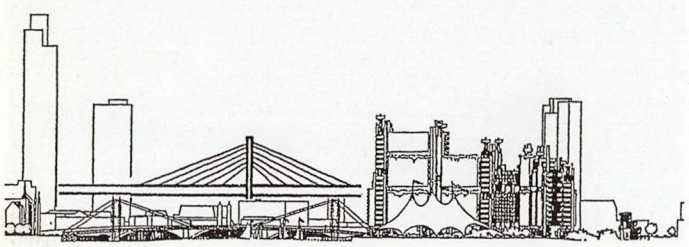


図14　斜張橋と街の対比

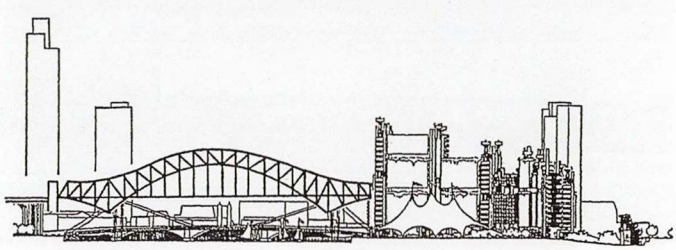


図15　トラス橋と街の対比

地のように低層住宅や中層商業ビルなどが乱立し、凹凸の激しいシルエットが錯綜している場所もある。このようなおのおのの街のシルエットの形や輪郭線の粗密などの状態に応じて、橋のシルエットの演出のテーマを考えてゆく必要があろう。

①「街との対比をつくる（Contrast)」

はじめに、山並みの場合と同様に、街のシルエットと対比する視覚的なまとまりを橋のシルエットに持たせることを考えてみたい。例えば、**図14**のようなオフィス街の整然としたビルが建ち並ぶ所では、幾何学的でまとまりのある街のシルエットが形成される。この例では、斜張橋の繊細なシルエットでは、建築物の輪郭に対して弱く感じられ、技術的コスト的に使われなくなった**図15**のようなゲルバートラスの方が、輪郭線が骨太で密になるため、対比の関係をつくりやすい。しかし、整然とはしているが建物が少ないために輪郭線の少ない所では、斜長橋との対比の関係を演出することもできる。大阪のツインタワーと川崎橋は美しい対比を見せている(**図16**)。各場所のシルエットに応じた対比を考える必要があろう。

②「街のランドマークをつくる（Landmark)」

次に、街の中の比較的近景から橋を眺める場合、橋が街の方向や場所のオリエンテーションを与えるランドマーク的な役割を果たす印象的な構図を想定したい。



図16　街との対比（大阪市・川崎橋）



図17　街のランドマーク（ベニス・リアルト橋）

ａ．個性的な造形を持つ橋

街並みのシルエットと比較して、小規模なスケールの橋ではあるが、その造形的な特徴から、ランドマーク的なシルエットを街の中につくるものがある。たとえば、ベニスのリアルト橋では、上部の大理石の回廊と連続したアーチが特徴のあるシルエットをつくっている(**図17**)。また、フィレンツェのベッキオ橋やオランダの跳ね橋など個性的なシルエットをつくる例は数多い。

ｂ．立ち上がりの高い橋

また、斜張橋や吊り橋などの立ち上がりの高い橋を街から見上げるときに、下方の街のシルエットより傑出して、橋の上部工が明快なスカイラインを描く構図が観察できることがある（**図18**)。

③「街のステージをつくる（Stage)」

次に、山並みの場合と同様に、橋と街のシルエットが重なって、橋上に街がのっているような構図を演出することを考えたい。例えば、次のような構図では、橋と街が印象的に見せられる例がある。

ａ．街をのせる（**図19**)

いくつかの建物が重なってまとまった街を表現するシルエットがのせられる構図がある。

ｂ．人をのせる（**図20**)

芸術橋（仏）のような人道橋には、橋上の露天商やベンチに数多



図18　街のランドマーク（大阪市・天保山大橋）



図19　街のステージ（ロンドン・ウエストミンスター橋）

くの人が集まってシルエットをつくり、スレンダーで透明感のある橋がそれを印象的に映す。

c．緑をのせる（図21）

また、橋詰め付近の豊富な植樹のシルエットが、橋のステージに映され、大きなフラワーポットができあがる。

④「街の縁取りをつくる（Frame)」

比較的、桁の高い橋で、上部工と桁、もしくは橋脚と桁が額縁のようになって、背後の景観を明瞭に映すような構図（図22）を想定したい。例えば、われわれに馴染み深いのは眼鏡橋と言われる上路アーチ橋やニールセン型アーチ橋であり、円形のフレームをつくる。また、桁橋では、支柱の間隔と桁の高さとの関係により、縦長の景から横長の景まで様々なプロポーションの景を切り取ることが可能であろう。

⑤「街のすきまを埋める橋（Joint)」

最後に、小規模で非常に目立たない存在ではあるが、乱雑なビルの並ぶすきまをつないで、そのシルエットに幾何学的な模様を映す橋がある。図23のようなトラス橋は、骨太で幾何学的な模様が歩行者に一瞬の変化を与える。近年ではつくられることの少なくなったトラス橋のモノトーンの姿が都市の懐かしさや情緒を感じさせることもある。

おわりに　以上のように、シルエットを観察すると様々な借景をもとに、橋が舞台や額縁のようになって周囲の景観を引き立て、さらに橋自身も本来の美しさをより効果的に引き出すための演出が示唆されてくる。それはシルエットであるからこそ、わかりやすくわれわれに伝えてくれるメッセージであるかもしれない。

そして、これらのテーマは現実の橋のデザインを考えるとき、さらに発展させるべき課題へと展開されよう。

例えば、人の歩行や時間とともに変化するシークエンシャルな景観に対して、複数のテーマを設定し、ストーリーをつくる必要がある。シドニーハーバーは、同じ橋でもいくつかの歩行の変遷によって、オペラハウスと橋の関係はダイナミックに変化した。また、素材や質感の問題は、シルエットから観察することは困難であるが、ヨーロッパの古い街を歩くと、建築物と同じ素材を用いた石造りの橋が街とのバランスを保っている例が多く見受けられる。このような繊細な輪郭をどのように表現すればよいのか。

本稿がこのような課題を残し、また設計への具体化という側面では未だ稚拙ではあるが、シルエットが景観と橋との積極的な関係をつくる上での一つの基礎的なテーマとなれば幸いである。

（かわさき　まさし　京都大学工学部環境地球工学科助手，工学博士）



図20　人のステージ（パリ・芸術橋）

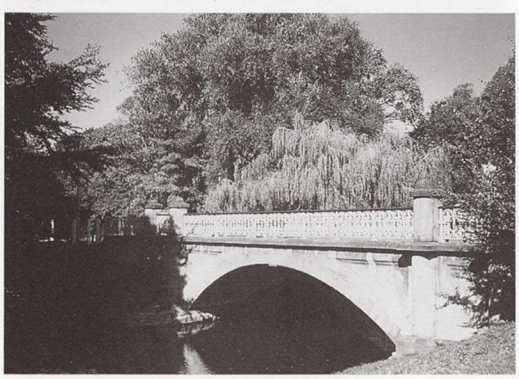
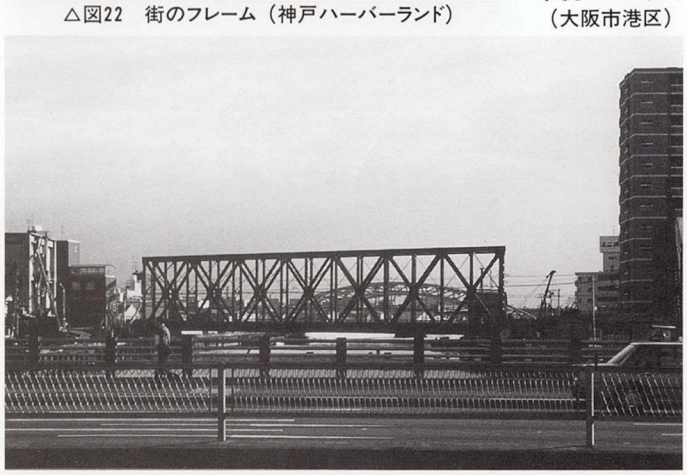


図21
緑のステージ
（クライストチャーチ）



△図22　街のフレーム（神戸ハーバーランド）



▽図23
すきまのジョイント
（大阪市港区）

投稿

わがまちのスカイライン





二つのビルの昼と夜

木多道宏
大阪大学工学部建築工学科助手

千里ニュータウンを歩いていると、二つの新しい高層ビルが見えかくれし、時には道路のアイストップになることもあります。千里中央にある千里ライフサイエンスセンターと千里朝日阪急ビルです。特徴的なデザインの二つの建物は、見る方向により見え方を変え、変化のある景観をつくり出しています。また、ビル頂部の照明はその姿を夜空に浮かびあがらせ、方位を見失いがちなニュータウンの中で、昼夜を問わずオリエンテーションを与えてくれます。



区切られたOBPの空

増田栄一郎　大阪市旭区

鉄とコンクリートとガラスによる都市の建築空間は、都市に生活するものにとっては見慣れた景観だが、わけても身近な生活行動域内には特に印象に残る景観がある。
私にとってのそれは大阪ビジネスパーク（OBP）である。
天満橋（人・車橋と車道橋の二重構造）によって区切られた矩形の中に観るOBPのスカイラインは、幾何学模様を見るようだ。



建築の向こうには山がある

三 宅 次 郎　学生

これは、私が下宿から大学へ向かう途中、北山通りを渡るときに目に入る光景を撮ったものです。だだっ広い関東平野の真ん中で生まれ育った私にとって山というものは、「あれは○○山だ」と一つ一つ指差すような、特別な存在でした。しかし京都で暮らし始めて、これらの山並みはあらゆる風景の下地となっていることに気づきました。きらびやかな建築の向こうには、結局山があるのです。スカイラインは、人の世界と空との接線です。できれば、それは山々に任せたい、というのが今の私の気持ちです。



私の住む御殿山の高台からは、枚方パークの観覧車がよく見える。その上半分が、ちょうど近鉄百貨店の屋上から顔をのぞかせ、半円形の特異なスカイラインを形成する。ここ数年、枚方市駅周辺には高層マンションやオフィスビルが建ち並び、また京阪電車が高架になるなど街の変化が激しく、しだいに雑然としたスカイラインになってきたようである。それでも、北摂や六甲の山並みに沈む夕日を背景にしたスカイラインを見ると、どことなくほっとするのである。

観覧車の見えるまち　吉 村 英 祐　枚方市



鳥居よりも低く

鈴 木 克 彦　京都工芸繊維大学助教授

もともと上賀茂神社の神官の居住区であった上賀茂社家町である。上賀茂神社の境内から流れ出る明神川に沿った土塀や石橋の町並みが美しい所であるが、江戸末期の建築様式を伝えるといわれる社家は、かつては上賀茂神社の鳥居よりも高く建築しない慣習があった。その慣習が、京都で生まれ育った伝統を守っていこうという住民たちの総意で、今日まで引き継がれていることが、なぜか新鮮に感じられる場所である。



米井　寛　東畑建築事務所

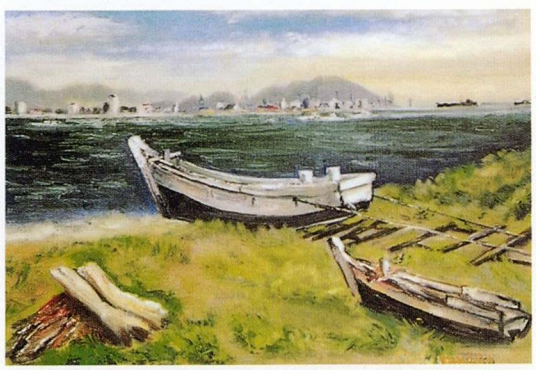
空に転写された野心

テキサスの大平原に忽然と現れたかのような金融都市ダラスのスカイラインである。
私は、かつてこれほどまで鮮やかに天を切り裂くスカイラインを見たことがなかった。それはあたかも、周囲の自然や現実の人間の生活とは無関係に、資本家たちのあくなき拡張への野心がそのまま空に転写されたかのような乾いた光景だった。このスカイラインを構成する建物群の過剰な垂直指向とデザインの競演の背後に、その動機として「差異の無限連鎖」を運命づけられた時代の、資本家と建築家の個人としての「欲望」を見たいと思う。

斜陽　中西達彦　和歌山県庁建築課勤務　36歳



私歌山市の製鉄工場のスカイライン。
「鉄は国家なり」と言われ、基幹産業として出る煙にすら誇りを感じた時期があり、公害の元凶として指弾され悪の象徴に見えた時期を経て、斜陽産業となった現在、何か力なく影の薄い存在に見えています。
これはスカイライン、建築景観にも人々の意識が反映され、時代感覚から逃れられない宿命にあること、歴史的景観が好まれるのはこの時代感覚が安定期に入っているゆえではないかと考えます。



田中静雄（1927~1993）　油彩10号　古舟・海峡を望む

父と見つめた街　たなか　なおと

水平線と地平線の彼方に
父と見つめていた街がある。

朝焼けの海。走る舟。
突きぎる風。踊る波。
「今日はいい天気でよかったな。」
弾む声とは別に、目ははるか彼方へ。
「ここらの景色もかわったな。」
呟く顔に朝日が輝く。

夕焼けの浜辺。佇む人影。
島影にはしるヘッドライト。
ほっと燈る対岸の明かり。
今頃どうしてるかな。
優しく迎える港の灯台のシルエット。

街が変わる。
人が変わる。
うつりゆく時の流れを超えて、
今、海峡は変わる。
21世紀への夢を架けて、
橋は海を渡り、街をつなぐ。

父の描いた海峡は、
今、大きく変わろうとしている。

都市のスカイラインに関する法律

梅村宏尚

はじめに　都市のスカイラインを構成するものは、建築物、工作物、土木構造物といったものから、山、丘、樹木という自然的なものが考えられる。そして、これらは様々な法律の対象となっており、形態・外観に関する規制も設けられている。

ここでは、スカイラインの形成に影響を与えると思われる、土地利用や形態に関するいくつかの法律の規定について簡単に触れてみる。

土地の利用を規制する

まず、土地利用規制に関するものとして、以下のものがある。

(1)　市街化区域・市街化調整区域

【都市計画法　第７条（市街化区域及び市街化調整区域)】

都市計画区域では、無秩序な市街化を防止し、計画的な市街化を図るため、市街化区域と市街化調整区域を指定している。

・市街化区域

…すでに市街地を形成している区域、おおむね10年以内に優先的、計画的に市街化を図るべき区域

・市街化調整区域

…市街化を抑制すべき区域

(2)　用途地域

【都市計画法第８条・第９条（地域地区)】

用途地域は、市街化区域内の土地利用規制の根幹をなすものであり、その地域の目指すべき土地利用の方向に応じて、

・第１種低層住居専用地域（低層住宅の良好な環境を保護するための地域)
・第２種低層住居専用地域（主として低層住宅の良好な環境を保護するための地域)
・第１種中高層住居専用地域（中高層住宅の良好な環境を保護するための地域)
・第２種中高層住居専用地域（主として中高層住宅の良好な環境を保護するための地域)
・第１種住居地域（住居の環境を保護するための地域)
・第２種住居地域（主として住居の環境を保護するための地域)
・準住居地域（沿道地域にふさわしい業務の利便の増進と、それに調和した住居の環境を保護するための地域)
・近隣商業地域(日用品販売の店舗等の利便を増進するための地域)
・商業地域（主として商業・業務の利便を増進するための地域)
・準工業地域（主として軽工業の利便を増進するための地域)
・工業地域（主として工業の利便を増進するための地域)
・工業専用地域（工業の利便を増進するための地域)

の12種類の用途地域を都市計画において指定している。

そして、用途地域による建築物の具体的な用途規制は建築基準法第48条により、規定されている。(本稿では都市計画法・建築基準法については、平成４年６月に改正された規定によっている。)

これらは、スカイラインの基礎とも言えるそれぞれの地域の土地利用の方向や建築物の用途を規定するものである。

建築物の形態を規制する

建築物の用途は、スカイラインを特徴づける要素のひとつであるが、用途地域とあわせて、以下に述べる容積率、建ぺい率、建築物の高さ等、形態そのものに対する制限が定められており、スカイラインの形成の上で最も影響を与えるものであろう。

(3)　容積率

【都市計画法　第８条（地域地区)】

都市計画において、用途地域に応じて容積率を指定している。

【建築基準法　第52条（延べ面積の敷地面積に対する割合)】

建築物の容積率は、都市計画で指定された数値以下としなければならない。ただし、前面道路の幅員が12m 未満の場合には、その幅員に住居系地域では10分の４、その他の地域では10分の６を乗じた数値と比べて、小さいほうの容積率以下でなければならない。

(4)　建ぺい率

【都市計画法　第８条（地域地区)】

第１種低層住居専用地域・第２種低層住居専用地域・第１種中高層住居専用地域・第２種中高層住居専用地域・工業専用地域については、都市計画において建ぺい率を指定しており、その他の用途地域については、建築基準法で建ぺい率が決められている。

【建築基準法　第53条（建築面積の敷地面積に対する割合)】

建築物の建ぺい率は、用途地域ごとに都市計画で指定されたものまたは同法で規定されている数値以下としなければならない。ただし、角地等の場合には一定割合の緩和がされる。

(5)　高さの制限

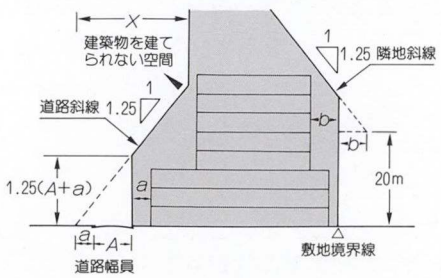
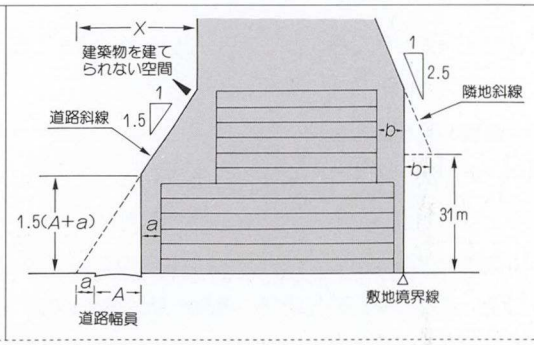
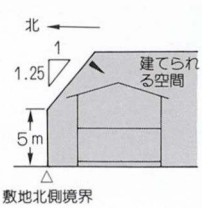
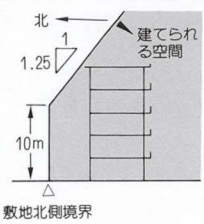
①絶対高さ制限

【都市計画法　第８条（地域地区)】

第１種低層住居専用地域・第２種低層住居専用地域については、都市計画において、建築物の高さの限度が指定されている。

【建築基準法　第55条（第１種低層住居専用地域・第２種低層住居専用地域内における建築物の高さの限度)】

第１種低層住居専用地域・第２種低層住居専用地域内の建築物の高さは10m または12m のうち都市計画において指定された高さの限度を越えてはならない。

<table>
<tr><th colspan="2">用途地域</th><th>第１種
低層住居
専用地域</th><th>第２種
低層住居
専用地域</th><th>第１種中
高層住居
専用地域</th><th>第２種中
高層住居
専用地域</th><th>第１種
住居地域</th><th>第２種
住居地域</th><th>準住居地域</th><th>近隣商業
地域</th><th>商業地域</th><th>準工業地域</th><th>工業地域</th><th>工業専用
地域</th></tr>
<tr><td colspan="2">容積率
(%)</td><td colspan="2">50
60
80
100
150
200</td><td colspan="2">100
150
200
300</td><td colspan="4">200
300
400</td><td>200
300
400
500
600
700
800
900
1000</td><td colspan="2">200
300
400</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">建ぺい率
(%)</td><td colspan="4">30
40
50
60</td><td colspan="3">60</td><td colspan="2">80</td><td colspan="2">60</td><td>30
40
50
60</td></tr>
<tr><td colspan="2">高さ制限
(m)</td><td colspan="2">10
12</td><td colspan="11"></td></tr>
<tr><td rowspan="2">斜線制限</td><td>道路・隣地斜線</td><td colspan="6"> 
</td><td colspan="5"> 
</td></tr>
<tr><td colspan="6">X：前面道路による斜線制限については、用途地域・容積率に応じ一定距離（20～35m）以上の部分は適用なし</td></tr>
<tr><td>北側斜線</td><td colspan="2"> 
</td><td colspan="4"> 
</td><td colspan="5"></td></tr>
</table>

②斜線制限

【建築基準法　第56条（建築物の各部分の高さ）】

建築物の各部分の高さは道路斜線、隣地斜線、北側斜線より以下としなければならない。

・道路斜線制限

…前面道路の反対側の境界線から敷地の上空に向けて一定勾配で引いた斜線による制限

・隣地斜線制限

…道路以外に接する敷地境界線上の一定高さから敷地の上空に向けて一定勾配で引いた斜線による制限

・北側斜線制限

…真北方向の敷地境界線上の一定高さから敷地の上空に向けて一定勾配で引いた斜線による制限

これらの斜線の勾配等は、用途地域に応じて建築基準法に決められている。

③日影規制

【建築基準法　第56条の２（日影による中高層の建築物の高さの制限）】

一定の用途地域のうち条例で指定する区域では、一定高さ以上の建築物は、冬至日の一定時間帯に、決められた領域に対して、一定以上の日影を生じさせてはならない。

(6)　総合設計制度

【建築基準法　第59条の２（敷地内に広い空地を有する建築物の延べ面積の敷地面積に対する割合等の特例）】

一定規模以上の敷地で一定の公開空地を確保した計画で、特定行政庁が市街地の環境の整備に寄与すると認めて許可することにより、容積率の制限、道路斜線制限等の高さの制限が緩和される。

特定の地域やものを規制する

そのほか都市計画において、様々な地域地区が指定されるが、形態的な面からスカイラインの形成に影響を与えるような主だったものをあげてみる。

(7) 高度地区

【都市計画法　第８条・第９条】

用途地域内において市街地の環境の維持、または土地利用の増進を図るため、建築物の高さの最高限度、または最低限度を定める地区である。

【建築基準法　第58条（高度地区）】

高度地区内の建築物の高さは、高度地区に関する都市計画において定められた内容に適合するものでなければならない。

(8) 高度利用地区

【都市計画法　第８条・第９条】

用途地域内の市街地における土地の合理的かつ健全な高度利用と都市機能の更新とを図るため、建築物の容積率の最高限度および最低限度、建ぺい率の最高限度、建築面積の最低限度、壁面の位置の制限を定める地区である。

【建築基準法　第59条（高度利用地区）】

高度利用地区内の建築物の容積率、建ぺい率、建築面積、壁面の位置は高度利用地区に関する都市計画において定められた内容に適合するものでなければならない。

(9) 特定街区

【都市計画法　第８条・第９条】

市街地の整備改善を図るため、街区の整備造成が行われる地区について、建築物の容積率、高さの最高限度、壁面の位置の制限を定める街区である。

【建築基準法　第60条（特定街区）】

特定街区内の建築物の容積率、高さ、壁面の位置は特定街区に関する都市計画において定められた限度以下でなければならない。

(10) 美観地区

【都市計画法　第８条・第９条】

市街地の美観を維持するため定める地区である。

【建築基準法第68条（美観地区）】

美観地区内の建築物の敷地、構造、建築設備に関するもののうち、美観の保持に必要な制限を条例で定めている。

(11) 風致地区

【都市計画法　第８条・第９条】

都市の風致を維持するため定める地区である。

【都市計画法　第58条（風致地区内における建築等の規制）】

風致地区内においては、①建築物等の建築、②宅地の造成、土地の形質の変更、③木竹の伐採、④土石類の採取、⑤水面の埋立・干拓、⑥建築物等の色彩の変更、等の行為が制限されており、府県知事（政令指定都市の長）の許可がなければ、してはいけないこととなっている。

(12) 歴史的風土特別保存地区

【古都における歴史的風土の保全に関する特別措置法　第８条（特別保存地区内における行為の制限）】

歴史的風土特別保存地区内においては、①建築物等の建築、②宅地の造成、土地の形質の変更、③木竹の伐採、④土石類の採取、⑤建築物等の色彩の変更、⑥屋外広告物の表示・掲出、⑦水面の埋立・干拓、といった行為が制限されており、府県知事（政令指定都市の長）の許可がなければ、してはいけないこととなっている。

・歴史的風土特別保存地区

…歴史的風土保全区域内で歴史的風土の保全上、枢要な部分を構成している地域（同法　第６条）

・歴史的風土保全区域

…古都（京都市・奈良市・鎌倉市・天理市・橿原市・桜井市・斑鳩町・明日香村）における歴史的風土を保存するために必要として、内閣総理大臣が指定した区域（同法　第４条）

(13) 伝統的建造物群保存地区

【文化財保護法　第83条の３（伝統的建造物群保存地区の決定及びその保護）】

伝統的建造物群保存地区内においては、①建築物等の建築・除却、②宅地の造成、土地の形質の変更、③木竹の伐採、④土石類の採取、⑤建築物等の色彩の変更、等の行為が制限されており、市町村長、教育委員会の許可がなければ、してはいけないこととなっている。

・伝統的建造物群保存地区

…伝統的建造物群およびこれと一体をなしてその価値を形成している環境を保存するため、市町村が定める地区（同法　第83条の２）

・伝統的建造物群

…周囲の環境と一体をなして歴史的風致を形成している伝統的な建造物群（同法　第２条）

(14) 緑地保全地区

【都市緑地保全法　第５条（緑地保全地区における行為の制限）】

緑地保全地区内においては、①建築物等の建築、②宅地の造成、土地の形質の変更、③木竹の伐採、④土石類の採取、⑤水面の埋立・干拓、等の行為が制限されており、府県知事（政令指定都市の長）の許可がなければ、してはいけないこととなっている。

・緑地保全地区

…都市計画区域内で良好な自然環境を形成している樹林地・草地・水辺地・岩石地等を保全するために定める区域（同法　第３条）

⑮　生産緑地地区

【生産緑地法　第８条（生産緑地地区内における行為の制限）】

生産緑地地区内においては、①建築物等の建築、②宅地の造成、土地の形質の変更、③土石類の採取、⑤水面の埋立・干拓、といった行為が制限されており、市町村長の許可がなければ、してはいけないこととなっている。

・生産緑地地区

…市街化区域内において、公害・災害の防止、農林漁業と調和した都市環境の保全等良好な生活環境の確保に効用がある500㎡以上の農地の保全を図るため定める地区（同法　第３条）

⑯　屋外広告物法による制限

【第３条（広告物等の制限）】

屋外広告物法の規定に基づく条例によって、美観風致を維持するために、広告物の表示や、広告物を掲出する物件の設置を制限している。

このほか、都市計画においては、まとまりを持った地区における建築物等の形態等を細かく規定できる地区計画等のような制度もある。

これらは、指定する地域地区の目的からして、建築物のような人工物だけでなく、木竹や土地の形質のような自然的な要素の形態にまで規定が及ぶものもあり、まさに、その地域地区のスカイラインを規定しているものと言える。

障害物にならないために

以下、そのほかにスカイラインの形成に影響を与えるようなものをいくつかあげておく。

⑰　航空法による制限

【第49条（物件の制限等）】

公共の用に供する飛行場について、その進入表面、転移表面、水平表面の上に出る高さの建造物、植物等を設置したり植栽することはできないこととなっている。

・進入表面

…着陸帯の短辺に接続し、上空に向かって一定勾配を持つ平面の一定部分（同法　第２条）

・転移表面

…進入表面の斜辺を含み、着陸帯の長辺を含む平面の一定部分（同法　第２条）

・水平表面

…飛行場の標点上45mの点を中心として、一定の半径で描いた円周で囲まれた部分（同法　第２条）

⑱　電波法による制限

【第102条の６（重要無線通信障害原因となる高層部分の工事の制限）】

建築物や工作物で、地表からの高さが31mをこえる高層部分が伝搬障害防止区域に係る重要無線通信障害原因となる場合は、２年間（その伝搬障害防止区域が電気通信業務障害防止区域の場合には、３年間）は、障害原因部分の工事ができないこととなっている。

・伝搬障害防止区域

…郵政大臣が、重要無線通信の電波伝搬路における伝搬障害を防止して、重要無線通信の確保を図るために指定した、中心線の両側それぞれ100m以内の区域（同法　第102条の２）

・重要無線通信

…890メガヘルツ以上の周波数の電波による特定の固有地点間の無線通信で、①電気通信業務、②放送、③人命・財産の保護、治安の維持、④気象業務、⑤電気事業、⑥鉄道事業に係るもの（同法第102条の２）

・電気通信業務障害防止区域

…重要無線通信のうち電気通信業務の無線通信の電波伝搬路に係る伝搬障害防止区域（同法　第102条の２）

おわりに　以上、おもいつくままに、各種法律による規制をあげてきた。まだまだ、ほかにもこのような類のものがあると思うが、それはさておき、これらの法律がスカイラインそのものを形づくるわけではない。これらの法律は、あくまでもおのおのの目指すところにより、建築物や構造物等の形態等に規制をかけているのである。

スカイラインが、その結果として出来上がってしまう場合もあるだろう。しかし、規制のもとでも、哲学を持ちながらものをつくっていけば、意味のあるスカイラインを生み出すことは可能であろう。さらに、誤解を恐れずに言えば、もう一歩踏み込んで、万民に対して説得力を持ったスカイラインとは何かを考えることも重要なことなのかもしれない。

（うめむら　ひろなお　大阪市市長室企画部総合計画課）

景観規制関連略年表

年代	景観規制関連の動き	景観規制関連法規	竣工建物	日本建築界の動き・出版・その他
●1910（明治43）				
		1919 都市計画法（風致地区制度）		
●1920（大正9）				
		1920 市街地建築物法（市街地の建物高さを100尺に制限，道路斜線，美観地区）	*1923* 丸の内ビルディング	
●1930（昭和5）				
		1931 高度地区，空地地区〈市建法〉		
	1933 美観地区指定第一号（皇居周辺一帯）		*1933* 大阪ガスビル	
	1934 大阪に美観地区指定（中之島周辺）			
	1936 大阪駅前に高度地区指定（高さの最低限度指定）			
●1940（昭和15）				
		1949 屋外広告物法		
●1950（昭和25）				
		1950 建築基準法（高さ制限，道路斜線などを市街地建築物法から引き継ぐ）		《伝統論争》
●1955（昭和30）				
		1956 屋外広告物条例（京都市・大阪市）		
			1958 東京タワー	*1958* 都市のイメージ（K.リンチ）
		1959 高架工作物内の建築物の高さ制限緩和		
●1960（昭和35）				
			1960 関西電力ビル	*1960* メタボリズム宣言（菊竹清訓，黒川紀章ほか）
		1961 特定街区制度〈都計法，建基法〉（一定条件以上の敷地に限り31mの高さ制限に特例）		*1961* 都市のデザイン（伊藤ていじ，磯崎新ほか）
			1962 首都高速道路1号線	
		1963 容積地区制〈建基法〉（31mの絶対高さ制限緩和）隣地斜線制限〈建基法〉		*1963* 日本の都市空間（都市デザイン研究体）
	1964 京都タワー建設反対運動		*1964* 国立屋内総合競技場	*1964* 東京オリンピック
●1965（昭和40）				
	1965 横浜市都市美観対策審議会設置			《デザインサーヴェイ》
	1966 都が東京海上ビル計画に対し美観条例による規制を持ち出す（のち撤回）	*1966* 古都保存法		*1966* 建築の複合と対立（ヴェンチューリ）
		1968 都市計画法を全面改正	*1968* 霞が関ビル（特定街区制度適用第一号）	*1968* かくれた次元（E.T.ホール）
		1969 風致地区内の建築等の規制の規準を定める政令		

●1970（昭和45）

1970 東京海上ビルの計画高さを127mを100mに引き下げ，3年ぶりに大臣認定おりる（1974年竣工）



1970 31mの絶対高さ制限廃止
道路幅員による高さ制限廃止
北側斜線制限〈建基法〉
総合設計制度〈建基法〉
（容積率，高さ制限，斜線制限の緩和）

1972 市街地景観条例
（京都市・高山市）

1970 EXPOタワー
世界貿易センタービル



1973 大阪大林ビル
大阪国際ビル

1974 新宿住友ビル
（高さ200m突破）

1970 EXPO'70（大阪万博）

1971 京王プラザホテル
（新宿超高層第一号）

《第1次オイルショック》

●1975（昭和50）

1975 EXPO'75（沖縄海洋博）
フラクタル理論（Mandelbrot）

1976 皇居お立ち台からの仰角に基づく建物高さ自主規制答申

1976 日影規制〈建基法〉

1977 ポスト・モダンの建築（C.ジェンクス）

1978 日比谷公園周辺の高層ビル建設反対裁判（却下）

1978 サンシャイン60
（60階）

1979 街並みの美学（芦原義信）

1980 地区計画〈都計法，建基法〉

《第2次オイルショック》

●1980（昭和55）

1982 大阪市建築美観誘導制度

1983 つくばセンタービル

1983 続・街並みの美学（芦原義信）

1984 宝ヶ池プリンスホテル建設計画に伴う風致地区の高さ制限緩和問題

《ポスト・モダン建築隆盛》

●1985（昭和60）

1985 斜線制限の一部緩和〈建基法〉

1985 EXPO'85（つくば科学技術博）

1986 ツイン21

1987 ヤマトインターナショナル
梅田センタービル

《大深度地下開発構想》

1988 新神戸オリエンタルシティ・C3

1989 アサヒビール吾妻橋ビル

《超々高層ビル計画案》

●1990（平成2）

1990 京都ホテル改築反対運動
ＪＲ京都駅改築反対運動

1990 日本電気本社ビル

1990 EXPO'90（大阪花博）



1991 御堂筋景観論争

1991 東京都新庁舎

1992 アプローズタワー

1993 住居地域の細分化，ダウンゾーニング〈都計法〉

1993 梅田スカイビル
MM21ランドマークタワー

〈市建法〉…市街地建築物法
〈建築法〉…建築基準法
〈都計法〉…都市計画法

特集を組むにあたり、景観問題をどう扱うかについて編集委員の間で議論があった。しかし、他のメディアで掘り下げた特集や記事がみられることや、景観問題を正面からとりあげるための十分な準備期間がなかったことなどから、今回は対象としないことになった。とはいえ、全く触れないわけにもいかないので、過去の景観論争や、都市のスカイラインを何らかのかたちで規定する法律、都市のスカイラインの点から話題になった建築などを整理してみた。もとよりすべての事項を網羅しておらず、またその選定基準が明確でないことをお断りしておきたい。

（吉村英祐／小浦久子）

EPILOGUE

都市情景としてのスカイライン

田中直人

はじめに　都市を構成する主体は、数多くの集住する人間である。そこでは様々な生活の営みや活動が展開される。その受け皿となる生活環境は、自然のもたらした環境そのものではなく、長年にわたる歴史的変遷の中で積み重ねられてきた、人間の環境に対する作用の結果とも言うべきもので構成されている。

建築や土木構築物は環境に対する作用の代表的な形態と言えるが、その具体的な内容はまさに人間の都市における営みそのもののバラエティを反映したものである。生活上のいろいろな場面は必ずしもこれらの人工的な空間だけで満たされるものではないが、絶えずその地域、時代のニーズに対応していこうとしてきた人間の努力の産物とも言える。

しかし、その結果、身近に存在し、日頃接している都市環境を見た場合、努力の結果として評価されるものばかりではないことに気がつく。元来そこに存在していた自然環境のもたらしてくれた恩恵に気づかず、いつの間にか人間が中心と言いながらも、身勝手な改造や振る舞いをしてきたことも指摘される。失ってしまってからではどうすることも出来ないようなとんでもない過ちもあったかもしれない。ところが毎日生活している人間にとって、自分たちの置かれている環境についてしみじみ眺めたり、考える余裕などはなかったというのが実情であろう。あるいはいまさら言ってもどうすることも出来ないし、自分のことで精一杯ということかもしれない。

これまでに形成されてきた都市環境について再確認していくことが求められる。その切り口は多くあるが、僕たちは都市環境をベーシックなところで支えているフィジカルな側面から捉えることにし、都市景観やまちなみについて考えてみることにした。

「スカイライン」はその中でも、都市に住んだり、働いたり、かかわり合いのある人々にとって、無意識のうちにその都市そのもののアイデンティティやイメージを形づくる上での大きな要素として捉えることが出来る。また、これからの都市環境を考えていく上で必要と思われる都市内の様々な環境構成上のエレメントとシステムを検討していく際の大きな手掛かりとして考えられる。

都市のイメージ形成とスカイライン

古今東西、世界中に数多くの都市が存在し、自然や歴史に育まれて独自の都市イメージを持つものが多い。そのイメージは直接その都市環境に身をおいて抱く場合もあるが、ほとんどの人の場合、間接的に他の人からの情報によって形成していくことが多いと言える。その情報は発信する人そのものの直接的原体験がもとになっていると思われるが、必ずしも一人の原体験だけではなく、幾多の人々の体験や評価から、一定の水準のイメージとして定着したものが基礎となっていると考えられる。

それではそのイメージはどのような形で記録され、伝えられるのだろうか。一つには言葉として都市から抱いたイメージを表す場合がある。例えば「花の都、パリ」と言えば、セーヌ河やエッフェル塔の景色を思い浮かべながら、美しく華やかな都市の情景が目に浮かんでくる。また、「ロマンチック街道」と言えばドイツからスイスにいたる一帯の川や山そして古城の点在するメルヘンの世界へとイメージを膨らませてしまうのが普通であろう。ところが実際に行って見ると、ヨーロッパにおいては同じように美しい情景は他にもあるし、なぜ「ロマンチック」なのかよくわからないところもあって、逆に上手にネーミングしているなと感心したりするものである。

イメージと実態は必ずしも一致するとは限らないが、そのイメージのプラスの側面について積極的に評価し、その良さを上手に実態としてそうであるように近づけていくことは悪いことではなく、むしろ都市や地域のイメージアップを図り、より良い方向へ誘導していく手法の一つとして評価してもよいものかもしれない。言葉にはイメージを伝え、膨らませていく力がある。

一方、僕たちはイメージを伝えるのに、ビジュアルな方法を用いることが多い。写真やスケッチといったものはその代表的な手段であろう。有名な観光地ではいつの間にか、絵葉書等で紹介されるその都市や地域の景色は同じような場所が取り上げられていることが多いようである。絵葉書の素材となる事物は通常の場合、前述した建築物であったり、橋や通りといった土木構築物や工作物、モニュメント等であるが、何となくこれを見ればここというような対応関係が成立したりする。もちろんこのような人工の事物だけではなく、自然環境からもたらされる風景の世界もある。その中でその都市や地域のスカイラインがイメージ形成の上でどのような影響を及ぼしているかという視点も見逃せない。

これらのイメージに関して、その都市や地域にかかわる人について見ると、実際にそこで生活している市民サイドからは「わが街のイメージ」であり、街への愛着を抱く手掛かりの一つであると言える。また、来街者にとっては、その街を認知していく手掛かりであり、他の街との差別化を図り、自分が街の中で展開していく実体験へと導く動機づけとなる。さらにそのイメージをいろんな形で操作したり、直接その中心となる事物の形成に関与している人たちがいる。それは建築家であったり、都市計画家、デザイナーであったりするが、そのような専門家のみならず、その都市や地域の計画を担当している行政組織のスタッフも重要な役割を担っている。今までの都市イメージの延長線上でものを考えていくだけではなく、新たに将来の都市イメージを創造していく立場で取り組んでいく人たち



雪化粧した北野町より神戸市街地を見る

である。現存するもののうち、何を残し、何を変えていかなければならないか、規制や指導に加え、調整や啓蒙といった視点や方法で積極的に関係する人たちと協同していく必要がある。

都市や地域のイメージを形成している重要な要素としてのスカイラインについてどのようにして、まもり、つくり、育てていくのかという問題意識の存在がまず基本として必要である。そのためには今だけのことではなく、ずっと先の将来にわたってどうするかのプログラムづくりが求められる。そういった意味で子供の頃から、自分の住む都市や地域のイメージを支えるスカイラインについて意識を持たせるようなまちづくり教育も必要と考えられる。

スカイラインを彩る構成要素

都市のスカイラインは絶対的に存在している形の問題ではなく、むしろそれをどのような視点から、いつ、どのようにして見るか、あるいは見せるかという相対的な関係、すなわち受け手側の条件が大きく作用してくる。同じものを見ても全く異なる印象を抱き、イメージを形成してしまうかもしれない。例えば、どこから眺めるのかという視点に関しては、通常のヒトの目のみならず、トリの目があったり、コドモやイヌの目といった高さの違いがある。一つのスカイラインを多彩に見せ、感じさせてしまう多くの状況についてすべてを取り上げることは出来ないが、そのいくつかについて、見てゆきたい。

1）自然的要素からの彩り

都市やその地域が存在している地形の条件がある。平面的に広がりのある所、傾斜地、起伏の多い所では基本的に様々な都市構築物の成立する基盤が異なる。さらにそのエリアがどの範囲までの広がりとして形づけられているか。その仕切りとなっている要素はいったい何であるのか。例えばそれは山なのか海なのか、それとも川か池か湖か。もっと違った岩なのか樹木なのか。そしてそれらは当該のエリアに対してどのようなスケール感で存在しているものなのかというようなことがある。またその形状はどのようなものであるかということも加わってくる。

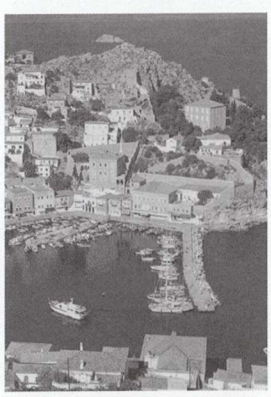
形の問題だけではなく、その質的な問題も大切である。そのスカイラインを見るときの天候によって全く異なる。例えば、晴れているのか曇っているのか、あるいは雨や雪か、雪であれば降りつつあるときか、止んで、積もっていわゆる雪景色となっているかによって大きく異なる。四季折々の自然の変化の中でも趣を異にする。太陽光線の織りなす変化は、ものの見え方を輝かせたり、沈めたりもする。また夜景の中で月や星の光がスカイラインをどのように映すかということもある。それらはまさに情景のテクスチャーともいうべき環境デザイン上の演出テーマでもある。同じような形や色であっても、透明感や輝きあるいはその印象は異なったものとして映る。

2）人工的要素からの彩り

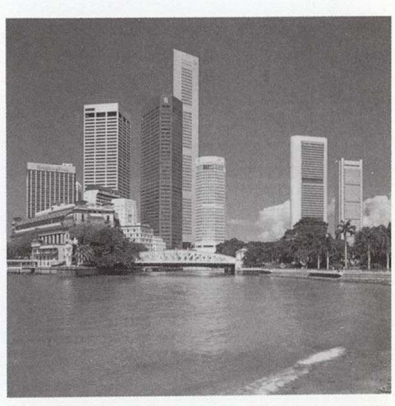
人工的要素の代表は建築物であろう。建築物は与えられた敷地に対して必要とされる機能と形態等を考慮して、総合的なデザインとして生み出される。敷地に関しては一定の許容されるボリュームと高さ、敷地境界との距離等の数値的指標が決められていることが多く、通常はこの制約の中で、個々の建築家が諸条件を考慮して最適値と思われる答えを提示していくことになる。しかし、あくまで彼が担うことが出来るのはその敷地内のことにおいてということから、完成予想図（パース）を描く場合においても、その建築物のみであることが多い。あえて隣接する既存の建築物に関する情報はプレゼンテーションの際にはネガティブに扱ってしまうことが一般的である。与えられた敷地の中で、精一杯自己主張を試み、他との差別化を図ろうとするわけである。

建築物の場合、単体の建築としての問題もあるが、群としての問題も大きい。群として見た場合、単体とは違ったスカイラインに関する問題が意識される。

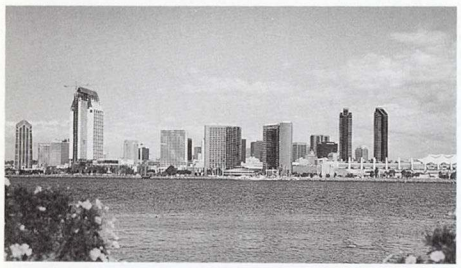
一つには高さの問題がある。高さの絶対値の問題について、御堂筋の百尺（31米）の制限の是非に関する論争がクローズアップされる。制限の中で目一杯建てた結果が一つのまちなみを形成し、歴史的な流れの中で大阪のイメージを代表する都市環境を生み出したことは大変意義深いことである。高さが揃うことによって、前面の街路樹の景観と合わせて、特色のある空間の表情が出現している。古いヨーロッパのまちなみにはこのように高さが揃うことによって統



ギリシャ、イドラ港―白い家並みが描く歴史のスカイライン―



シンガポール―緑豊かな市街地に林立する超高層ビル群―



サンディエゴ――対岸のウォーターフロント開発地から見た市街地―

一感のある落ち着いたまちなみを保っている事例は多い。しかし、よく見ると一つ一つの建築物の持つ全体への手掛かりとなるデザイン上の対応には差がある。すなわち御堂筋の場合は高さからの統一感はあってもスカイラインのディテールやファサードの構成においては個々の主張があり、ヨーロッパの事例ほどの徹底した一体性は感じられない。しかも一部には既存のイメージを崩すような建築物がすでに出現している。ここにおいてあらためて、高さ制限の意義と効果および限界について議論し、新たなデザインへの模索を始める必要があろう。

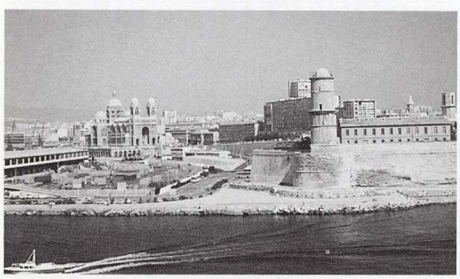
さらに高さに関してはそれぞれの高さの相対的な問題、すなわちバランスの問題がある。高さと幅および建築物相互の隙間のバランスである。この場合は高さを一定に制限し、その範囲で揃えていくのとは違う難しさがある。いったい誰がそのバランスをイメージし、リードしていくのか。建築家か、都市計画家か、行政か。それぞれの建築主体が異なり、時期も異なる。しかもどこから見てそのバランスをチェックするというのであろうか。各地に現れつつある超高層ビル群のスカイラインのチェックは誰がしているのだろうか。実際的にはあるブロックを担当する建築家が既存および既知の将来計画を検討して取り組まざるを得ないだろう。大規模開発プロジェクトで計画やデザインを単独のチームで行える場合は、このような視点からの作業は比較的行いやすいと思われるが、そこまで気合いの入ったプロジェクトにあまり出合うことがないのはなぜだろう。

二つには屋根の形状である。従来の高層ビルの屋根には陸屋根のものが多かったようである。屋根を架けるよりももう一つの利用可能な床として考える方が土地利用上経済的であったのかもしれない。水平と垂直の2方向の構成要素だけで合理的な形態のデザインを試みることも近代建築の流れの中では当たり前のことであったのかも知れない。また、屋上を防災計画上、ヘリポート等に活用する事例も多く見られ、水平の屋根面で特異なシルエットを形成しようとしている。しかし、一方で最近は自治体等の定める景観形成のデザインコードの中でも勾配屋根を設けることを入れたものが多くなっている。たしかに勾配屋根の連なる斜めのラインが生み出すリズムは変化と統一感をもたらす。そのような統一感のある中に数少なく(多くなれば混乱してしまうので)、異なる形状・高さの屋根の建築物があれば、スカイラインとしても変化に富んだ特徴あるものになる。

三つには色、テスクチャー等の問題である。様々な光線を受けて、都市環境は多彩に彩られる。都市のスカイラインもそれを構成している部分の色やテスクチャー等の状況で多彩に表情を変える。これは前述の自然的要素からの影響が大きい。群としての建築はむしろ個々の主張を出来るだけ減衰させたところに新たな美が生み出されると思う。例えば雪の降り積もった景色を見て、日頃見ている印象と違った美しさを感じたり、夕暮れどきの街を見て、夕焼けに染まる天空を背景にしたスカイラインが一つのシルエットのように浮かび上がるのに叙情的な思いを抱いたりする。明るい日差しの中で、そのままのものが見えてしまう世界では、このような美の誘発効果を応用して、色やテスクチャー等についても禁欲的に整えていくことも一つの方法であるかもしれない。

四つには背景との関係がある。建築群のかたまりと対峙して景観の中で存在する背景について考慮する必要がある。もちろんほとんどが建築群であり、そのほかのものが視界の中に存在しないような場合もある。しかしこの場合でも天空は存在し、建築群を支える大地の状況は語れる。そして大きな要素として自然の山や海、川、湖等が存在する場合、建築もしくは建築群はそれらとの関係の中で捉えられる必要がある。その時にそれらと背景との関係で意識されるのがスカイラインである。背景として大きな自然を持つ場合は、その中で少々建築群等が暴れてみても飲み込まれてしまう。それは背景と建築群等とのボリューム関係にもよるが、相対的に大きな背景を有するスカイラインはのびやかで、文字どおり、絵になる景色を提供してくれる。

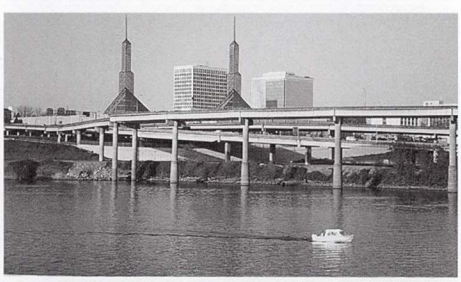
このような大きなスケールで語るときには、土木構築物が登場してくる。その代表的なものは、橋や高速道路等の高架構造物である。橋は川や海、谷といった自然地形のギャップを乗り越えるだけでなく、都市環境の中では空間の立体的利用の方法として多用される。とりわけ最近の臨海部等の都市開発では既存部との接続施設として



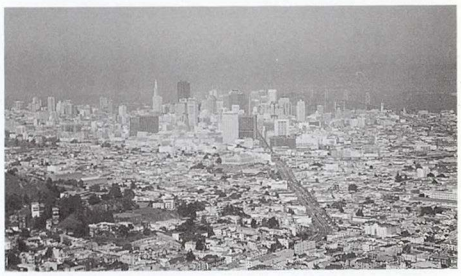
マルセイユ―海辺の古い建築が、港町・マルセイユのスカイラインを演出する―



ハイデルベルク―大学の街・ハイデルベルクは教会の塔が街のスカイラインをまとめる―



ポートランド―コンベンションセンターのツインタワーと高速道路がクロスした印象的なシルエット―



サンフランシスコ―斜面地に広がる住宅群と、都心の超高層ビル群の対比が印象的―

トンネルと同様に用いられる。その際周囲の景観の中で一際目立つエレメントとして機能し、形態やその色彩から大きなインパクトを与える。高速道路等の高架構造物も林立するビル群を水平に切るエレメントとして大きな存在である。スカイラインとしてはこれらのバランスで良くもなり、悪くもなるほどに影響力が大きいと言える。これらの土木構築物に関しても、今後は建築物と同様に都市環境デザインの視点から、スカイライン等へのかかわりを検討していかねばならない。

以上は比較的水平方向に背景を切っていくエレメントであったが、垂直方向に切るエレメントとして前述の超高層建築以外に塔建築の存在が絡んでくる。塔建築の歴史上、実在はしなかったが注目されるのは、バベルの塔の話である。人間の天空に限りなく上り詰めていこうとする意志とそれに対する神の存在、自然の尊厳等が象徴的に語られるこの塔の話には、都市創造に邁進する現代の人間たちにとっても興味深いものがある。塔状のエレメントは幾多の例としては宗教的、精神的場面に登場し、周囲に比してひときわ高く、聳えていくことにより、象徴的形態を誇ることが多い。スカイラインとしても垂直方向に視界にアクセントを与え、視覚的なバランスを意識させる。三重の塔や五重の塔といった伽藍配置における建築群の構成はまさにこのような形態と心理的作用の妙を伝統的に高めていった空間芸術の華であると言える。京都や奈良といった古都のスカイラインを見るときに浮かび上がるこの塔の姿は、時と空間をクロスオーバーさせる「歴史のシルエット」である。

スカイラインのディテール

全体として眺めてきたスカイラインでもそれをもう少し詳細に見てみると、個々の立場においてももっと考えていかねばならないテーマが浮かび上がってくる。

1）スカイラインへの個のかかわり

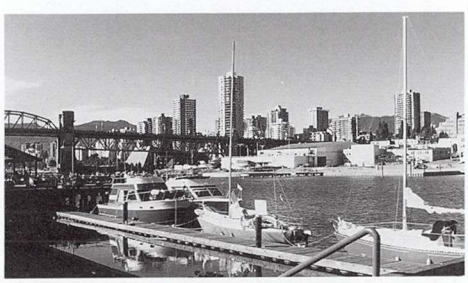
現状の都市におけるスカイラインがどういうものであるかの確認がまず必要であるが、様々な分析調査の中から景観構成の原理を求めたアプローチがなされつつある。コンピューターを用いた分析等は都市景観を構成している複雑な形態や多くの色彩情報に対し、数多くのシミュレーションを可能にし、今後その成果の活用が期待される。これからどのようなスカイラインへと発展していくかの予測は難しいが、少なくともどのようにしていくべきかの方向性の検討はなされるであろう。その際に全体の中の個々の建築物や土木構築物がどのようなかかわりを担っていくのかということが大切になってくる。まずはこれまでとは違って自己のテリトリーのみで勝負してきたデザイン展開から、全体を絶えず意識してことを進めていかざるを得なくなることへの変換が大きい。手法的にはこれでよいと言ったものはなくとも、全体への手掛かりとなるディテールへの検討が始まるわけである。個の表現と群の表現をどのように共生させられるかが大切な視点となる。

2）切断性のグレードからみたスカイラインの検討

背景との対比の中で、スカイラインを形成する部分の切断をどの程度の明確さ、あるいは曖昧さで処理するかの問題である。別の切り口を借りれば、シンプルに表現するのか、複雑に表現するのか、また軽くするのか、重くするのか、透明感のあるものにするのか、不透明でよいのかといった視点でもある。大きく引いて、全体を眺めると消滅する切断部分であっても、個々の切断部分としての表情がある。この部分は全体からみたデザインをそのまま相似形で表現していけるものではなく、スカイラインをどのようにどこから捉えるのかという立場からすれば、それぞれにおいて必要とされるデザイン展開が求められる。むしろ遠景から近景へ、近景から遠景へとシフトする中で、発見していくスカイラインのヒエラルキーを楽しみ、それぞれのレベルに応じた演出につながるディテールが求められよう。この視点から、切断部分の表現の性格づけには、個々の存在の主張と全体への融和という両面を考慮しなければならない。

3）昼夜のシルエットとしてのスカイライン

シルエットとしては、自然の太陽光線の下で見る世界と人工の照明光線によって見る世界がある。前者は昼間のスカイラインであり、後者は夜間のスカイラインである。昼間のスカイラインは自然的要素によって彩られるが、夜間の場合、月夜の明かり等の自然的要素



バンクーバー ―古い鉄橋と新しい高層ビルの対比が、ウォーターフロントのスカイラインを彩る―



シカゴ―シアーズタワーをはじめとする超高層ビル群が湖岸のスカイラインをつくる―



シアトル―坂道の多い港町に、新たに林立する超高層ビル群―

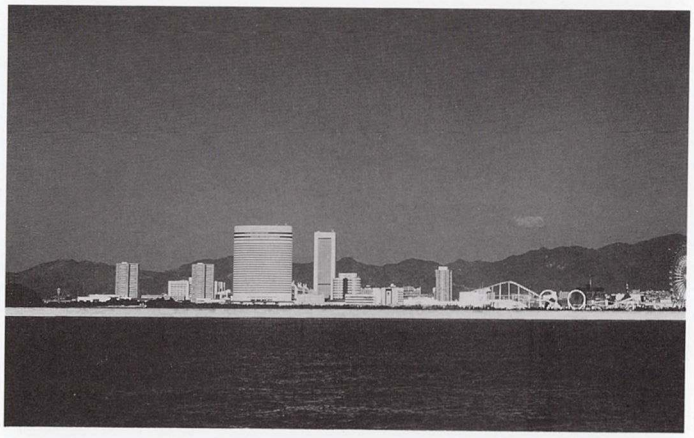
による部分もあるが、大部分は人工的要素によって演出される世界である。とくに照明技術の進歩によって、スカイラインの世界も大きく変貌したといっても過言ではない。建築群自体が放つ光とライトアップによるシルエットがもたらすメッセージは夜の都市環境デザインのキーワードである。建築以外の都市施設についても最近はライトアップされ、夜の都市のスカイラインを鮮やかに浮かび上がらせている。自然と人工の演出が織りなす光の世界から、僕たちは都市のスカイラインを昼夜のシルエットとして24時間享受することができる。

古来の伝統行事である京都の五山の送り火や奈良若草山の山焼きでは、古都のシルエットが、背景の光の輝きによって鮮やかに浮かび上がる。これも非日常的に見出すことのできる夜のスカイラインの演出の例であろう。

4）見える表現と見せない表現からのスカイライン

スカイラインをどこから見るかということに関して、見える、見せないという視点からの検討がある。とりわけわが国の都市環境においては、建築物の屋上部の扱いにおいて、欧米のスカイラインの形成状況を考え合わせた場合、際立って指摘すべきことがある。すなわち見せたくないもの、例えば設備機器類等を隠すという目的と、よく見える部分はおおいに利用していこうという目的が相まって、ペントハウス部分に巨大な広告・看板を取りつける建築物が多いことである。個人の所有する土地に建てた建築物の屋上部分をどのように使おうと勝手かもしれない。しかし都市のスカイラインという都市居住者にとって共有の財産・資源を守るという視点からすれば、そうはいかないという声が上がってきそうである。サインが複雑怪奇にひしめき合う都市内で、自分の目的とする建築物へ辿り着こうとする人には最小不可欠の施設名は必要かも知れないが、そういった公共性の視点をはるかに超えて、商業主義そのものが、都市景観の質やグレードを気にせずスカイラインの中で見せる表現がある。少し高い視点からこれらの建築群を見れば、あまりの無神経さに驚いてしまう。いかに地上付近を美しく飾ってみても、所詮この程度の文化意識ですよと自ら公言しているようだ。

また、エネルギー供給施設として公共性の高い電柱については、都市景観上の視点からその存在を否定する意見がある。しかし現実的には、メンテナンスや経済性からそれに代わるシステムへの変換はそれほどなされてはいない。比較的低層の都市環境の中では、スカイラインの中でこの電柱の存在は大きい。しかしながらこの〝見せたくない〟電柱に一定の基準があると言いながらも、使用料をとって〝見せる〟広告を取りつけ、公道上を占用していることは、はなはだ疑問とするところである。



海から見た神戸ポートアイランドのスカイライン

見えることと見せないことの意味を、公共空間の質をいかに高めていくかの視点で、もう一度考え直してみる必要がありそうだ。

5）スカイラインの連続性と不連続性

スカイラインは絶えず変化しつつも、その場に一つの認知される連続性を生み出す。しかし既存の強い環境が依然として強く作用する場合は、その間に不連続な部分を生じてしまう。アメリカのダウンタウンのスカイラインでは、この対比が極めてはっきりと意識される。それはそれなりに特徴のあるスカイラインを形成しているわけである。ニュータウンの計画では高層住宅と低層住宅の配置において、センター地区から、段階的に高層から低層へとつなぐ考え方が普通であるが、都市のスカイラインの形成の視点からはインフラ部分の道路等のオープンスペースとのバランスから検討していくことが必要である。バブル期において、より高密度に戸数を確保しようとして、この連続性の重要さを忘れて計画を進め、周囲の住民からの猛反対を浴びているプロジェクトもあった。これは形態的な意味における連続性だけではなく、地域コミュニティとしての連続性も忘れてはならないということで、これらの良き関係があってはじめて居住地としての良きスカイラインが出来るのであろう。

おわりに　スカイラインが、都市環境の中でどのように生み出され、どのように受け入れられているかを眺めてきた。より良い都市景観をその都市や地域のアイデンティティを示すシンボルとして活かす上でも、スカイラインから考えていくことで、様々な視点が役立つようである。あるべきスカイラインの状況は一律には語りがたいものの、これからの都市・地域の環境整備の中でお互いに認識していく基本的な姿勢を大切にしてゆきたいものである。

僕が小さいとき、まだ都市や建築とは何の関係もなかった頃であったが、神戸の街を六甲や摩耶の山から、あるいは神戸港の防波堤（今のポートアイランドあたり）で魚釣りをしながら山麓にひろがる市街地の風景をぼーと見ていたことを思い出す。そのスカイラインと今のスカイラインがどう違っているのかはっきりしない。しかし、はるか遠くに広がるスカイラインの向こうにはどんな街があって、どんな人が住んでいるのだろうか。子供心に気になった未知の世界と現実の世界の仕切りを飾ったカーテンだった、そのスカイラインが今また気になっている。

（たなか　なおと　神戸芸術工科大学助教授）

構造の頁　217

アンボンドブレースを使用したビルの構造設計

小林　直紀　こばやし　なおき
㈱東畑建築事務所東京事務所構造部長

大阪の中心である中之島と土佐堀通りにはさまれた敷地に平成２年８月から工事着手し、平成４年９月に完成した。本建物は損害保険会社の近畿圏の本部ビルとして計画され、地上部は事務室、地下部は駐車場、機械室の構成になっており、耐震要素として新日鐵のアンボンドブレース（鋼管コンクリート拘束ブレース）を使用している。

高層部の構造設計

耐震要素に、Ｘ方向は外周に柱を約３ｍ間隔に配置した純ラーメン架構とし、Ｙ方向は両側コア一部分にアンボンドブレースをバランスよく配置したブレース付きラーメン架構としている。

１．耐震設計

１）耐震設計の目標

レベル１……地震動（20cm/s）に対する応答はすべての部材が弾性範囲内とし、最大層間変形角が1/200を超えないよう剛性を保有させる。

レベル２……地震動（40cm/s）に対する応答は最大層間変形角が1/100以下、最大塑性率2.0以下になるようにする。

２）設計用地震力

地震動20cm/sレベルの予備応答解析結果を参考にして、Ｘ、Ｙ両方向とも１階位置で$Co=0.14$としたAi分布形を採用した。

３）振動解析の概要

EL.CENTRO NS, TAFT EW, OSAKA 205 EWの３地震波に対する振動解析の結果、レベル１、レベル２は耐震設計の目標値を満足している。

２．アンボンドブレース（一般認定取得）の採用理由

アンボンドブレースは、芯ブレースに帯板を使用し、座屈拘束のため、鋼管コンクリートで保護されている。

本建物に対して三つの利点から採用を決定した。

１）建物の剛性調整

Ｈ形断面または箱型ブレースでは、細長比の制限で最小断面が決定され、建物の剛性を低くすることに対して、ブレースによる剛性調整に制限を受ける。この点でアンボンドブレースは帯板の断面で調整が可能である。

振動解析結果から建物の固有周期を長くすることにより、地震入力を小さく抑えることができた。

２）ブレースの安定した復元力特性

図２に見られるように、弾性座屈は当然のこと、塑性座屈の兆候も全く見られず、安定した復元力特性を保有している。

３）ブレース接合部の単純さ

ブレースが柱または梁に取り付くディテールについて、**図３**は一般的なＨ形断面ブレースを示し、**図４**はアンボンドブレースを示す。

アンボンドブレースの接合部は極めて単純であり、この点で力の伝達メカニズムが明確である。また接合部製作上でも、単純で製作しやすいことによって、高品質のブレースが得られると考える。

興亜火災近畿営業本部ビル
設計監理　東畑建築事務所
施　　工　大林組、清水建設、大成建設ＪＶ
■規模
建築面積　　736㎡
延床面積　13,216㎡
階　　数　地上18階、地下２階
軒　　高　76.6m
基礎深さ　ＧＬ-14.3m
■構造
構造種別　地上Ｓ造、地下ＳＲＣ造
架構形式　Ｘ方向　純ラーメン構造
　　Ｙ方向　アンボンドブレースを有するラーメン構造
主要部材　柱　　組立箱形断面
　　梁　　組立Ｈ形断面
　　ブレース　帯板
　　接合部　柱梁　工場接合　溶接
　　現場接合　溶接
　　ブレース　高力ボルト摩擦接合
基礎構造　ＧＬ-33ｍの天満層（砂レキ）を支持層とする拡底アースドリル場所打コンクリート杭

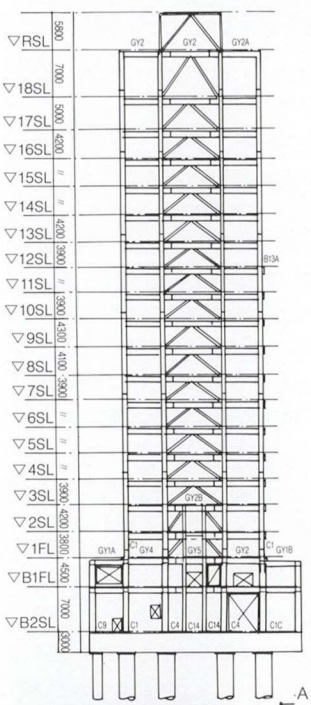


図１
軸組図



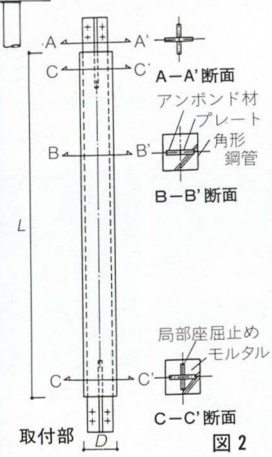
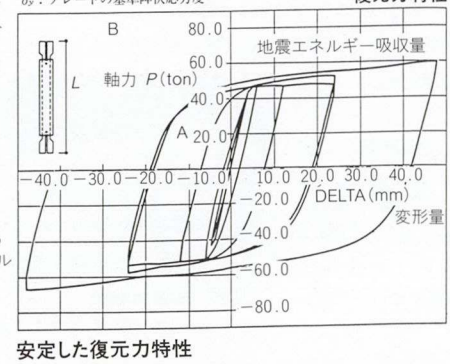


図２　安定した復元力特性

アンボンドプレートの設計
$N_A \geqq N_K$
ブレースの許容耐力(t)
$N_A=A_P \cdot ft$
ブレースの降伏荷重(t)
$N_U=A_P \cdot \sigma_y$
N_K：設計用軸力(t)
A_P：プレートの軸断面積(cm²)
ft：プレートの許容引張応力度(t/cm²)
σ_y：プレートの基準降伏応力度

鋼管の設計
$f_c \geqq N_U/A_K$
$f_c=\dfrac{0.277F}{(\lambda/\Lambda)^2}$　$\Lambda=\sqrt{\dfrac{\pi^2 E}{0.6F}}$
f_c：鋼管の許容圧縮応力度(t/cm²)
λ：鋼管の細長比　$\Lambda=Q/i$
A_K：鋼管の断面積(cm²)

アンボンドブレースの復元力特性



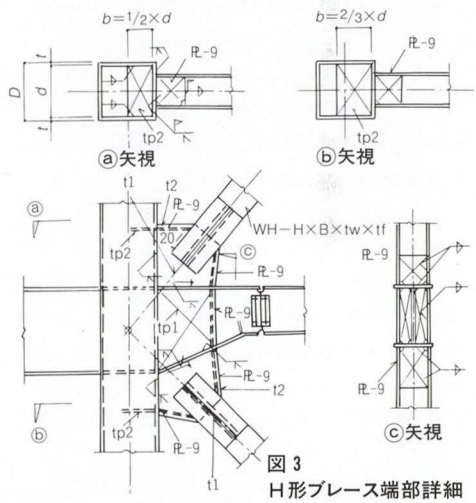


図３
Ｈ形ブレース端部詳細

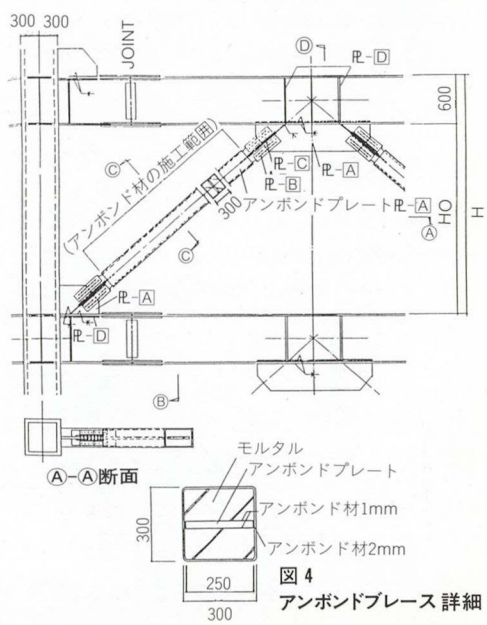


図４
アンボンドブレース 詳細

設備の頁　217

高効率Hf照明システム

小平　眞二　こだいら　しんじ
東芝ライテック㈱照明電材部照明器具技術担当

近年、オフィスや店舗での快適な視環境の実現、高年齢化社会への対応などのため、ますます高品位で高照度な照明が求められている。また、時代の流れとして省資源、省エネルギーの要求も強い。さらに、昨今の人手不足は建築・電気工事業界でも深刻な問題となっており、工事が容易で短時間に施工できる照明器具も強く求められている。

このようなニーズに応えるため、高効率・高演色の特長を持つ高周波点灯専用形（以下Hf）蛍光ランプ「メロウライン$_{TM}$」およびHfランプ専用（以下Hf）インバータ、そしてHfランプとHfインバータを組み込み高効率な超薄型Hf照明器具「メロウライン$_{TM}$照明器具」を開発した。

Hf蛍光ランプとHfインバータ

蛍光ランプを高周波点灯（インバータ点灯）することにより、ランプ発光効率向上・回路損失の低減等のメリットを得られることはすでに知られている。この特長をさらに活かすために、高周波点灯専用ランプと専用インバータの開発を行った。

その結果、ランプ管径を従来ランプ（ϕ32mm）よりも細く高周波点灯時に最も効率のよいϕ25.5mmとした。また蛍光体には明るく、物が美しく見える3波長形希土類蛍光体を用いている。さらに高入力（高管壁負荷）による光束維持率低下を防止するためバルブ内面に保護膜を設け、ランプ寿命を12,000時間とした。

次にHfインバータの開発にあたっては、従来インバータよりも薄形化を図った。そのため、インバータ回路は自励式ハーフブリッジ回路を採用し、負荷回路は2灯並列の1次2次直結形とした。このことは、比較的始動電圧の高いHf蛍光ランプを低い電圧で始動させることができる点でも、有利である。また18mm以下の電子部品、特にその中でも薄形巻線部品および自動実装対応可能なコンデンサを新規開発し、面実装化により、Hfインバータの高さ25mmを実現している。

メロウライン超薄形照明器具

高効率でスリムなHf蛍光ランプとHfインバータを搭載したHf照明器具は、次の特長を持つ。

（1）高効率、高照度、省エネルギー

Hf蛍光ランプとHfインバータにより、Hfランプ2灯用器具で従来蛍光灯3灯（FLR40.S.W）用器具と同じ明るさ（器具内ランプ光束9000lm）を消費電力20%削減（鉄心形安定器器具に対して）して得ることができる。

これにより従来2灯（FLR40.S.W）用器具が使用されている場所では、設計照度が同一であれば器具台数が減らせ、施工が容易になり、ランプ交換等の保守の面でも有利な点となっている。また照度アップの場合や、下面にOAルーバやカバー付器具を使用する場合、照度低下を補え、器具台数を増やさずに、対応が可能となる。

（2）埋込器具の省施工化

施工性向上のため、器具設計時に一般天井の構造に注目し、器具の高さ寸法を検討した。一般天井（捨て張り工法）は**図1**に示すようにCチャンネルの下に、Mバー（h=19mm）と2層の天井材（下地ボードおよび化粧ボードh=21mm）から成り、化粧ボードの下面からCチャンネルの下端までの高さは40mmある。従来の照明器具では埋込高さが低いもので約90mmあり、器具施工時には上部のCチャンネルを切断し、さらに切断したCチャンネル間に補強金具を取り付ける必要があった。

Hf照明器具の「ニューソフトライトM$_{TM}$（FR-42770等）」では、ランプの細形化、インバータの薄形化のほか、新規に小型回転式ソケットの採用等により、器具の薄形化を図り、器具埋込高さを37mmとして、Cチャンネルの切断工事を不要となるよう設計を行った。このほか、1枚張り天井の場合には埋込高さ25mmの下面開放器具（FR-42840）を商品化している。

（3）スリムな器具デザイン

器具の薄形化により、直付器具（FT-42770等）でも器具高さが50mmと、従来タイプ器具（h=98mm）の1/2となり、天井からの突出感が小さくなっている。器具幅も従来の2/3（220mm）とスリムになった。「ニューソフトライトM$_{TM}$」直付形の外観を**図2**に示す。

（4）軽量化、省資源、省スペース

Hf照明器具では、器具重量が従来器具の2/3と軽量であり、搬送時の負担を低減した。さらに容積では1/3となっており、在庫スペースの削減と合わせ、使用材料や梱包材を大幅に削減し、省資源に貢献している。

（5）「ニューシステムアップ$_{TM}$」照明器具

照明器具の高付加価値化として、設置後の器具変更の要求に対し、フレキシブルに対応できる「ニューシステムアップ$_{TM}$」（FR-42870）がある。これは下面開放器具を基本灯体にし、反射板の位置を上方へ移動することで、下面に種々のアクセサリーを後付けできる。アクセサリーはVDTへの映り込みを防止するOA用ルーバのほか、乳白カバー等、10種類を揃えている。OAルーバ付器具の外観を**図3**に示す。

（6）一般器具と同形状の電池内蔵非常灯

電池内蔵非常灯についても、細形点灯ユニットを新規に開発し、一般灯と同一形状とした。

また、25%～100%連続調光器具も、同一デザインで商品化している。

Hf照明器具による税制上のメリット

平成4年10月より、Hf照明器具は照明制御装置との組み合わせで、エネ革税制（エネルギー需要構造改革投資促進税制）の対象となっており、施主は税制上の優遇措置を受けられる。ここでいう照明制御装置とは、時間や太陽光検知等に応じ自動的に照明器具をON/OFFまたは調光制御できるもので、Hf照明器具との組み合わせで、従来器具に対し30%以上の省エネルギー効果が得られることが条件になっている。Hf照明器具のみで約20%の省エネルギー効果があり、照明制御装置により昼休み時間の消灯や、昼間および就業時間後の減光等により容易に達成できる。

おわりに

高効率なHf照明器具は、省エネルギー、高照度の要求に応えられる照明器具として照明業界全体で推進しており、公共施設用照明器具標準（現在の官電協が平成5年度より改正される）にも採用され、これから需要が大きく伸びるものと予想される。これに合わせ今後、現在のFL20Wサイズや新規の1.5mサイズのランプ、器具展開も予定されており、一部商品化されている。

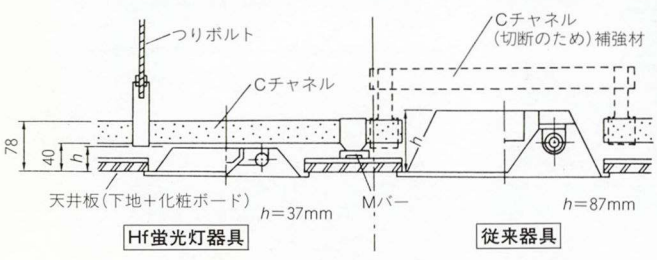


図1　埋込器具の施工状態

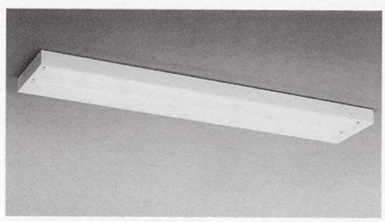


図2　Hf照明器具
ニューソフトライトM直付形

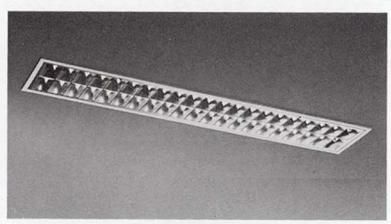


図3　Hf照明器具
ニューシステムアップ
OAルーバー付

施工材料の頁　186

ハーフPC耐力壁

佐藤真一郎　さとう　しんいちろう
日本カイザー㈱技術部技術課長

概　要

従来、鉄筋トラスを薄肉のコンクリート板内に一部埋め込んで製造するプレキャスト板は、床板の一部に使用され現場作業の省力化や工期の短縮に多大な貢献をしてきた。しかしながら建設現場での型枠大工、鉄筋工、左官工やタイル工等の職人の確保は依然困難である。また天然資源の保護のために木製型枠を出来る限り用いない傾向がある。このような要望を満たす工法として、鉄筋トラス入りの薄肉PC板を壁板にも用いる方法が近年建設現場に多く採用されている。一般にこの工法を壁板に用いた場合、PCF工法と呼んでいるが、更にPC板を一部構造体として見込んで耐力壁として用いる壁板をハーフPC耐力壁と呼ぶことにする。本工法の工法概念図を図1に、断面形状を図2に示す。

特　長

ハーフPC耐力壁の特長を以下に示す。

① 壁板の一部をPC化して型枠と兼用しているので、現場における型枠工事を省力化出来る。
② 耐力壁の補強筋の約半数はPC板の中に配筋されるので、配筋作業が少なくなる。
③ 外壁面の仕上げを工場で行なうことにより、現場における仕上げ工事が省略出来ると共に、PC板間の目地部処理を工夫することで、外部足場を省略することが出来る。
④ 外壁面を仕上げ込みで工場にてPC化することで、収縮ひびわれの発生が減少し、建物外観の品質向上を図ることが可能となる。
⑤ 外部足場を省略することにより、敷地を最大限に利用することが可能で、かつ工事中の安全性の向上が図りやすい。
⑥ 施工期間の短縮が図れる。

設計方法

ハーフPC耐力壁としては、現在までに2工法が㈶日本建築センターの「一般評定」または「一般評価」を取得しており、「一般評価」を取得している工法（カイザー耐力壁設計・製造・施工要項）については、床板の場合と同様に確認申請のみで使用可能である。2つの工法には多少差異があるがここでは主に前述の要項に従って説明する。

対象とする建物の高さは60m以下であり、構造はRC造、SRC造のラーメン構造内の壁で、壁式構造や中高層壁式ラーメン構造の壁は対象としていない。また建物の地上部分の壁及び地下壁に設けることが出来る。図3に使用例を示す。

カイザー耐力壁に用いるコンクリートの種類は普通コンクリート及び第一種軽量コンクリートとし、場所打ちコンクリートはカイザー板と同種類のコンクリートとする。

カイザー耐力壁の有効厚さは、ハーフPC板の厚さと場所打ちコンクリート部分の厚さの合計より2cmを差し引いた値とする。また有効厚さを確保するためにハーフPC板の端部は図4に示すような形状とした。また目地処理（シール処理）に伴い、ガスケットを設ける場合増し打ち部を多く設け、ガスケットが有効厚さの中に入り込まない形状とする。

カイザー耐力壁のせん断補強筋比は

(a) 場所打ちコンクリート部分のせん断補強筋
(b) ハーフPC板相互の接合部の重ね筋
(c) ハーフPC板内のせん断補強筋

のうち(a)及び(b)の鉄筋量の和、あるいは(a)及び(c)の鉄筋量の和のうち、小さい方を有効厚さで除した値とする。

カイザー耐力壁の水平せん断剛性は、有効厚さと同一の厚さを持つ一体打ち耐力壁と同じであり、耐震設計の1次設計で用いるカイザー耐力壁の許容せん断力は、建築学会RC規準及びSRC規準に示された式に、また2次設計時の保有水平耐力算定に用いるカイザー耐力壁のせん断強度は建築センター指針に示された式に、有効厚さとせん断補強筋比を用いて算定出来る。

製　造

ハーフPC板の製造は固定工場と現場工場で製造出来る。固定工場は要項による社内規格を満たし、選定された工場で、またJISの表示許可工場、プレハブ建築協会のPC部材品質認定工場等の資格をもつ工場とする。現場工場とは主に工事現場に設置する工場を指すが、現場工場の管理者は、施工者または日本カイザー㈱が行うこととし、品質管理責任者を置く必要がある。

施　工

カイザー耐力壁の施工には、通常ハーフPC板の重量が1～4 TON程度あるので、クレーンが必要となる。また取付用のファスナーやレベル調整用ボルトを用いて梁に取付けてゆくので構造体としてはSRC造が最適である。RC造にも施工することは可能であるがハーフPC板を支持する方法を考える必要がある。

以上ハーフPC耐力壁のおおまかな説明を行なったが、詳細については各工法を所有しているメーカーの要項を参照して下さい。

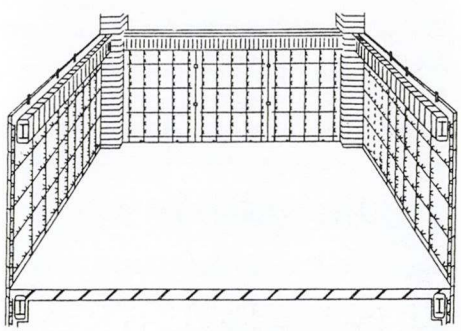


図1　カイザー耐力壁の構法概念図

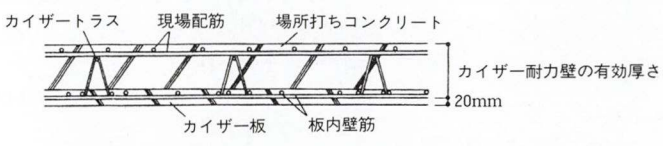


図2　カイザー耐力壁の断面形状

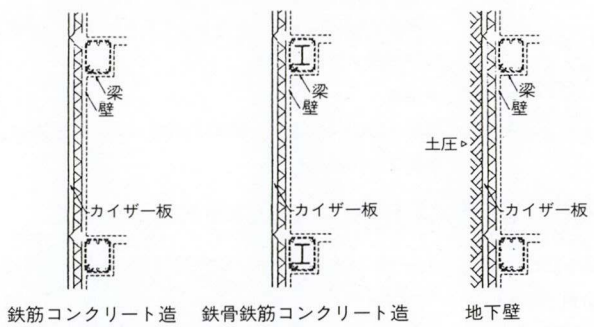


図3　カイザー耐力壁の使用例

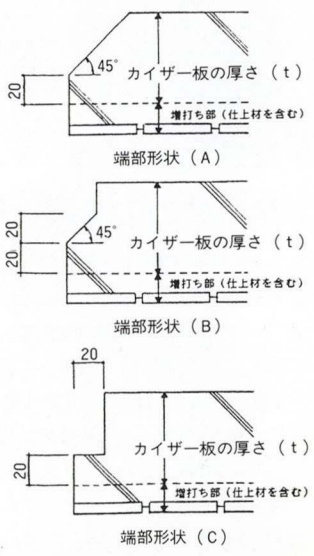


図4　カイザー板の端部形状

「大阪市ハウジングデザイン賞」

大阪市は、平成5年度の「大阪市ハウジングデザイン賞」の推薦を6月30日まで受け付けている。

昭和63年4月1日～平成5年5月31日に完成した民間の集合住宅で、外観デザイン、配置計画、住戸計画などの設計面や構造面、設備面、管理面等の総合的な角度から優れたものを表彰するもので、昭和62年度から毎年実施している。

推薦された民間集合住宅を審査委員会（足立孝、東孝光、高橋叡子、巽和夫、徳矢典子、永井陳男、宮井市太郎、三輪雅久、山下英次の9氏）で選考し、数点のハウジングデザイン賞（特に優れたものは大賞）が贈られる。

推薦はハガキに、民間の集合住宅名とその所在地、推薦者の住所・氏名を書いて、大阪市都市整備局計画開発部指導助成課（〒530　大阪市北区中之島1-3-20　TEL06-208-9225）へ送付すること。

選考結果の発表は平成5年11月頃の予定。

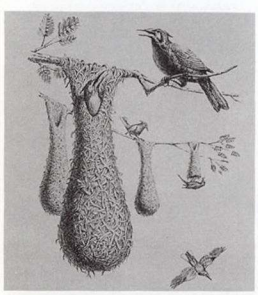
「生きものたちも建築家展」

鳥や生きものたちの巣や構造物に、人間の建築という営為へのヒントを見いだせないか…、会場には、鳥の巣の構造をわかりやすく描いた三品隆司さん描き下ろしのイラスト26点と、ツリスガラやサイホウチョウなどの巣の実物約20点が展示されている。

入場無料。

会　期　1993年 **6** 月 **10** 日(木)～ **8** 月 **29** 日(日)
10：00～18：00　8月12～16日は休館日

会　場　INAX 大阪ショールーム2F
（大阪市西区新町1-7-1　TEL06-532-1956）



オオツリスドリ
草の繊維をあんで上部に入口のある吊り巣をつくる。底が深いので外敵が侵入しずらい。

国際デザイン・コンベンション'93 ―7月に大阪と名古屋で開催―

㈶国際デザイン交流協会（会長：大西文夫氏）は、大阪、続いて名古屋で「国際デザイン・コンベンション'93」を開催する。

■大阪会場―デザインの新潮流―

日時　1993年 **7** 月 **29** 日(木)　13：00～17：20

場所　大阪国際交流センター（大阪市天王寺区上本町8-2-6　TEL06-772-5931）

内容　●「世界デザインの新しい方向―私とデザイン」
講師：A．コルテージ氏（インダストリアルD．イタリア）、上田篤氏（建築家）、F．ジャンティ氏（グラフィックD．フランス）、喜多俊之氏（インテリアD．）、R．リニントン氏（インテリアD．イギリス）
●パネルディスカッション「第6回国際デザイン・コンペティション」
（「風」をテーマとしたコンペ入賞作品のスライド、作品に見られる創造性、提案性の解説）
コーディネータ：喜多氏、パネリスト：上田、コルテージ、ジャンティ、リニントン各氏

会費　一般4000円、学生2000円

定員　200名

申込　㈶国際デザイン交流協会事業第2部（TEL06-346-2611）へ申込方法を問い合わせられたい。

■名古屋会場―名古屋からの発信を目指して―

日時　1993年 **7** 月 **30** 日(金)　13：30～19：30

場所　ホテルキャッスルプラザ（名古屋市中村区名駅4-3-25　TEL052-582-2121）

内容　13：30～17：50≪デザイン・トーク≫
A．コルテージ氏に聞く（聞き手:佐藤和子氏）
F．ジャンティ氏に聞く（聞き手:麹谷宏氏）
R．リニントン氏に聞く（聞き手:長岡貞夫氏）
トータルコーディネータ：木村一男氏
18：00～20：30≪トーク＆ドリンク≫

会費　≪デザイン・トーク≫一般6000円、学生半額
≪トーク＆ドリンク≫4000円

定員　150名

申込　㈶国際デザイン交流協会（TEL06-346-2611）

第3回 BUFF 国際建築デザインコンペ『東京待ち会い空間』

第5回建築仕上フォーラム（BUILDING　FINISHING FORUM）は12月8日(水)～11日(木)に千葉の幕張メッセで開催されるが、このフォーラムの一環として、アーキテクトの発掘と育成を目的とするコンペが行われる。今回の課題は『東京待ち会い空間』。東京において人を待ち、人と会う、待ち会いの場としてふさわしい空間とはどのようなものか、どのような所にどのような待ち会い空間を設けたいのか、自由で創意にあふれる応募作品を募っている。

●応募資格　不問

●応募締切

1993年9月30日(木)必着。ただし持参は不可。

●提出図面および表現方法

応募者の意図を伝達できるものであれば自由。説明文は日本語か英語に限る。

●用紙

厚紙（600×840ミリ、紙質は自由）1枚に図面および説明文をまとめる。

●提出方法

応募作品の裏面に住所・氏名（ふりがな）・年齢・電話および勤務先名・役職・所在地・電話を明記した紙を貼付して郵送。

●提出先

1993建築仕上フォーラム運営委員会内第3回 BUFF 国際建築デザインコンペ係（〒111 東京台東区小島1-4-8-201　TEL03-3865-8999）

●審査員

池田武邦（日本設計）、伊東敏雄（山下設計）、長谷川逸子（長谷川逸子建築計画工房）、押野見邦英（鹿島）、只野康夫（日建設計）の各氏。

●賞金

最優秀賞1点200万円、優秀賞1点50万円、佳作5点以上各10万円

●発表

審査結果は入選者に直接通知。『建築雑誌』1994年2月号に発表。1993建築仕上フォーラム展示会場で展示。

屋久島での山行記『やくのやまんば』 ―竹中工務店設計部員が自費出版―

昨年7月、竹中工務店設計部6人が屋久島を訪れたときの感動を一冊の本にまとめ、このたび自費出版をした。『やくのやまんば』（毛利喆夫著、1500円）では、"やまんば"の挑戦かと思われるほどの悪天候やトラブルに悪戦苦闘した様子や、自然の偉大さへの感動が、写真やイラストを交えながら描かれている。

なお、この本の売上金の一部は屋久島環境文化財団の環境保護運動に寄付する予定という。

『やくのやまんば』購入については、竹中工務店設計部情報課（06-252-1201）へお問い合わせ願いたい。

「――屋久の島影は次第に大きく、はっきり見えてくる。しかし中央部の山岳は厚い雲に隠れたままだ。ところがどうしたことか。見る見るうちに雲が動き山影が現れた。（中略）我々を招いているのか、それとも誘き寄せているのか、全身が硬直する自分を感じた。――」
（本文より）



パリ国際建築材料見本市

建築資材の分野では世界最大の見本市、BATIMAT '93が、パリで1993年11月に開催される。

19回目を迎える今回の見本市の、ヴェルサイユ会場では建設材料を、パリノール会場では空調やサニタリー製品が展示される。問い合わせはフランス見本市協会日本事務所（TEL 03-3405-0171）へ。

会期　1993年 **11** 月 **9** 日～ **14** 日

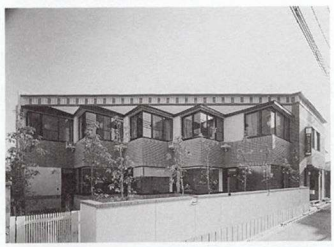
会場　ポルト・ド・ヴェルサイユ見本市会場、およびパリノール見本市会場

主催　BATIMAT BLENHEIM

第２回病院建築賞

平成元年４月１日～平成３年３月末までに開院または使用開始をした病院・診療所・福祉施設を対象に、㈳日本病院建築協会は第２回病院建築賞を選考し、受賞結果を発表した。

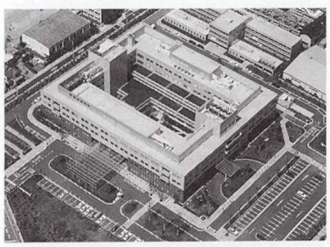
全国から応募があった23作品（病院18点、診療所４点、福祉施設１点）を、選考委員（栗原嘉一郎、今田寛睦、岡田新一、河口豊、上林三郎、佐々木群、三宅史郎の７氏）が書類選考、現地視察を経て選出したのは６点。



神野レディスクリニック
病床数　10 床
竣　工　1990 年８月
開　設　神野佳樹
設　計　㈱西井建築事務所
施　工　㈱土屋組



北九州市立医療センター
病床数　522 床
竣　工　1990 年３月
開　設　北九州市
設　計　㈱浦辺設計
施　工　戸田・日本国土・五洋・大同・瀬口・川口共同企業体



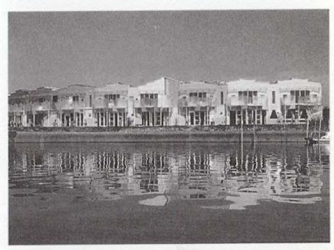
財団法人**東京都保健医療公社東部地域病院**
病床数　306 床
竣　工　1990 年７月
開　設　財団法人東京都保健医療公社
設　計　東京都財務局営繕部
㈱伊藤喜三郎建築研究所
施　工　清水・大日本・村本・徳倉建設共同企業体



公立松任石川中央病院
病床数　285 床
竣　工　1989 年２月
開　設　松任石川中央医療施設組合
設　計　㈱共同建築設計事務所
施　工　清水建設・真柄建設・古野建設共同企業体



明石市立市民病院
病床数　408 床
竣　工　1990 年３月
開　設　明石市
設　計　㈱山下設計
施　工　大林・新井・関西建設ＪＶ



不知火病院ストレスケアセンター海の病棟
病床数　38 床
竣　工　1989 年11月
開　設　医療法人新光会
設　計　長谷川逸子・建築計画工房㈱
施　工　安藤建設㈱九州支店

第２回 BELCA 賞

㈳建築・設備維持保全推進協会は BELCA 賞に、ロングライフ・ビルディング（LLB）部門６作品、ベストリフォーム・ビルディング（BRB）部門４作品を選んだ。

LLB 部門は築後20年以上を経過したもので、作品および内部環境が特に優秀な建築物を対象とし、BRB 部門は改修後１年以上を経過した建築物で、この改修により画期的な活性化を図った特に優秀なものを対象としている。

選考は審査委員会（委員長：芦原義信、LLB 専門部会主査：三井所清典、BRB 専門部会主査：守屋秀夫）の書類と現地調査の２段階審査によった。



LLB 部門　**国立京都国際会館**
竣工／1966年
設計／大谷研究室　施工／大成建設



LLB 部門　**日本生命日比谷ビル**
竣工／1963年　設計／村野・森建築事務所
施工／大林組、三機工業



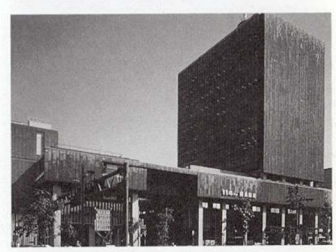
BRB 部門　**小平記念東京日立病院**
竣工／1960年　改修／1990年　設計／日立建設
設計　施工／日立プラント建設、鹿島建設



BRB 部門　**ホテルナゴヤキャッスル**
竣工／1969年　改修／1988年
設計施工／竹中工務店



LLB 部門　**東京証券会館**
竣工／1966年
設計／三菱地所　施工／大成建設



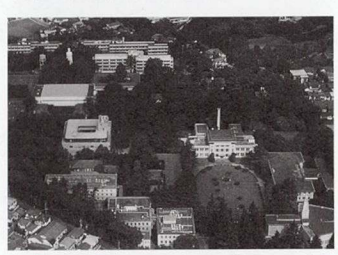
LLB 部門　**百十四ビル**
竣工／1966年
設計／日建設計　施工／竹中工務店



BRB 部門　**函館ヒストリープラザ**
竣工／明治時代末期　改修／1989年
設計／北海道岡田新一設計事務所　施工／清水建設



BRB 部門　**ROKKO 23**
竣工／1890年　改修／1991年
設計施工／竹中工務店



LLB 部門　**東京女子大学善福寺キャンパス**
竣工／1931年、1938年
設計／アントニン・レーモンド　施工／清水建設



LLB 部門　**ホテルオークラ本館**
竣工／1962年　設計／ホテルオークラ設計委員会、大成観光、大成建設　施工／大成建設

日本建築協会

月間の動き

【平成5年4月分】

理事会

第1回定例理事会
28日・4時～4時55分・於本会会議室
出席者　佐野会長ほか29名
議　事　(1)定時評議員会議決事項報告の件
(2)役員の会務分掌・常任理事18名選任の件
(3)定時評議員会、通常総会、定例理事会、常任理事会開催日時決定の件
(4)前年度よりの引き継ぎ事項承認の件
(5)平成5年度委員会委員委嘱の件
(6)第3回日本建築協会賞入賞者決定の件
(7)後援及び協賛名義使用の件
(8)入退会者承認の件
(9)報告事項、その他

編集委員会

第1回作品作風小委員会
1日・6時半～8時・於本会会議室
出席者　前川副委員長代行ほか5名
議　事　(1)小委員会担当委員長（編集副委員長）並びに同代行の選出
(2)本年度の小委員会活動について
(3)作品の掲載予定の報告
(4)作品の選定
(5)「Gallery」掲載報告・予定
(6)「SKETCH BOOK 欄」の作品構成
「大阪市都市整備局」（仮称）特集第2回編集会議
6日・2時～4時・於大阪市都市整備局会議室
出席者　黒田純司、田宮和實、中村孝一、岩倉邦彦、佐々木晴子、菊川みゆき各特別幹事
議　事　8月号予定「大阪市都市整備局」（仮称）特集
第1回会員企画小委員会
6日・6時半～9時・於本会会議室
出席者　高橋副委員長ほか2名
議　事　(1)小委員会担当委員長（編集副委員長）並びに同代行の選出
(2)シリーズものの報告と掲載予定
(3)新企画「フロントサイト」について
第1回設備分科会
7日・6時～9時・於本会会議室
出席者　梶井幹事ほか5名
議　事　(1)新年度設備分科会幹事の内定
(2)単行本「設備知識」（仮称）の件
(3)4月号「劇場の設備」特集の経過報告
(4)「設備の頁」の企画
(5)次の設備特集の企画
第1回計画系―インテリア・住宅―分科会
8日・6時半～9時半・於本会会議室
出席者　福田幹事ほか7名
議　事　7月号予定特集案検討
第1回施工材料分科会
13日・4時～6時・於本会会議室
出席者　植田幹事ほか3名
議　事　平成5年度幹事選任、志水史典氏に
新旧合同編集委員会総会・第1回委員会
20日・委員会4時～6時半・於本会会議室
出席者　荒井編集委員長ほか21名
議　事　(1)編集委員長の選出と挨拶
(2)各小委員会副委員長・各分科会幹事の選出と各委員の挨拶
第1回計画分科会―建築系―
21日・7時～9時半・於本会会議室
出席者　佐藤幹事代行ほか8名
議　事　平成5年9月号特集の検討
第1回構造分科会
22日・6時～9時15分・於本会会議室
出席者　二宮幹事ほか5名
議　事　(1)8月号「建築の再生」特集の企画
(2)「構造の頁」の企画
第1回法令分科会
23日・2時～4時・於本会会議室
出席者　生駒委員ほか4名
議　事　(1)委員の交代
(2)新年度法令分科会幹事の互選
(3)「法令コーナー」の企画
(4)法令特集の企画
第1回広告企画小委員会
27日・4時～5時半・於本会会議室
出席者　荒井委員長ほか5名
議　事　収支状況報告

事業委員会

新旧委員合同若い会員の集い小委員会
6日・6時半～10時半・於ビッグステップ・JRC
出席者　杉本副委員長ほか14名
ゲスト　西村章氏（環境開発研究所）
議　事　(1)新旧委員全員の自己紹介
(2)新年度の副委員長・幹事の互選
(3)前回事業委員会の報告
(4)今後の企画について
(5)事業委員懇親会について
(6)次回の委員の時間
(7)西村章氏を囲んで質問会
第1回広報小委員会
7日・6時半～8時10分・於本会会議室
出席者　原見副委員長ほか13名
議　事　(1)平成5年度の副委員長・幹事の互選
(2)前回事業委員会の報告
(3)第1分科会からの報告と検討
(4)第2分科会からの報告と検討
(5)事業委員懇親会について
第1回見学会小委員会
8日・6時～8時50分・於本会会議室
出席者　南副委員長ほか6名
議　事　(1)平成5年度の副委員長・幹事の互選
(2)前回事業委員会の報告
(3)実施報告
(4)今後の予定、候補
(5)事業委員懇親会について
第1回事業委員会
21日・4時～5時20分・於本会会議室
出席者　多井委員長ほか6名
議　事　(1)各小委員会からの報告と検討
(2)事業委員懇親川島織物見学会について

出版委員会

第1回出版委員会
15日・5時～6時・於本会会議室
出席者　須賀委員長ほか10名
議　事　(1)平成5年度委員長、副委員長の選出
(2)〈プロのノウハウ〉と特装本の経過報告
(3)「プロのノウハウ」講座シリーズ
第3回,「水にまつわるトラブルの事例・解決策〈設備編〉」小委員会
22日・3時～6時・於本会会議室
出席者　川崎小委員長ほか14名
議　事　(1)内容整理後の検討
(2)作業スケジュール

建材委員会

第1回委員会
14日・3時半～6時半・於本会会議室
出席者　和田委員長ほか17名
材料説明　建築構造用耐火鋼（FR鋼）／担当：渡辺委員
議　事　(1)第1回建材委員会開催にあたって
(2)今後の検討建材

教育委員会

第1回委員会
16日・6時～7明半・於本会会議室
出席者　片倉委員長ほか12名
議　事　(1)平成5年度正・副委員長及び幹事の選出
(2)講習会・工高生教育両小委員会の本年度の事業企画

見学会

けいはんなプラザ・住友ホール見学会
15日・1時～4時　参加者　53名

建築クラブ

第252回朝食会
13日・8時～9時半・於大阪グランドホテル
演題　「日本人と木の文化」
講師　小原　二郎氏（千葉工業大学理事・教授）

4月の入会者（敬称略）

〔団体会員1社〕
昭建工業㈱
〔個人会員11名〕

朝倉　一晃（兵庫県都市住宅部）	大上　章（兵庫県都市住宅部）	荒川竜雄（昭建工業）
磯村千恵子（大成建設）	田中　英一（大成建設）	次六　毅智（伊藤進朗建築設計事務所）
西野　一正（川崎重工業）	眞鍋　正宏（住宅・都市整備公団）	宮川　功一（フォーラム・エンジリアリング）
山口　明（京都国際建築技術専門学校）	柳澤　璋忠（久米設計）	

会員の訃報
尾崎　光造　4月13日死亡
中村　信夫　5月20日死亡
木下　國男　5月29日死亡

「建築と社会」誌21年●特集一覧——昭和47年～平成4年

「建築と社会」誌は昭和42年からA4変形判となり、特集と作品作風頁を二本柱に、シリーズものの頁を織り込み、その時の社会を反映したテーマを選んで掲載してきた。売価は980円（消費税込）。購読希望者は事務局（06—348—0635）へ。

＊は欠号

巻号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
昭和47年（53集）	冬期オリンピックと札幌	600号記念号	インテリアデザイン	都市交通問題	水利用	量産住宅の設備	一般号（桂中学）		都市住環境へのアプローチ	都市防災	第19回青年技術者	北陸のの新建築
昭和48年（54集）	建築教育	泉北ニュータウンのコミュニティ施設	大阪大林ビルディング	レジャーと施設	大阪国際ビルディング	老人コミュニティ	住宅—建築家のすまい	新用途地域制と環境	構造と施工	仕上と材料	第20回青年技術者	ヨーロッパのまちづくり
昭和49年（55集）	歴史的環境保全	明日の建築はどうなるか	保養所作品	既成市街地の住宅地整備の方策	北摂ニュータウン計画	建築生産と流通機構の変容	ビルの省エネルギ化	高層プレハブ住宅の構造設計	みどり	屋根防水工事の失敗例とその対策	第21回青年技術者	ビル防災に関する12章
昭和50年（56集）	図書館	東海の新建築	インテリア	PC板を使用した工業化住宅	社会・建築・法	都市の景観と施設	建築とプレストレストコンクリート	生活排水処理施設のあり方	人間環境としてのターミナル	騒音対策と防音材料	第22回青年技術者	集合住宅の設備
昭和51年（57集）	証言'76—建築デザインの動向	建築基礎構造の問題点	医療施設	床工法と材料	建築防災と法	市街地整備	工場建築と設備	鉄骨構造のジョイント	集住体のハードとソフト	結露防止対策と断熱材料	第23回青年技術者	設備からみた建築の問題点
昭和52年（58集）	デザインの動向—部分と全体	兵庫県—その風土と建築・建築界	●日本建築協会60周年記念号 ●ニュータウンの管理	コンクリートの品質管理と行政指導の方向	日影規制と法	身障者施設	照明設備	埋立地における構造問題—大阪南港と芦屋浜を例として	日本住宅公団と建築作品	ミニ乱開発から計画的ミニ開発へ	建築における省エネルギー化	第24回青年技術者
昭和53年（59集）	デザインの動向—新旧のコントラスト	水	医療施設—病院建築と情報システム	外壁塗装材料	電波障害と建築	組合方式による集合住宅計画	住宅設備	新しい耐震設計	CAD—設計とコンピュータ	一般号	第25回青年技術者	ビル環境
昭和54年（60集）	転換期の再開発	大阪南港ポートタウン	商業空間	コンクリートのひびわれ	日影規制	ホテル建築と情報システム	農村施設の変貌	建物の終局強度の検討	庄内のまちづくり	80年代のインテリア	第26回青年技術者	建設業の労務事情
昭和55年（61集）	80年代の都市と建築—まちづくりの歴史と展望	●今後の省エネルギーの趨勢 ●建築金物	●最近の銀行建築 ●安井建築設計事務所作品集	住宅の耐久性	建築行政と法規	最近の防水工法	都市景観とアメニティ	屋内体育施設の設備	水ぎわのまちづくり	今後の外装吹付仕上材	●第27回青年技術者 ●転機にたつマンション集合住宅	設計のための新耐震設計法
昭和56年（62集）	職能論	中国の論文—北京の都市計画	ポートピア'81	台所まわりの計画と設備	シーリング材の知識	災害と法—安全な環境をめざして	都市住宅—住まい手からの発想	●建築物と風—デザイナーのために ●日建設計作品集	住宅都市整備公団—関西における都市整備を中心とした新公団の役割	間仕切壁の性能評価	第28回青年技術者	障害者の暮らしやすい環境と設備
昭和57年（63集）	新たな商業空間の展開	省エネルギーと開口部	医療施設—地域医療と設備計画	近畿の地盤と地質	都市景観—まちなみ美観への誘い	大阪市庁舎（第一期）	音とホール建築	大スパン構造	昭和設計作品集	●絵本にみるすまいとまちづくり ●オー・エム・ホテル日航ビル	●第29回青年技術者 ●地方の庁舎建築	風土・空気と人間
昭和58年（64集）	関西の建築文化を考える	マイコンの建築への利用	多様化する運動施設	建築と品質管理	計画におけるコミュニケーションとプレゼンテーション	大阪駅とターミナルビル	維持管理と設備更新	東海の将来と文化を考えるみどりとそれをとりまく人々	オフィス・インテリアの変革	プレストレスト（鉄筋）コンクリート構造	●第30回青年技術者 ●大阪城国際文化スポーツホール	集合住宅と生活音
昭和59年（65集）	21世紀への関西—魅力あるまちづくりを問う	関西の超高層ビル	ビルのリフレッシュ—内外装補修技術の現状と発展—	建設産業とロボット開発	住環境と法制度	●まちの活性化と商業空間 ●京都駅南口（アバンティ）	消防設備のポイント		高齢化社会と生活空間	床の構工法	●第31回青年技術者 ●ディテールの思想	光応用システムと建築
昭和60年（66集）	大阪湾物語	東海の現在と近未来	●自由様式への道—建築家安井武雄 ●建築物の基礎を考える	情報化をめぐる建築・都市事情	ホール—それが生み出す文化—	建物の表情—最近の外壁材料	大阪国際見本市新会場	●建築と水の演出 ●神戸研究学園都市	都市と健康スポーツ	●接合 ●日建設計作品	●村野藤吾の一断章 ●東海特集	第32回青年技術者
昭和61年（67集）	これからの住空間—都市型集合住宅にみる	屋根—そのデザインと素材	●現代デザイン—ポストモダニズム10年 ●これからの防水工法	インテリジェントビルの建築・設備計画	自治体営繕と公共建築	●建築防災と法 ●大阪市庁舎	21世紀の住居と設備	●開発 ●ツイン21	CAD—その応用と展開	オフィス空間の構成	第33回青年技術者	インテリア・イクステンションとリニューアル
昭和62年（67集）	入浴物語	腐食	創立70周年記念号	躍動する東海へ	●貯蔵・保管施設 ●大阪府立体育会館	室内の仕上床	駅	行政建築家の可能性	シティホテルの設備	宝塚の街づくり	●建物と街並みの接点 ●昭和設計作品集	第34回青年技術者
昭和63年（69集）	ホテル物語	●軟弱地盤と基礎 ●文化と伝統—東海からの報告	●設備におけるLCCとリフレッシュ ●東畑建築事務所作品集	建物の外装リフレッシュ	都心居住	中国地方の展望とひろしまのまちなみ	21世紀への照明	制振	超高層住宅を考える	●大阪府営繕 ●集合住宅のリフレッシュ	●第35回青年技術者 ●800号記念	讀賣テレビ
昭和64年平成元年（70集）	夢をのせる輸送設備	●竹中工務店創立90周年記念 ●リゾート事情	●色の復権 ●東海の新建築と伝統技術	省力化のための材料・工法	まちづくりと法	博覧会とまちづくり	都市環境創造と設備Ⅰ	建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支店建築設計部作品集	●都市環境創造と設備Ⅱ ●ユーザー参加のハウジング	第36回青年技術者	最近の博覧会パビリオン
平成2年（71集）	商業化住宅のデザイン	ニュータウン・ルネサンス	東海の都市景観	スケール感	プレハブ住宅技術の現在と未来	国際花と緑の博覧会	建築家のための設備知識—中規模オフィスビルによるケーススタディー	高強度化多様化をめざして—設計の多様化をめざして—	やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	●都市のナイス・プレイス ●兵庫県営繕の歩み	●第37回青年技術者 ●和歌山県の展望と景観	感性の時代を迎えての外装材
平成3年（72集）	新しい都市空間づくり—I—	●オフィス・プレジャー ●新しい都市空間づくりII ●建築の風景	東海支部復活30周年記念	大阪東京海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識—複合商業ビルにおけるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局営繕部	一般号	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんでん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木—構造技術の世界— ●第38回青年技術者	●スリムでタフなコンクリート ●21世紀の住まいを考えるシンポジウム
平成4年（73集）	夢物語—人がかわる、まちがかわる—	●こだわりのインテリア ●近畿の郵政建築15年の歩み	建築とデザイン—東海支部—	建築家のための設備知識—集合高層住宅の設備システム—	地球環境時代の建築	街創り、住まい創り—住宅・都市整備公団関西支社10周年—	木構造を使ってみませんか—集成材による構造—	接着—建築分野への限りなき可能性	中国地方の街並みと建築家の「語り、夢、作品」	●屋台—仮設の魅力に学ぶ— ●ハウジングのメインストリームを探る	いま建築教育に何が期待されているのか	京のかたちと色—京都支部創設45周年記念—

室谷

内装不燃材

室谷商事株式会社

本社　神戸市中央区三宮町3−7−6(神戸フクトクビル5階)
電話　神戸(331) 0881〜3
支店　大阪市北区西天満2丁目6番8号(堂ビル5階)
電話　大阪(364) 2031〜4
倉庫　神戸市東灘区御影石町4丁目（電話811-3610)

OM

テトカッパー防水層

カッパー防水帯——コーパータイト／オクロン防水帯
資料をご請求下さい。

奥山化工業株式会社

本　社 東京都中央区銀座8-4-9 奥山ビル　TEL03(3571)2703㈹ FAX03(3571)0264
大阪事務所TEL06(391)1081−2FAX 06(395)2109　名古屋出張所TEL052(811)3660
横浜営業所TEL045(320)4832　FAX045(320)4765　厚木出張所TEL0462(21)1761FAX0462(23)1341
埼玉営業所TEL048(774)2845　茨城出張所TEL0292(28)0878FAX0292(28)2614

新しい時代の、新しい扉をひらきたい。

TOYO Shutter

東洋シヤッター株式会社

本　社　〒540 大阪市中央区常盤町1−3−8（日本生命谷町ビル）
TEL(06)943−6571(代)
■東京/横浜/盛岡/仙台/水戸/静岡/岡崎/名古屋/富山/大津/京都/神戸/広島/高松/福岡/他全国主要都市

学校建築のトータルアドバイザー

二葉工業株式会社

黒　板・掲示板・家　具
電動黒板装置・サイン・スクリーン
〒547 大阪市平野区加美北3−4−5
TEL06(792)5858　FAX06(792)2810

＊奉仕感謝の店

タイル及び規格石一式施工

株式会社 川岸窯業商店

本　社　大阪市西区西本町1の13の33
TEL.06−532−0461(代表)
FAX.06−535−5181
天理営業所　天理市丹波市新町49

ND
JAPAN ELECTRIC TYPESETTING CO.,LTD.

■情報処理　■編集・企画　■印刷・製本

日本電植株式会社

〒530 大阪市北区天満1-7-23
TEL.06(357)1803㈹　FAX.06(357)4950



奥郷屋敷(四国高松市)
株竹中工務店施工

〒556 大阪市浪速区塩草一丁目二番三号
ナニワ瓦株式会社
あらゆる屋根工事の相談は、
☎ 五六一〜七四一六
ファックス 五六一〜七四五四

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59 電話 06(302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

商品は空気です。

熱と空気のエンジニア
株式会社
大気社

●営業種目
空気調和設備　給排水衛生設備　塗装設備　公害防止関連設備の設計・製作・施工

本社・東京本店　東京都新宿区西新宿2-6-1　☎03－3344－1851(大代)　大阪本社☎06－448－3603(代)
大阪支社 ☎06－448－5851(代)　名古屋支店 ☎052－211－1535(代)　中国支店 ☎082－247－5541
九州支店 ☎092－431－2147(代)　営業所：北関東・横浜・神戸・京都・岡山・四国

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒650 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)441-8231
東京本社　〒102 東京都千代田区富士見2丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

空気調和　搬送機設備
給排水衛生　設計施工

人に優しい環境づくり

第一工業株式会社

大阪支店　〒530 大阪市北区西天満3丁目6番14号
電話　06－364－6661(代表)
本　　社　〒100 東京都千代田区丸の内3丁目3番1号
電話　03－3211－8511(代表)

空気調和設備　産業設備
給排水設備　水処理施設
電気設備　環境施設

三機工業株式会社

取締役社長　白谷清二
大阪支店長　三田村嘉也

大阪支店　大阪市中央区北浜2－2－21　電話06(202)3071(代表)
本　　店　東京都千代田区有楽町1-4-1　電話03(3502)6111(大代)
支　　店　名古屋・九州・北海道・中国・東北・北陸・四国

ガス設備の設計・施工のご相談は
大阪ガス指定工事会社・大阪ガス住設機器特約店

大晃設備株式会社

本　　社
大阪営業所　大阪市此花区西九条2丁目13番28号 電 06－466－2268
枚方営業所　枚方市甲斐田東町9－3 電0720－49－2128

空気調和設備
衛生設備設計施工

三建設備工業株式會社

大阪支店　大阪市北区紅梅町3番5号　電話（352）1131代
本　　社　東京都中央区日本橋蠣殻町2－22　電話(3667)3431(大代)
支　　社　名古屋・仙台・札幌・広島・福岡・金沢・新潟・横浜

給・排水・衛生・消火・空調設備

株式会社 西原衛生工業所大阪店

大阪市北区中津6丁目8番4号　電話大阪(458)3628番
支店・営業所　福岡・京都・天理・川西・神戸

空気調和・衛生設備・設計施工

株式会社　三晃空調

本　　社　大阪市中央区城見2丁目1番61号ツイン21MIDタワー　電話 06－949－1371
東京本店　東京都新宿区西新宿　新宿住友ビル　電話03－3344－1911
大阪本店　大阪市北区西天満4丁目6番18号　電話 06－363－1371
支　　店　仙台・横浜・名古屋・京都・神戸・広島・福岡
営業所　札幌・松江
出張所　青森・秋田・盛岡・大宮・千葉・川崎・富山・福井・和歌山・鳥取・岡山・高松・下関・熊本・鹿児島・沖縄

空調・衛生・防災設備　設計並施工

日本管工業株式会社

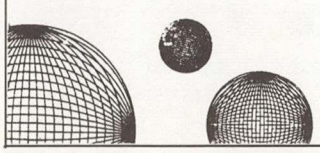
本社及京都支店　京都市南区西九条豊田町20番地の1
電話(681)5101～5・夜間専用(691)1045
大阪支店　大阪市北区天満1-5-20　電話 (06)352-3501(代)
三重支店　津市栄町2－111　電話(0592)26-3610(代)
四日市営業所　四日市市西末広町　電話(0593)53-7431(代)
滋賀営業所　大津市中央2丁目4-28　電話(0775)22-9738(代)

空調衛生・冷凍冷蔵・地盤凍結
よりよき環境へ技術で挑む

株式会社精研

本　　社　大阪市中央区瓦屋町2丁目11番16号(オートセンタービル1・2階)
郵便番号542　電話 大阪（06）768－5031　代表
メンテナンス部　電　話　大阪（06）768－1651　代表
東京支店　東京都文京区小石川1丁目12番14号（日本生命小石川ビル7階）
郵便番号112　電話（03）5689－2351代表

大規模空間（天井金属パネル）に
地球を入れることはできませんが
地球規模の夢を入れることはできます
内外装創作パネル・システム天井・間仕切



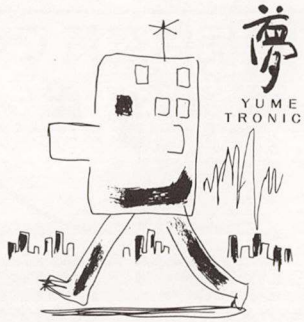
OKUJU
スペース　クリエイター

本　社
大阪市北区西天満5丁目3番7号 〒530
TEL(06)312-4131　FAX(06)312-7998
東京・九州・横浜・名古屋・仙台・宮崎・京都

株式会社オクジュー

さわやかに心豊かな生活空間つくり。

夢 YUME TRONICS



— 電気・計装・空調・土木 —

K栗原工業株式会社

本社／〒530 大阪市北区角田町1番1号(東阪急ビル)
TEL. 06(313)1101 FAX. 06(315)0050
東京・東関東・横浜・名古屋・大阪南・神戸・広島・四国・九州・シンガポール

Carrier 冷暖房はCARRIER キャリア

東洋キヤリア工業㈱デストビューター関西地区

日本冷熱工産株式会社

本社及大阪営業所 吹田市豊津町40番38号
電話 大阪 (384) 1201～7

電気工事設計施工

株式会社 三興社

代表取締役 土井敏裕

本 社 大阪市北区西天満2丁目6－8(堂ビル5階)
電 話 06(361)3671(代)
支 店 東京都中央区日本橋茅場町2丁目17番3号
電 話 03(3666)1478(代)
営業所 堺・泉州・泉南・滋賀

人と都市の快適な環境をつくります

営業種目 設計・施工・監理

●電気設備
受変電・幹線
動力・制御装置
電話、放送、インターホン
防犯、防災
中央監視制御
システム計装

●空調・給排水・衛生設備
空気調和
工場配管
水処理
コージェネレーション
クリーンルーム

●プラント
プラント計装
システムエンジニアリング

●情報通信設備
情報通信ネットワーク
情報処理
通信システム
放送システム

●電力流通設備
受変電
架空送配電
地中送配電

まちと暮らしにあふれるクリエイティブカンパニーをめざす。

住友電設株式会社 大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 ☎(06) 537-3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 ☎(03)3454-7311

電気設備・計装制御設備・空調設備・クリーンルーム設備・プラント設備
給排水衛生設備・エネルギー集中監視システム…設計施工

三宝電機株式会社

取締役社長 嘉納秀一

本社	〒530 大阪市北区西天満2-6-8(堂ビル)	TEL 06(364)1471・FAX 06(364)5533
東京支社	〒105 東京都港区新橋2-16(ニュー新橋ビル)	TEL.03(3504)0231・FAX 03(504)0268
名古屋支店	〒462 名古屋市北区金城3-12-14	TEL.052(991)5131・FAX052(914)7535
神戸支店	〒657 神戸市灘区岩屋中町1-2-9(エビスビル)	TEL.078(881)5571・FAX078(871)6261
堺研究所	〒590 大阪府堺市三宝町七丁369	TEL.0722(27)8408・FAX0722(27)1424

電気設備 設計施工

朝陽電気株式会社

代表取締役 山本貴士

本 社 大阪市北区中之島3－2－4 朝日ビル TEL 大阪06 (385)1361(代)
大阪営業所 TEL 大阪06(385)1361(代) 京都営業所 TEL 京都075(311)1185(代)
東京営業所 TEL 東京03(3574)0665 福岡出張所 TEL 福岡092(771)6168

特殊壁装材製造販売 和室に最適

●聚楽壁紙 ●ホクシノン(無機質壁紙)

(株)ホクシンクロス

〒583 大阪府羽曳野市島泉8－173－1
TEL(0729)39－3610

工場 〒580 大阪府松原市三宅中8丁目1番9号
第一 〒639-11奈良県大和郡山市小泉町2744
第二 〒597 大阪府貝塚市王子501

電気設備工事設計施工

東光電気工事株式会社

関西支社

支社長 馬田栄

大阪市中央区高麗橋4丁目3番7号 電話 大阪 (202)0325～9番
本 社 東京都千代田区西神田1丁目4番5号
支 社 北海道・東北・丸ノ内・新宿・神奈川・東関東・中部・九州

省エネルギー時代の断熱用シート防水材

日立バイナリーシートP

日立バイナリーシートPは，日立防水シートに発泡ポリエチレンを独自の貼り合わせ技術で積層した，二重構造の断熱兼用二重防水シートです。

日立電線株式會社 本社 東京都千代田区丸の内2丁目1番2号(千代田ビル)

Construction chemistry for the future.

コンクリート用混和剤／コンクリート用補修材
高性能無収縮材／コンクリート用高性能床材

Master Builders Technologies

株式会社 エヌエムビー
株式会社 ポゾリス物産

本 社：東京都港区六本木3－16－26
大阪支店：大阪市中央区北浜3-2-23(信愛ビル)
TEL06-202-3294

技術と信頼で人と企業に貢献する

青葉印刷株式会社

代表取締役社長 依藤孝行

〒534 大阪市都島区中野町2丁目10番11号 TEL(06)351－5428(代)
FAX(06)351－5299



デンカCSAファミリー製品

- **デンカCSA**（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
- **デンカタスコン**（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
- **デンカキューテックス**（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
- **デンカES**（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
- **デンカΣ1000**（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・綱野（07727）2－2220
舞鶴（0773）76－0133

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）332－6861
TEL 東京（03）3272－8501

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）443－6181

光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）252－6000

東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（0775）83－2381
TEL 大阪（06）877－1581

建築と社会
第74輯6号

屋根が語る、新しい家づくりのはじまり。



くっきり、鮮やか。

――屋根はいま、新しい表情をもった

三星フネンシングルは、ガラスマット100%の芯材と耐候性にきわめて優れた特殊合成樹脂混入無機物からなる不燃認定を受けた屋根仕上げ材です。
耐久性、柔軟性に優れ、表面は環境に調和する彩色砂粒を圧着してあります。軽量にもかかわらず風に対しても十分な安全性を持っています。どの様な形状の屋根にも容易な施工が可能です。
不燃性とソフトな化粧性を合せ持ち、下葺防水材との防水システムの併用も合まって、屋根仕上材の自信作です。
現代感覚あふれる超モダンな屋根から純和風屋根にいたるまであらゆる屋根にセンス良く調和します。

建設大臣認定 不燃(個)第1552号
三星フネンシングル
一文字
サティオン

西日本三星シングル工事協同組合
田島ルーフィング株式会社

大阪 〒550 大阪市西区京町堀1-10-5 TEL06(443)0431
神戸 〒650 神戸市中央区栄町通5-1-22 日宝栄町ビル TEL078(362)6121
広島 〒730 広島市中区西平塚町8-13 立駐広島ビル TEL082(246)8625
福岡 〒810 福岡市中央区薬院4-2-11 TEL092(521)3133
東京 〒101 東京都千代田区岩本町3-11-13 TEL03(3862)8531

社団法人 日本建築協会 〒530 大阪市北区梅田1の1の3の2100 電話大阪06(348)0635 FAX06(348)0634
振替口座大阪一三九七五番
正会員の購読料は会費に含めて徴収
定価九八〇円（本体九五一円 消費税一九円 送料共）
雑誌03379-6